

ルーテル遠慮してアッゲスブルグに滞在す

新教諸侯の強硬

舊教徒の辨駁

於て大同小異なるを舉示し。以て皇帝が彼等に對して執らんとする政策を温和ならしめんとするに在りしなり。ルーテルは皇帝の禁令未だ解除せざりしを以て、公然此國會に列席する能はず。その開會中は、サキソニア州の南端なるコーブルグに滞在して必要の諮問に應じたり。此地には選侯の城あり。アウグスブルグより四日程の處なり。彼は頗る強硬論者にして、メラנקトンの調和的態度に關して尠からざる杞憂を抱き、屢々激烈なる勸告を予へたり。羅馬方の諸侯も亦甚だ強硬にして、如何なる信仰の告白をなし辯解を試むるも、新教徒と再び提携せん事を願はざる意氣込を示せり。皇帝は此兩者の間に立ちて猶穩かに局を結ばんと欲せしを以て、新教徒が其信仰告白書を國會議場に於て朗讀せざらんやうに斡旋の勞を執られしも、其効なく、六月二十五日終にを公けに披露したり。舊教徒は之に對して反駁を試みざるべからず。嘗てルーテルと討論せしインゴルスタットのエツケ博士、フアーベル監督及びコホリオス等は之れが起

草の任に當れり。勿論カムペギオ僧正の意見が重味を有せしこと疑を容れず。彼等は皆調和説に反對の人々なり。帝は彼等の起草せし辨駁書を五たび書き直さしめ、漸く六回目ものを朗讀せしめ給ひしが、是とて帝の所望と相去ること遠く、八月三日その書の朗讀せらるゝや。兩派の立場愈々鮮明となり、調停の困難を加へぬ。

アークヘル、ツツンゲン、グリンゲン、ライトリンゲン、ロイトリンゲンの兩市は、信仰告白に調印せしが、ツツンゲン派に屬せし南方の諸市は之に加はらず。否實は加はる事を許されざりしなり。是に於てかストラスブルグと他の三市はアークヘルに依頼して、別に信仰告白書を起草せしめ、之を陛下の手許に提出し、ツツンゲン自身も頗る無遠慮なる信仰告白書を贈れり。ツツンゲンの告白書は、メラנקトンの起草せしものと全く正反對の旨意に由りて草せられしものにて、メ氏は之を一讀して憤激の餘りツツンゲンは狂せりといへりしほごなり。兎に角調和主義の皇帝は、楚歌を四面に聽きてその措置に當惑せり。少しづゝ双

草の任に當れり。勿論カムペギオ僧正の意見が重味を有せしこと疑を容れず。彼等は皆調和説に反對の人々なり。帝は彼等の起草せし辨駁書を五たび書き直さしめ、漸く六回目ものを朗讀せしめ給ひしが、是とて帝の所望と相去ること遠く、八月三日その書の朗讀せらるゝや。兩派の立場愈々鮮明となり、調停の困難を加へぬ。



方より讓步せしめて、調停の目的を遂げん事は、帝の希望にして、又新教徒の多數も稍其説に傾きしが、最大の難物は、新教諸侯に非ずして舊教諸侯なり。彼等の中には、帝の政治上の措置に對して不満を懐ける者あり。彼等はカロロの權力の過大ならん事を欲せず。有力なるパリア侯の如きは、皇帝フェルチナンドがローマ人の王(東宮)たらん事を暗々裡に妨げんとせしなり。假令帝が強硬の態度を執り、武力を以て新教徒を壓迫せんとするとも、彼等は全幅の力を盡して帝を援けざるなるべし。密かに此般の消息を知れるが故に、帝の空威嚇に對して新教徒は平然たり。要するに双方とも未だ宗教問題のために開戦せんとする決心なく、又開戦するの不利益なるを知れり。左れば剩す所調停の一途あるのみ。會議は週一週と遷延して、宴會、舞踏會、武藝の仕合等盛んに舉行せられ、新舊兩派の議員等席を連ねて歡を盡し、杯盤狼藉の中に夜を深かせし事度々なりしが、冷靜なる政治家の胸臆を叩けば、是亦融和の一法に外ならざりしなるべし。

忙中閑を示すは外交の極意

メラククトンの軟化とルーテルの獅子吼

メ氏男を鼓して舊教徒の辨ふ駁に反駁を加

調和の望絶へたり

政界の天候は秋の空に似たり。一時絶望と見えし調和運動は、再び長足の進歩を爲し、メラククトンは歩一歩づゝ譲りて、將に法王の無上權をさへ承認するに至らんとす。之を聽きて憤慨せるルーテルは、コーフルグ城より獅子吼を爲しぬ。キリストとペリアル(惡魔)の調和すべからざる如く、ルーテルと法王とは到底融和すべからずと叫べり。非戰論者なるルーテルも、無主義無節操の讓步を爲さんよりは寧ろ戦ふに若かずと信せり。此時諸侯の態度は、神學者よりも遙かに強硬なりき。ヨハン選侯とヘツセン伯その翹楚たり。危ぶく軟化し了はらんとせしメラククトンも再び元氣を復し、一技の筆に力を込めて舊教徒の辨駁書に反對を加へたり。此反駁書は前の告白に七倍せる長篇なり。文字活躍。意志剛堅。鮮かに前日の態度の一變せしを見るに足れり。

今や調和の希望も霞の如く消えて、また策の施すべきなし。舊教徒はその多數を頼み斷然決議案を通過せり。其決議は畧ほ第二スバ



新教徒驟然退場す

イエル國會の決議と同様なり。新教諸侯が此決議を容るゝや否や。明年四月十五日までに確答すべき事を求めしに、彼等は十四の市と共にアウグスブルグも其中に在り其議場に於て直ちに抗議を宣告し、驟然袂を連ねて議場を去り、各自歸國の途に上れり。その後舊教方は能く一致してヴォルムスの勅令實施の事。僧侶の政權を從來の儘とし、沒収されたる寺院の財産は之を舊の如く取戻すべき事。一時廢せられし皇帝直轄の高等法院 (Reichskammergericht) を回復し、獨逸國內の訟訴事件を裁斷すべき事の三件を決議し、十一月十九日閉會を告げたり。以上の決議は何れも新教徒に取りて不利益にして、殊に最後の決議はその影響直接にして且重大なり。新教諸侯は素よりかゝる決議に服するの意なし。然らば如何なる方法に由りて自家の權利を守護し、その主張を貫くべきか。次ぎに舒せんとするシユマルカルデン同盟は、即ち彼等の防禦策なり。

舊教徒の決議案

第十七章

シユマルカルデン同盟—ニユルンベルグの秘密和約—ユルテンベルグの恢復

新教徒の自衛策

アウグスブルグ國會に於ける舊教徒の決議は、新教徒の立場を危からしめたるが故に、彼等は毅然として之に抗議せり。然れども帝及び舊教諸侯が兵力に訴へてその決議を遂行せんとする時は如何。新教徒は宜しく其主義主張を貫徹せん爲に、自衛の策を講せざるべからず。是に於てか新教諸侯及び諸市は、一五三〇年十二月下旬と翌年の二月、再度シユマルカルデンに會合して、防禦同盟を締結したり。サキソニア選侯ヘッセン伯外二三の諸侯と十一市之に調印せしが、フランデニアブルグのゲオルグ伯と、ニユルンベルグ市とは、隣踏して之に加はら

防禦同盟成る



す。一時中立の地位に立ちぬ。不思議なるは、皇帝の推測に反して南方の諸市が此同盟に加入せし事なり。マルブルクの會見が不調和に了りし後、ルーテルはツ井ングリー派に對して、稍温和なる態度を執り、之と接近せんと欲せしが、ツ井ングリーは之に反して以前よりも一層強硬となりぬ。ツ井ングリーを推戴せる南方の諸市は、ウ井テンベルヒに背きて、ツトリツヒに與みせん事を冀ひ、往々聖像聖繪を破毀するなどの暴動を起せり。然るに一五三一年の十月瑞西の兩教徒間に戦争起り、ツ井ングリー戦死せしを以て、局面忽ち一變したり。ツ井ングリーの死せし爲に瑞西新教徒の勢力は大頓挫を來せり。夫より十年の後、カルヴ井ン佛國より來りてその頽勢を挽回するに及びて、再興の氣運に向ひし事は、予之を第五編に詳述すべし。扱南獨逸の諸市は、アーケル指導の下に愈々ルーテル派との提携を固くしたり。左はいへ此合同は主として政治的必要に餘儀なくされて成立せしものなれば、教義上の相違はその表面の一致に拘はらず、漸次著しく

一五三一年ツ井ンケリーに戦死す

南北獨逸の政略的提携と教義上の相違

なり、南北各異りたる特色を發揮するに至れり。

カロロは性來思慮綿密にして、優柔不斷の弊に陥り易き方なりしが、アウグスブルク國會の前後は、決斷力を缺きしは罕なり。皇帝の躊躇せるに乗じて、新教諸侯及び諸市が能く一致團結して機先を制せしは、吾人の刮目して注意すべき點なり。若し當時の團結力にして永く維持せられたらんに、一五四六七年のシュマルカルテン戦争に於けるが如き、不面目千萬なる敗績を爲さざりしや必せり。一五三〇年以後、一五四六年に至るまでの十六年間の歴史は、政治上宗教上及び社會上の事變錯綜紛糾して頗る複雑なる現象を呈するが故に。予は年次に順ふてその概要を舒し、併せてその時代の大勢に説き及ぼさんと欲す。

若し帝及び舊教諸侯にして、新教徒に對して斷乎たる處置を執るべくんば、一五三一年の春こそ最良の時機なりしなれ。何となればアウグスブルク國會が新教徒に與へたる恩惠的猶豫は、四月末日を以て盡

一五四六七年新教の原因不在



カロロ帝國路  
して時機を逸  
す

帝獨逸に來る  
能はざりしこ  
ろ九皇霜に及  
べり

新教徒一大政  
黨となりて地  
方分權の主張  
を唱ふ

きたればなり。然るに帝は此策に出でず。反て新教徒に讓歩すべき方針を採りき。勿論帝がかゝる處置を爲し、は舊教徒中に一致を缺き、或は暗に帝に反對せんとせし者ありしに由ると雖も、好機一たび逸してまた還へらず。爾來十五年カロロは兵馬倥偬の間に馳騁し、再び土軍と戦ひ、再び亞弗利加の海賊を討ち、又再び佛朗西と戦を交へ、獨逸の政治に充分の注意を拂ふべき暇なからんとす。實に一五三二年の秋、帝が伊太利を経て西班牙に歸りしより九個年間は、獨逸の地を踏むべき機會さへなかりしなり。

ヘツセン伯とサキソニア選侯を首長に戴けるシュマルカルデン同盟は、漸次その同盟者を増加して勢力愈々強大となりぬ。プロテスタント教徒は、今や一宗派たるに止まらずして、一大政黨たり。彼等はハプスブルグ家の中央集權主義に反對して、地方分權主義を助長せんとす。動もすれば、彼等は佛國のユゲノーの如く、帝國の中に更に獨立の小帝國を造らんとするなり。該同盟は既に儼然たる一敵國たり。彼

外國との提携  
將來獨逸に災  
厄の種子を蒔  
く

等は英國、デンマルク、ヴェニス、將たハプスブルグ家の勁敵なる佛國とも提携せんとす。即ち獨逸國內に於て自家の主張を貫かんとするに止まらず。歐洲全體に之を扶植せんと欲するなり。勿論、上擧の邦々との提携は、有力なる諸侯等の自由行動にして、シュマルカルデン同盟そのものが衝に當りしにあらず。且其動機が宗教的ならずして政治的なりし事、固より疑を容れざれども、兎に角獨逸の爲に一、大災厄の種子を蒔きしものと謂はざるべからず。何となれば最初國民的運動として起りたる宗教改革が、全國民を統一する能はず。反て國家の分裂を來し、甚しきは外國の干渉を招かんとする惡例を後世に貽したればなり。未來に顯はれんとする這般の不幸なる結果を暫く別問題として觀るときは、シュマルカルデン同盟の勢力は、一時天下を風靡せんとする概ありしなり。

一五三二年の春、土軍また西侵せしを以て、帝は舊教徒が切りにアウグスブルグの決議を實行せよと迫るに拘はらず、七月下旬、密かにニ



ニルンベルクの秘密和約

ユルンベルグに於て新教徒と秘密和約を結べり。帝は此和約中に、高等法院に提出せられし新教徒に對する訴訟事件は、一切之を取合はざる事。且宗教大會の開會せらるゝまでは兵力を用ゐざる事等を約束したり。新教諸侯は此約束に對して、帝の土軍擊退に援助すべき事を承諾したり。

ソリーマン二世の再四侵

土軍優勢を張る

是より先き土耳其の英主ソリーマン二世は、一五二九年ウヰエンナに敗れて空しく退却せし事を遺恨に思ひ、會稽の耻を雪がん爲に出師の用意を爲しつゝありき。フェルチナンド大侯は、種々なる條件を附してその侵襲を中止せしめんと圖りしが、ソリーマンは悉く其申込を拒絶し、四月下旬より進軍し初めたり。軍勢二十五萬と號せしも、それは所謂支那流の虚勢を張りしものにして、實はその半数に過ぎざりしならん。而も稀代の勇將之を率ゐしが故に、決して悔るべからず。大侯は援を皇兄カロロに求め、帝は前に述べし如く新教徒と和を構じ、兩派諸侯の協力を得て、約八萬の軍隊を指揮し、首尾よく獐猛なる土軍を

帝が土軍を追  
せざりし理  
由

帝の目算二つ  
ながら外づる

擊退するを得たり。然るに此時帝は纔かにソリーマンの軍を擊退せしのみにて、敵を追窮して以て、フェルチナンドの爲にハンガリーの領有權を確實にする事をせず、急に軍隊を解散せしは一見奇異の觀ありと雖も、實は深き仔細ありしなり。其仔細一にして足らず。その中重なる理由は、恰も交渉中なりし法王クレメント七世(一五二三—一五三四年)と佛王フランシス一世の提携を中止せしめ、且法王が克蘭マーをカンターベリー大監督に任命する事を妨ぐるに在りしなり。帝は急ぎて伊太利に歸り、百方其策を用ゐしに拘はらず、兩つながらその目的を達する能はざりき。法王と佛王とは同盟を結び、法王の姪カタリナドメデチをフランシスの子ヘンリに嫁せしむべき内約成立せしのみならず。克蘭マーも亦カンターベリー大監督に擧げられ、ヘンリ八世の爲にカザリン皇后の離婚を决行せしむる事となれり。カロロは獨逸に留ること二年、未だ宗教問題の解決を見る能はずして、再び伊太利政局の難問題を處置すべき事となりぬ。意氣揚々として獨

先きには揚々  
後には悄然



逸に入りし帝は、悄然として伊太利に還りぬ。加之獨逸帝國に於けるハプスブルグ家の地位も亦將に困難に陥らんとす。

帝獨逸國會に於て解決する能はざりし問題に由りて解決せんす

一五二一年以來獨逸國會は、營々として宗教問題の解決に盡力せしが、終に双方を満足すべき調停の途無き事明瞭となりぬ。是に於てか皇帝はヴォルムス會議以來、屢々新教方の要求せし宗教大會に由りて、該問題を落着せしめんと欲したり。帝は此事を法王に交渉せしに、クレメント七世はバセル宗教大會の昔を回顧して、再び宗教界に大波瀾を生せんことを恐れ、容易に帝に應諾を予へず。終に一策を案出し、一五三三年の夏、勅使をガキソニア選侯ヨハンフリードリツヒヨハン侯は一五三二年八月死去せられ、その子位を嗣ぐ。ヨハンフリードリツヒ即ち此人に遣し。若し宗教大會を開く場合には、その會議に於て定めたる決議には、新教徒必ず服従すべしといふ確答を、シュマルカルテン同盟者一同より申出でん事を望む旨を傳へしめたり。此の如き言質を敵に握らしむる事は、新教徒に取りて危険千萬なり。左れど

帝と新教徒との外交的押問答

巧妙なる返答

表面上之を拒絶するは、從來の主張に對し、稍々不似合の觀あれば、彼等は到底法王の應ずる能はざる條件を提出し、若し此條件にして容れらるれば、大會の決議に従はむと答へしが、そは實際不承知を唱ふる事と擇ぶ所なかりしなり。要するに改革運動は、既に已に長足の進歩を爲し、を以て、今更宗教大會の決議に由りて如何とも爲し難き状況に進み居りしなり。新教徒が宗教大會召集に反對するや。此時皇帝の使者たりしヘルドは、全力を盡して舊教諸侯の同盟を組織し、一五三八年の春に至りて署名済となりぬ。此同盟は舊教方を悉く網羅せしにあらず。尙又新舊何れにも屬せずして中立の地位を保ちし者もありしが、兩派の勢力漸く相平均して早晚衝突を免れ難き有様となりぬ。曩きにニュルンベルグに於ける秘密和約に由りて、高等法院に提出せらるゝ對新教徒の訴訟事件は、一切握り潰すこととなりしが。その後此問題に關し、皇帝と新教徒間に意見の衝突を生じ、由々しき大事ともならんとせし折柄。新教徒の勢力を激増すべき一大事件發生



ユルテンベルグ取戻の件

ウルリッヒの復讐心とヘッセン伯の野心  
兩々相照らす

ラウフェンの勝利

したり。ユルテンベルグ領取戻しの件是なり。抑も南獨逸には二大勢力あり。一はババリアにして代々ハプスブルグ家に反抗し、他はスワビア黨にして塊太利の御味方黨なり。ユルテンベルグの領主ウルリッヒは、一五一九年スワビア黨の爲に逐はれ、カロロ大侯皇帝となりし前大侯と稱したり、其領地を併有し、後轉じて皇弟フェルチナンドの有に歸せしが、ウルリッヒは遺恨遺る方なく、如何にもして之を取戻さんと欲し、再び事を計りて成らず。轆轤落魄、竟に新教に改宗し、ヘッセン伯の城中に客となりぬ。野心勃々たる伯は、私かに奇貨置くべしと爲し、氣運の發展を待ちつゝありしに、ユルテンベルグに於ける塊太利家の政治宜しからず。人民は舊主の善政を慕へり。一五三二年捕虜となりて久しく敵地に幽せられしウルリッヒの子クリストフオル逃亡して父を扶けんとす。是に於てかフ井リッパは佛王より軍資を給せられて急に兵を擧げ、難なく塊軍をラウフェンに破り、一五三四年の六月カーデンに和約を結び、ウルリッヒをして其舊領地を恢復

ウルリッヒの領地を恢復し、新教に加盟す

シュマルカルデン同盟勢力の振ふ

せしめたり。ユルテンベルグ乃ちヘッセン伯を徳として新教に加盟す。此時の和約に由りてフェルチナンド大侯は、カロロが薨きに新教徒と結びしニルンベルグの密約を公認し、新教徒も亦大侯が皇儲たるべき事を承認したり。ユルテンベルグを取戻して之をシュマルカルデン同盟に入らしめし事は、フザリッパの一大功勞として稱揚すべきなり。是より二年の後、スワビア同盟解散せしを以て、シュマルカルデン同盟の勢力殆ど全帝國を壓せんことす。一時兩派の争點となりしアウグスブルグ、マイン河畔のフランクフルト、ハンアルグ等の諸市、及びボメラニア、パノーヴェルも相續いで此同盟に加はりぬ。此の如く政治上の團結愈々鞏固となりし時に方り、南獨逸の神學者等の發議に由り、神學上の意見の統一を圖らん爲協議會を催ふし、唯晩餐式に關する教理の一項を除き、自餘の點に於ては悉く同意し、アウグスブルグの信仰告白書及び其反駁書を承認する事に一致し、一五三六年六月調印濟みとなりぬ。此會合はアイゼナツハに開會の



ウヰッテンベルクの盟約

豫定なりしが、ルーテルが俄かに發病せし爲め、打合せの便利を計り、急にウ市に移す事となりしなり。故にウヰッテンベルクの盟約コンコルダトといふ。此時南方諸市の代表者中最も勢力ありしは、フリーケルなりき。

### 第十八章

### 再洗禮派革命騒動の失敗—

### リューベック市の黨争

ユルテンベルグ戦争が、案外速かに片付きて、カーテン和約の締結を情に終結せし事

ユルテンベルグ戦争が、案外速かに片付きて、カーテン和約の締結を見しは、ヘッセン伯のお手際のみに歸すべからず。若し獨逸に於ける新舊兩教徒が相分れて劇戦久しきに涉るときは、佛王は漁夫の利を占めんとするの虞あり。且又舊教領なるミュンステルと新教領なるリューベックに、方きに革命騒動の起りつゝありしことは、休戦を促すに

再洗禮派の餘黨尙ほきす

再洗禮派の非難する論理に適合す

該派の主張の破綻的なる一面

更に切迫なる原因たりしや必せり。

一五二五年北獨逸に於ける農民の叛亂が鎮定せられし後、再洗禮派の説と、その革命的思想とは、依然として下層の社會に浸潤しつゝありしなり。不平不満を懐ける輩は喜んで之を歓迎し、その力を藉りて自己の社會的狀態を改良し得べしと夢想しつゝありしなり。彼等はルーテルの改革を以て手緩るしと爲し、殊に教會の主權を貴族の手に委ねたる事を非難し、意志の自由を無視せるを駁撃し、中には彼を罵りて、法王を倒して自ら第二の法王となれりともまで痛評せし者あり。再洗禮派の説く所若し宗教問題に限局せらるれば則ち止む。使徒行傳に基きて、共產主義を唱へ。黙示録に據りて千年王國—新しきエルサレムの實現を期し。創世紀の記事を盾として多妻主義—甚しきは妻女共有の説を主張し。而も今日の唱ふる所は、明日之を實行に附せんとするに至ては、是れ實に亂暴狂氣の沙汰にして、社會の秩序と國家の安寧を顧みざる者と見做さるべからず。此の如き詭激なる



爲政者に蝸蟻  
視せらる

再洗禮派の一  
巨魁ハーマ  
ンの説

政治論は、宗教上の迷信と混合して、不平ある人民の胸裡に醗酵しつゝ、ありしが、一五二九年以來、獨逸の西北部に於て、屢々其破裂を見るに至れり。就中ミュンステルとリュューベックに起りし騒動を最も激烈と爲す。新舊兩派の別ちなく、行政官は是等の迷信的空想家を恐れ且憎みて、彼等を迫害せしかば、刑場に死せし者千人以上に及べり。

一五四三年ストラヌアルグの獄中に死せし、革商人メルヒオルホーフマンは、再洗禮派の一巨魁なり。彼は始め過激なるルーテランと目せられしが、一五二九年の頃、断然再洗禮派に歸依したり。彼は、リヴオニア、瑞典、ホルスタイン等を遍歴して説教せしが、其説荒唐にして突飛なるが爲に、何れの市にも永く留まることを許されず。終に東フリースランドを経て、ストラヌアルグ市に來れり。彼は僧俗の區別を認めず。俗人も説教すべき資格ありと唱へ。又主の再來近きにあらん事を豫言し。自らはその準備として世界に福音を宣傳すべき豫言者なりと公言せり。ストラヌアルグ市廳彼を捕へて囹圄に投ず。

ミュンステル  
市再洗禮派の  
中心となる

フランシス監  
督兵力に由り  
す該市を占領

彼は獄中にありたれども、その弟子等各々豫言者と自稱してその説を宣傳したり。司政者は彼等を迫害したれども、迫害は反て其主張を激烈ならしめしのみ。東フリースランドより和蘭に傳播し、ミュンステル市は其中心となりぬ。蓋し該市は容易く再洗禮派の占領に歸したればなり。その後豫言者の仲間に入りしクニツペルドリングは時計師なり。彼等は暴力を以て、ミュンステル市の司法行政權を奪ひ、該市を新しきエルサレムと宣言し、直ちに其平生の主張を實現せんとす。多妻主義と共產主義の實施せられんとするや。資産ある中流以上の人民は、甚しく戦慄し、密かに逃亡せし者衆し。元該市の監督たりしフランシス、兵を率ゐて來り攻む。妄執の徒、狼狽の餘り、愈々狂暴を逞ふす。フランシス屢々撃退せられしも、隣國の援兵加はるに及びて、漸く優勢を占め、一五三五年六月二十六日に至りて、終に該市を恢復することを得たり。自稱豫言者中、戦死せし者の外は、概ね生擒せられたり。その處刑法頗る残忍を極む。ミュンステル市は全く舊教に歸し了り



ぬ。新教は此市を失ひしと雖も此暴徒鎮壓に由りて蒙りたる間接の利益は莫大なりき。再洗禮派は諸國に散亂して、尙その餘燼を存せしが、その初期に顯はれたる夢幻的又革命的の分子は、漸次消滅して、穩健なる發展を爲すに至れり。

一五五九年世を逝りしフリースランド人マンノーシモンズは、その後英米に起りしバプチスト派の率先者なり。彼は元加特力教の僧なりしが、再洗禮派の一殉教者が泰然自若として死に就きし有様を看て大に感發し、熱心に聖書を研究せし末、從來アナバプテストが主張せし迷信と道德無視の弊を去り、革命的諸元素を一切除き去りて穩健なる信仰條目を作り。ミュンステルの同教徒と關係を断ちて別に一派を起せり。彼等は、ルーテル派若くはカルヴァン派と相容れざる點ありしと雖も、其宗徒は篤實勤勉にして、毫も亂暴の舉動なかりき。現今博く英米に行はれ、且我國にも布教されつゝある浸禮派なるものは、上述の如き行徑を辿りて漸次琢磨の功を積みしものなり。

バプチスト派の率先者メンノー・シモンズ

北獨逸の自由市に於ける貧富兩階級の争

平民黨優勢にしてJürgen Wullenweberを市長に擧ぐ

バルチツク海沿岸に在りて、強固なるハンザ同盟を組織し居たる數多の自由市は、早くより宗教改革を歓迎して新教に改宗せしが、間もなく富者と貧者の兩階級の間に争起れり。其争たる、元來社會的且政治的の争なりしに、其時代の影響を受けて、知らぬ間に宗教的の色合を呈し來りぬ。ハノーヴェル、アレーメン、アルンスウヰツク等の諸市に於ても、此種の騒動ありしが、リユーベツクの騒動は、その中尤も猛烈に且大袈裟なりしが如し。リユーベツクは、ハンザ同盟の牛耳を執りし繁榮の都會にして、十四五世紀間バルチツク海の制海權を握りて北歐に雄視したり。今や平民黨の勢力、富豪黨を壓して市の政權一時彼等の掌中に歸し、彼等は一五三三年ユールゲンウルレンウエーフェルを市長に選舉したり。平民黨はアナバプテストの説に傾き、富豪黨はルーテル派の信仰を奉ずる者多し。故に兩黨の勝敗は、直ちに宗教の消長に影響せり。市長ウルレンウエーフェルは單に市内に於ける自黨の捷利に満足せず。瑞典、丁抹の諸市と氣脈を通じ、同主義者



民主主義者の  
失敗

を煽動して、民主主義の運動を起さしめ、リューベックをして昔日の勢力を回復し、瑞 丁兩國に覇たらしめんとたくみしが、事志と齟齬して、遂に獨逸諸侯の率ゐたる援軍の爲に虜にせられ、一五三七刑場の露と消えたり。リューベック市の騒動は、恰もミュンステルの騒動及びユルテンベルグの戦争と殆ど同時に起りしを以て、舊教派とルーテル派の別なく、諸侯の憂慮一方ならず。力を協せて國家社會の秩序を紊亂する者を討伐せしものから、案外速かにその鎮定を見るに至りしなり。扱リューベック市に於ては、上流社會がルーテル派の信仰を持せしが故に、民主黨の失敗後は、乃ちルーテル派の全盛を來し、一般人民は以前に倍したる壓迫を蒙りぬ。最初自由を標榜したるルーテル主義も、今や司權者の手にその樞軸を握られて、壓制の具たらんとす。

兩派協力革命  
的分子を撲滅す

### 第十九章 調和策の不成功—ヘッセン伯の重婚—シユマルカルデン同盟の分裂

兩侯の改宗

獨逸の新教徒は、一五三九年に於て、二大勇將を其陣營に迎へたり。フランデンアルグの選帝侯ヨアヒム二世と、ザキソニアのハインリッヒ侯の改宗是れなり。ヨアヒム二世は、一五三五年、その父ヨアヒム一世の後を継ぎ、ハインリッヒは、一五三九年に死せし兄ゲオルグに嗣ぎてザキソニア侯領を治めし人なり。ヨハンフリードリッヒ選帝侯の甥に當る。兩侯の改宗が、新教派の勢力を増進せしこと、甚だ大なりとす。ヨアヒム二世の弟なるヨハン邊境伯は、兄よりも二年前既にシユマルカルデン同盟に加入せられたり。久しく加特力教の重鎮たりしフレスラウ ラテスポンの兩市も、亦新教に加はり。ラインの選帝伯も、新教に傾き。ヴッテナ府も、一時殆ど新教の勢力範圍に入らんとし



新教徒の勢力  
其頂點に達す

たり。新教派大學の繁昌に引き代へ、羅馬教派の諸大學は、學生の數減じて寂寥を啣てり。ババリア州に於ては、修道僧殆ど皆無となり、修道院の數、僧侶の人員よりも多かりしといふ。新たに僧侶を志願する者の僅少なりしこと、推して知るべきのみ。今や獨逸國內に新教徒の勢力其頂點に達せり。而して政界の事情も亦彼等に好都合なりき。

カロロ帝苦心  
の問題

土軍再襲の企は、カロロ帝が苦心の種子なりしが、その上帝の心を惱ましめしは、グレイフェ ユーリツヒの領主にしてサキソニア選帝侯の義兄なるウヰルヘルム侯が、ゲルテルンを兼併するに至りし事なり。侯は新教に傾き、政治上に於てカロロ帝と利害を異にせしを以て、勢ひシユマルカルテン同盟の後援を藉りて之に備へざるを得ざりしなり。帝は機を見てゲルテルンを回復せんとする野心あり。

帝の慣用政策

當面の勁敵なき時は、新教徒に對して強硬の態度を執りて、彼等を威壓せんと欲し、周圍の事情に餘儀なくせられて、斷乎たる方針に出づる能はざるか、或は新教徒の援助を要する場合には、徧へに彼等を懷

神學者の會議  
類々

カルヴン  
メランクトン  
との會見  
ラチスボン  
レーゲン  
スプ

兩派の代表者

柔して調和を圖らんとするは、カロロ帝の慣用手段たり。今や天下の形勢帝のために非なりしを以て、帝は屢々兩派の僧侶、神學者等を召集して、調和を圖らんと努めたり。一五四〇年には、其會合をハゲナウヴオルムスに開き、翌年の四月には、ババリア州のラチスボンに於て開催したり。ジヨンカルヴンが、メランクトンと一生一度の會見を爲し、は、ラチスボンの會議に於てなりき。ラチスボンの會議には、カロロ帝親臨あり、議長として斡旋の勞を執られ、又羅馬教派に在りて、學問見識共に拔群にして進歩主義を執り、且新教派の意見に尤も接近したるコンタリニ僧正法王の勅使として列席したり。此外新教方の代表者には、メランクトン、フリーケル、カピトウ等あり。舊教方の論客には、ルーテルの勁敵たるエツク臨席したり。議員中尤も調和に熱心なりしは、コンタリニ僧正とフリーケルにして、強硬の態度を持せしは、エツクとメランクトンなり。然れども吾人は是等の神學者の背後に、政治家ありし事を忘るべからず。更に此ラチスボンの會議を控



ラチスボーン會  
議の調停破る

帝宗教上に失  
ひし所を政治  
上に於て補は  
んとす

ヘッセン伯の  
重婚事件

制する所の、ローマとウツテンベルヒの兩本陣ありしことを記せざるべからず。茲に集りし神學者等は、兎に角曖昧糺糊たる條件を作りて、双方の合意を得たりしが、羅馬法廳とウツテンベルヒの老將軍は、何れも之に同意せざりしを以て、カロル帝が折角の苦心も竟に水泡に歸し了ぬ。左はいへ帝は老練なる政治家なり。轉んでも徒手では起きの秘術を知れり。帝は、宗教上の信仰よりも寧ろ政治上の利害に重きを置ける。アランデンアルダのヨアヒム選侯、ヘッセン伯フツリツプ及び其子モウリツ等を誘ふて、徐ろに自己の味方たらしめんとたくみつゝありしが、此際更に帝が利用し得べき輻強の事件出来したり。

ヘッセン伯フツリツプはザキソニアのゲオルグ候の女を娶りて、二十餘年來偕老の生活を營み、七人の子をさへ擧げしめしが、夫妻の間柄睦まじからず。伯は天性多情にして動もすれば誘惑に負け易し。但し此種の不品行は、當時の王侯の間には有り勝ちの事にして、高僧等

伯の醜聞

神學者に訴へ  
て辨疏の地盤  
を作る

ヘンリ八世に  
似たる點又異  
る點

と雖も往々醜聞を流し、事あり。伯が新教に歸依してより、良心の苛責稍々鋭敏になりしが。左りとてわが不行狀を悔ひ改めんとはせず。反て多妻主義の聖書に悖らざる事を証明して、重婚を斷行せんと欲したり。而も萬一此事が公けに知れたらん場合には、單獨にて非難の矢面に立ち得ん事を心元なく思ひて、ルードルフ・メラク・クン・アイケル等に向ひて、此難問の解答を求めたり。フツリツプは其性情に於て、英國のヘンリ八世に似たる如く、此事件も亦頗る英國王の離婚沙汰に類せり。而もヘンリの遣り口の大膽にして、且適當の口實ありしに引き代へて、フツリツプ伯は何等の正當なる理由なく、隨てその處置も甚だ拙劣なり。ルードルフ以下二名の神學者が連名を以て伯に答へし所は、曖昧にして姑息極まるものなり。彼等は一方に於て、一夫一婦の制度を以て、キリストの旨に適へるものと唱へながら、他方に於ては、秘密に行ふべしといふ條件を附して、フツリツプに重婚を許したり。フツリツプは既に身分高からぬ一婦人マルゲレタと重婚せり。抑も



事露顯して非  
難の聲喧し

改革家の過失  
を其時勢に塗  
り付くるは其  
當を得ず

夫の三神學者は、何故に此の如き拙悪卑怯なる態度に出でしか。惡事千里の壁に洩れず。此秘密はやがて天下公衆の知る所となり。敵も味方も一驚を喫せり。三人の中最も小心にして誠實なるメランクトンは、尤も痛切なる悔恨を爲し、憂愁の餘り病蔭に就きしほごなり。ルーテルは、圖々しくまらばくれて、我は此事を興り知らずと公言したり。彼等は、説教に由り、文章に由りて、辯護に勉めしと雖も、多數人民の良心は、其辯護によりて誤麻化し得らるべくもあらず。後世新教派の史家、記傳家は、ルーテル、メランクトン等の爲に辨疏して止まされども、吾人は男らしく、彼等の過失なりし事を承認せんと欲するなり。彼等は、フ井リツプの如き有力なる一貴族を、舊教派に走らしめんことを恐れ、少くともシユマルカルデン同盟の分裂を來さん事を案じて、上述の如き姑息手段に出でしならん。何ぞ知らん該同盟の紛紜が此事のために持ち上らんとは。

此事件が、獨逸の新教徒、否天下の改革運動に與へたる惡影響は、真に

カロロ帝伯の  
急所を捕ふ

モウリツモヨ  
アヒム二世ヨ  
伯と去就を一  
にす

絶大なり。羅馬教徒は、此機に乗じて大に新教派の勢力を挫かんと企てたり。サキソニア選帝侯ヨハンフリードリッヒは、フ井リツプを見棄て、シユマルカルデン同盟が、此事件に關係なき事を宣言せしかば、伯はや、手持不沙汰の位地に立たざるを得ざりき。

渡しに舟。カロロ帝が伯を歴きしは正さに此秋に在り。帝とフ井リツプとの間に、提携の内約が成立せしは、一五四一年の六月なり。伯は帝に約するに、シユマルカルデン同盟をして佛國若くばその他の邦々と同盟せしめざる事、又クレーフエ侯ウ井ルヘルムをシユマルカルデン同盟に加入せしめざる事を以てせり。而して此年サキソニア侯ハイインリツヒ死せしが、その後を継ぎしモウリツは、フ井リツプの義子に當れるを以て、此内約に加盟し。フランデンブルグ選侯は、利益交換の爲、フ井リツプを扶けて、クレーフエ侯の反對に立たん事を約束せり。サキソニア選侯は、クレーフエ侯の義兄弟に當るが故に、勢ひ之を扶けざるべからず。此の如く十年來獨逸に雄視せし鞏固なる



吹開紅雲還吹落、一種東風兩樣心。

シユマルカルデン同盟は、内部の分裂に由りて、昔日の勢力を失墜せり。此同盟の發起人たるフザリツプ伯が自らの罪過によりて之を破壊せるこそ痛ましけれ。看よや福音主義の勇將が今や一轉してカロロ帝の御手先と化し了りしことを。

千丈の堤も蟻穴より崩る

千丈の堤も蟻穴より崩る。シユマルカルデン同盟一たび潰裂し初めてより、種々なる葛藤引續きて起り、紛争怨恨の蒸發氣その間に發生して、終に漠々たる戰雲を捲き起さんとする。

カロロ帝はラチスボンの會議終結の後、久しく地中海の沿岸なる

### 第二十章 政治界に於けるカロロ帝の

#### 成功—新教諸侯の向背

カロロ帝の海賊討失敗に歸して佛、土兩國其虚を衝く

佛王宣戰列國は合従の謀に忙

西、伊兩國の領地を荒掠しつつありし、海賊の巢窟なるアルゼリアの討伐に赴きしが、全然不成功に了りしかば、豫ねてハブスアルダ家を挫折せんと待ち構へ居たる、フランシスとソリーマンをして、欣躍勇奮せしめたり。土耳其先づ戰を宣して、一五四一年の夏、アダ市を占領し。翌年の春進んでペスト市を圍む。獨逸軍、ヨハヒム二世の指揮の下に、該市を救はんとして反て敗走す。ソリーマンの西進愈々急なり。フランシス一世之を聞きて脾肉の歎抑へ難く、終にカロロ帝に向て戰を宣せり。是れ帝と王との第四回の戰爭にして、即ち最終のものとする。土耳其は云ふまでもなく、瑞典、丁抹、蘇格蘭等の諸國何れも佛王と同盟し。法王も帝及びフェルチナンドに反對の態度を持し。カロロの政敵なるクレーフエ侯も自家の利益より打算して、佛王の成功を祈れり。抜目なき英國のヘンリ八世は、表に高蹈自重の態度を装ふて、實は漁夫の利を占めんことを冀へり。然れども蘇國がフランシスを助けんとせしより、ヘンリは止むなくカロロと同盟を結べり。



上述の如く、フランシスとカロロとが歐洲の覇を争はんとしつゝありし間に、獨逸國內に於ても亦二三の小紛争を生せり。

一はサキソニア兩家の葛藤なり。サキソニア州は選帝侯領本家即ちエルネスト家と侯領(分家即ちアルフレヒト家の二つに分れたり。

先代の選侯フリードリツヒ聰明は新教に與みし、侯領先々代のゲオルグは加特力方なりしが、その弟ハインリツヒの代より新教に改宗したり。

ハインリツヒの子モウリツヒは當主ヨハンフリードリツヒと從兄弟同志なり。然れども此兩侯は其性質異りて、動もすれば意見の衝突を來す。

一五四二年、ヴルツェン領の問題に關して、兩侯殆ど干戈に訴へんとせしが、ルーテルとヘツセン伯の仲裁に由りて、該領地を分割するに決し、事漸く收まりぬ。而もその後兩侯の間は尙圓滑を缺きて終に一五四六年に於ける大慘劇の原因を爲せり。

北獨逸に於ける舊教諸侯の中に、嶄然頭角を露はしゝは、アルンスウ井ルク侯ハインリツヒなり。侯の妻女虐待事件は、ヘツセン伯の重婚

サキソニア州兩家の葛藤

一五四六年に於けるモウリツヒの原

アルンスウ井ルク侯とヘツセン伯の争

につぎて八釜ましき問題となりぬ。侯と伯とは、此の如き奇妙なる類似點あるに拘はらず。其間柄犬猿も雷ならず。或領地の處分につき、侯先づ兵力に訴へしに、伯はシユマルカルデン同盟の援助を得て侯の軍を破り、その領地を奪ひてハインリツヒ侯を逐へり。但しその領地の處分法につきては、更に他日の協議を待つ事となれり。是よりアルンスウ井ルク領は、宗教改革を採用して新教方に加りぬ。ケールの大監督、クレーフエ侯、その他二三の有力者が斷然新教に投せしは、此頃の事なり。一五四五年ハインリツヒ侯は、其舊領を回復せんと欲して兵を擧げしが、再びヘツセン伯に破られてその目的を達する能はざりき。

此の如く新教の勢力大に振作せし時に當り、茲に意外の一事變を生せり。カロロ帝は、癡きにゲルテルン回復の目的を以て、ヘツセン伯アランテンベルグ選侯等と内約する所ありしが、一五四三年の八月、俄に兵を進めて此州を占領し、ウ井ルヘルム侯は、連敗の後城下の盟を

カロロ帝俄かにゲルテルンを占領す



不幸なるウヰルヘルム侯は舊教に改宗す

新教諸侯の向背區々たり

爲して、ゲルテルンを帝に割譲せり。設しフヰリップの重婚事件起らず、ウヰルヘルム侯をシユマルカルテンの保護の下に置きたらんには、此一州は今日和蘭に屬せずして獨逸に屬せしものを。假令フヰリップが中立の地位に立ちしとはいへ、一旦新教に改宗したるクレーフエ侯が、其重要なる所領を帝に奪はれんとするを視て、袖手傍看一兵の援助をさへ與ふる能はざりしは、新教諸侯に取りて一大耻辱と謂はざるべからず。侯が新教徒の無情を憤りて舊教に立戻りしは、蓋し自然の人情のみ。その隣州なるケールンの大監督は、將に新教に改宗せんとしつつ、ありしが、前者の覆轍に鑑みて躊躇せり。その後ラインの帝領伯フリードリツヒ二世の如き有力者が、宗教改革を採用せんとせしも、一たび分裂の端を開きし新教徒同盟は、終に其勢力を挽回する能はざりき。最初より微温的改宗者なりしフランケンブルグのヨアヒム二世は、依然中立を守り、年壯氣鋭のモウリツ侯はその従兄弟なるサキリニア選侯と争ひてより、怨恨容易に解けず。新教徒の列を遠か

此内約は實行せられざりき

獨逸の弱點

個人獨立の精神の強盛反て國家に累を爲す

雀百まで躍忘れず

りて寧ろカロロ帝に接近せんとしたり。尙是よりも驚くべき事あり。ヨハンフリードリツヒ侯其人も、密かに欺をハブスブルグ家に通じて、カロロの弟なるフェルチナンドの女を、侯の一子に配せんとする内約の成立せし事はなり。想ふに是れ侯がカロロ帝の外交策に弄せられし結果ならんか。然れども帝國の統一を顧みずして、各自の利益權勢を擴張せん事に熱心なる獨逸諸侯は、明かに他に乘せらるべき弱點を有す。個人的獨立心を其長所として、世界の史上に顯はれ初めたる北歐のゲルマニ蠻族は、久しく封建割據の惰力に制せられ、大小の諸侯各々其勢力を張らんとして、毫も推讓せず、國民大統一の好機會たらんとせし宗教改革の問題は、反て内部の分裂を醸し、延いて外國の干渉を招き、之を小にしてはシユマルカルテンの戦争を惹起し、之を大にしては三十年戦争を見るに至れり。雀百まで躍忘れずてふ俚諺、移して以て獨逸人の長所短所を評すべきなり。却說カロロ帝は、ゲルテルンを回復せし翌年(即ち一五四四年)の二月、



帝亦新教徒に讓歩す

佛軍討す

クレビーの和約

スパイエル國會に於て、新教諸侯に讓歩してその要求を容れ、帝の味方たる事を誓はしめたり。帝とフランシスとの戦争の尤も烈しかりしは此年なり。佛軍は南歐に於て一部の勝利を得しも、カロロがヘンリ八世及び獨逸新教諸侯の援助を得て、續々佛國の要害を占領し、終に巴里府を眺望すべきソワソンまで進むに及びて、大局已に定りぬ。而もソリマンの東方より襲來せんとする恐ありしを以て、帝は急にクレビーの和約を結べり。漁夫の利を目的とせしヘンリ八世は、事意表に速決せしを以て何をも獲る能はざりき。外交にかけてはカロロに一籌を輸するの觀あり。兎に角カロロは再び獨逸に於ける政教問題處理すべき好機會に遭遇したるなり。

### 第二十一章 トレントの宗教大會議及び

#### シュマルカルデン戦争

教會に對する帝の意見

帝は老ふるに隨ふて、加特力教の信仰篤くなりぬ。プロテスタント教の説をそのまゝ寛容し置かん事は素より帝の志にあらず。從來の國會に於て、屢々新教徒に讓歩せしは、政策上の必要に迫られしが爲のみ。然らざれば、帝の政敵を助けんとせし、法王に對する意氣張上、止むを得ざるに出でしなり。帝の考に依れば、加特力教會は、神聖羅馬帝國と等しく、唯一にして分離すべからざるものなり。新教徒は、取も直さず此主義に逆ひて、分立を主張するものなるが故に、斷じて容赦すべからず。教會の統一を維持するに二途あり。一は、プロテスタント教徒を包含し得るまでに、その門戸を推し擴ぐる事にして、他は、ルーテル派の教理を出來得る限り、縮小して加特力主義に接近せしむるに在り。



調和不可能

ハブスブルグ家に取りて由々しき一大事

帝開戦を覚悟す

満を引いて未だ容易に放たず

此事は既に一五三〇年のアウクスブルグ國會、近くは一五四一年のラチスボン會議に於て、試みし所なるが、兩度とも成るに垂んとして、結局不首尾に了れり。議論交渉は最早その効なし。クレピ一の和約締結後に至りて、帝も粗その決心を爲せり。ヘツセン伯の重婚事件の起りし以來、新教諸侯の間に分裂を生せし事は、帝が竊かに其決意を固むるに至りし一原因たらずんばあらず。然れども更に一大理由のあり。何ぞやケールンの大監督とラインの帝領伯の改宗によりて、七選帝侯の過半数、既に新教に加はりしを以て、帝の眼目後獨逸の帝位を占めん者は、恐くは新教徒たらざるべからず。是れハブスブルグ家に取りて由々しき一大事なり。天性遲疑し易き帝をして、心中私かに開戦の覺悟を爲さしめし理由は、即ち上述の如し。左はいへ戦争は帝の好む所にあらず。佛王常に帝の虚を窺ひ、ソリーマンは東境を侵さんとす。法王、將た獨逸の舊教諸侯と雖も、容易に全幅の信を置き難し。然らば則ち戦を宣するに先だちて、徐ろに帝を援くべき同盟者

トレント宗教大會議

注王と皇帝の暗闘

帝が施さんご豫期せし政策

を定め置かざるべからず。更に慾を云は、帝の爲に開戦の口實を見出すべき必要ありしなり。

天下の形勢、此の如く切迫し來りし時に際して、トレント(獨)トリエントに宗教大會議開催せられたり。その召集狀はクレピ一和約調印の日(一五四四年十一月九日)に發せられしが、實際開會せられしは、翌年の十二月なりき。此大會議は久しき以前より目論まれしものにて、その開會の場處につきても少からぬ暗闘を重ねしが、結局法王の政略圖に當りて、トレントに定まりしなり。トレントは名義上獨逸に屬すれども、人種風俗の上よりいへば、純乎たる伊太利の一市府なり。法王は大會議操縦の便宜の爲に特に此地を擇びしなり。此大會は、新舊兩派の交戦地とはならずして、皇帝と法王との外交術の角力場となりぬ。何となれば、新教徒は、或豫定の目的を以て開かれたる、大會の決議に束縛せられん事を拒みて、列席を斷りたればなり。帝は此會議を利用し、法王と新教徒とを兩つながら屈服して己れに頼らしめ、同



法王帝を土侯  
際に倒す

時に、羅馬教内部の積弊を一掃し、特に横暴なる法王殿の権力を減殺せん計略なりしなり。西班牙の高僧等は、熱心に帝を扶翼し、伊佛兩國の舊教徒間にも、帝に同意せし者多かりしに、外交に抜目なき法王パウロ三世は、巧みに背負投げを試みて、老練なるカロロ帝を敗者の地位に落しぬ。カロロも左る者。倒れて砂を掴みしと見えし瞬間に、一物を把握して起ち上れり。掌中に收めしものは何ぞや。新教徒に對する開戦の口實是なり。帝は年來彼等が要求せし大會議に、臨席せざる剛愎を鳴らして、最後の手段に訴へんとするなり。

開戦の準備を  
して新教徒侯  
と秘密同盟を  
結ぶ

用意周到なる帝は、獨逸新教徒の中に同盟者を作らんと欲したり。ヘツセン伯は頑として應せざりしが、フランデンアルグ選帝侯を始め、數名の諸侯は、帝に中立を守らんことを約せり。帝は終にサキリニアのモウリツを説きて同盟に加はらしめたり。侯は年尙壯けれども、政治家として又武將として、嶄然一頭地を抜けり。侯素より報酬なくして帝を助けず。カロロが捷利を得し場合には、選侯たる資格を、エルネ

モウリツとの  
密約成る

帝今や土、佛  
に備ふるの必  
要なし

スト家より奪ひて、之をモウリツに與ふる事。又若干重要な領地を取らしむる事を約束して、彼を味方と爲し、なり。從來舊教諸侯の中にも、ハプスブルク家の権力増加するを厭ひて、帝に反對せしものあり。パバリア侯は、其筆頭なりしが、帝は彼等を説きて善意的中立を承認せしめたり。此年の十月に至りて土耳其も亦帝と休戦を約せり。而も此休戦は主としてフランシス一世の斡旋の結果なりしなり。帝今や此兩政敵に備ふるの必要なし。唯一の疑問は法王の去就に存す。帝は新教徒の願意を容れんとする態度を示して、巧みに法王の決心を促がし、かば、パウロ三世も終に歩兵一萬二千、騎兵五百、黄金二十萬クラウンを出して、帝を助くる事に決せり。開戦の準備既に全く整ひしも、思慮周到なる帝は、滿を引いて未だ容易に放たず。新教諸侯等は少しも敵の計畧を知らず。モウリツは依然ヨハンフリードリツヒ侯と親交を装ひて、異圖なきもの、如くせり。彼等はトレントの大會議の開會と同時に、ヴォルムス國會を開き、彼等がトレント會議に出

法王も亦提兵  
を出す

新教諸侯集府  
の急を知らず  
して優々閑々  
たり



列せざる理由を宣言し、別に獨逸國內に於て、宗教大會議を召集せん事を皇帝に要求し、帝も亦その要求に對して操縦の秘術を弄せしを以て、彼等は全く油斷して毫も焦眉の急に氣付かざりしなり。

政界の天候險惡にして、漠々たる戰雲將に北獨逸を覆はんとせし一五四六年二月十八日、改革の使徒マルチン・ルーテルは郷里アイスレーベンに於て永眠せり。枕邊に在りし親友ユスツス・ヨナスが、足下は今尙足下が教へし基督を信奉し、且其教理に據らるゝかとの間に對し、"Ja"の一語を殘して世を去れり。彼時に年六十三歳。九十五個條の揭示せられてより、實に二十九年目に相當す。彼は「劔を抜くものは劔に由りて亡ぶべし」てふキリストの言を確信して、終生平和主義を唱へしが、シユマルカルデン戦争の破裂を見ずして瞑せしは、彼に取りて至幸なりき。

ルーテルの死後間もなく開戦となりぬ。新教徒の首領中、帝の先鋒を爲しゝものあり。同教徒の敗亡するを平氣で坐視せしものあり。

ルーテル死す

彼が最後の一言

ミユールベルヒの戦

兩首領共に降る

勁敵を目前に扣へてすら、ヘッセン伯とザキソニア選侯とは尙一致せざりき。而してカロロ帝の戰備は予が前節に詳説せしが如し。然らば則ち勝敗の數豫じめ知るべきのみ。一五四七年四月二十四日のミユールベルヒの一戦は、フリードリッヒ選侯の大敗に歸し、侯自ら奮闘の後捕虜となりぬ。帝の面前に引かれしとき、侯は頬に傷きて鮮血淋漓たり。健氣なる侯の夫人シビラ、猶兵を督してウヰツテンベルヒを守りしも其甲斐なく、竟に敵手に落ちたり。モウリツ乃ち選帝侯に任せられ、且領土を加へらる。五月二十日フヰリツプ伯は、大早計にも最早勝算なきものと斷念し、且帝が己れを厚遇するならんといふ、空しき望を抱きつゝ、ハルレを守りしアルハ將軍の陣に降れり。帝が伯と選侯を遇せしこと頗る冷酷を極めたり。

ミユールベルヒの戦捷に先ちてヘンリ八世とフランシス一世が、僅かに一個月を隔て、逝去せし事は、カロロ帝をして大に後顧の患を減せしめたり。帝は今やシユマルカルデン同盟の主力を破壊し、そ

カロロ帝が得意の絶頂



の兩首領の運命を掌中に握り、野心家なるモウリツを己れの味方となし、舊教諸侯をして帝の氣息を窺はしめ、久しく帝を惱ましたる獨逸の宗教問題を意のままに解決し得べき地位に立てり。帝は將に此年の九月よりアウグスブルグに國會を召集して、該問題を解決せんとす。一五四七年以後の數年間に於けるカロロ帝の得意想ふべきなり。

### 第二十二章 假信條の強制執行と其反動

硬派加特力教徒  
トレント會議を支配す

新舊兩派の軋轢を利用しつつ、實は双方を屈服して、自家の權力を樹立せんとたくみしカロロ帝の、宗教大會に對する政策全然失敗に屬してより、トレント大會議は、法王の意のままに發展して、軟派の加

法王と皇帝又  
相争ふ

特力教徒は殆ど其面目を失ひ、硬派の意見着々其地盤を固めたり。ゼスイツト協會の策士レーネツが其怪腕を揮ひしは此時なり。然るに獨逸に於ける皇帝軍が意外の成功を顯はしつつあるを見て、法王は漸く危懼の念を生せり。パウロ三世は、帝が戰捷の餘威を振て、宗教大會を檢束するならんと豫測せしを以て、大會議をトレントよりボロダナに移し、且巖きに獨逸に出し、援兵を呼び戻したり。帝は法王の此處置に對して深く憤慨し、戦争の片付きし後、大會議を獨逸國內に移すべき事を命じ、法王が其命令に従はざるに及びて、帝はボロダナの會議の決議に服従せざる事を宣言し、且法王の指圖を仰がずしてアウグスブルグに獨逸國會を召集し、その議場に於て宗教問題に一時的の解決を與へ、他日の宗教大會議を待ちてそれを永久的のものたらしめんと欲したり。扱帝が一時的の解決を與ふるに當り、據て以て新教徒に適用すべき假信仰綱領を作らざるべからず。帝が、ミカエル・ヘルチング、ユリウス・フォン・ブリューグ、アグリコラの三神

假信仰綱領は  
小兒服の如し



強迫的に信條  
を用ひしめん  
とす

學者に命じて起草せしめしもの即ち是なり。之をアウグスブルグの Interim と稱す。其内容は、加特力教の教義と新教の教義とを繼ぎはぎして仕上げし一種奇異なる小兒服にして、到底成人したるプロテスタント教徒の身體に適すべくもあらず。一方には變質論、七聖典及び諸聖人の禮拜、マス、その他の儀式を採用しながら、他の一方には、信仰に由りて義とせらるゝといふ説に、少しく變更を加へしものを探り、僧侶の妻帯を許し、聖晚餐のとき平信徒に葡萄酒の杯を廻はさしむる事とせり。此つぎは信條は、或は羅馬教徒の満足を得し得んも、新教徒が不服を唱ふるや必せり。然るに帝は勝者たる舊教徒に向ては、此信仰綱領を承認せんことを求めず。唯之を以て、敗者たる新教徒を律せんとす。實は強制的に之を承認せしめんとするなり。ルーテル派の牧師説教者にして、或は追放せられ、又は自ら難を外國に避けしもの約四百名に上れり。

帝は未だ軍隊を解散せざりしを以て、一指を擧げて萬軍を動かす

帝の早合點

を得べし。特に帝に忠誠なる西班牙兵尙獨逸に駐在せり。反對者は片端より逐はれ、民衆は一時不平を呑みたれば、帝は該信條の強制執行は既に成功せしもの、如く思惟せり。帝は國に乗りて瑞典、丁抹、將た英國にも同一の方法を行はしめんと急りしが、そは東の間の夢なりき。不平怨嗟の聲は、國內到る處に起りて、猛烈なる反對を惹起さんとす。ハムブルグ、リュール、フレイメン以下の北方の諸市は、斷乎として之に反對し、フランケンブルグ選侯は陽に唯々諾々を裝ふて實際は之に従はず。獄中のヨハンフリードリッヒ侯は威嚇を恐れずして、不承知の旨を公言せり。又黨を組みて帝の行在所に歎願せし一群の婦人あり。新教の盛んなる諸市の教會は、殆ど參拜者の影を絶ち、十數年來忘れ果てたるマスの式禮を受けんとする者極めて罕なり。帝がユルテンベルグ侯に、新教派の有力なる説教者フレンツを放逐せん事を命するや。侯は之に答へて曰く、『臣は帝の命に従はんと欲するも不可能なり。そはフレンツを逐はんとすれば、領内の人民

沈黙なる反對

巧妙なるユル  
テンベルグ侯  
の返答



獨逸人西班牙人を喜ばず

皆彼と共に去るべければなり。

帝に對する獨逸人の不平は、單に宗教上の威壓のみに由らず。傲慢なる西班牙の軍隊が永く獨逸に留め置かれし事も、亦不平の一因たり。帝が自ら世を去りし後、皇弟フェルチナンドを以て獨逸の帝位を嗣がしめ、皇太子フヰリツプを羅馬人の王東宮に任せんとする目論見を抱ける事は、獨逸人の尤も嫌忌し且恐るゝ所なり。西班牙人と獨逸人とは、その性格思想全く相反す。カロロ帝自身も幾分か西班牙人の血統を承け居るが故に、充分に獨逸國民の心情を解する能はず。況んや全く西班牙に人となりしフヰリツプを以て、將來の皇帝に擬せんとするに於てをや。是れ獨逸人の斷じて忍ぶ能はざる所なり。帝の此計畫はフェルチナンドをして兄カロロの心事に疑を挟ましめたり。彼以爲らく、カロロの眞意は己れを除きて直ちにフヰリツプを擧ぐるにあるならん。尙帝に對する人民の不平を増さしめし原因は、幽閉中のヨハンフリードリツヒ侯とフヰリツプ伯に對する取扱の冷酷な

フェルチナンド兄弟の心事を疑ふ

獄中の二卿に同情する者多し

りし事なり。僧籍にある三人を除き、他の三選侯は連署してその放釋を哀訴せしに、帝は頑として之を許さざりしのみか、更に向ふ十五年間抑留せん事を内決したり。獄中の二卿に同情する者舊教徒の中にすら多かりき。

外交上の光景一掃す

獨逸國內に於ける反對の稍々強大となると同時に、對外的關係も亦惡徵を呈し來れり。一五四七年より一五五〇年に至るまでは、英佛兩國の間に争あり、土耳其はペルシヤと葛藤を生じつゝありしが故に、帝は東西何れの方面にも心を配るべき必要なかりしに、英佛相和するや、佛王ヘンリ二世は父の志を繼ぎてカロロに戰を宣し、土軍も亦ホングアリーを侵さんとする。

モウリツ、カロロ帝に叛かんとす

往年節を賣り信義に背きて、積年の野心を遂げたるモウリツは、帝の今や將に窮境に陥らんとするを視、且領内人民の彼に向て甚だ不滿なるを知るや、新教方に復して自己の安全を圖らんと欲したり。抑もモウリツは如何なる人物なるか。或人は彼を以て無主義無節操の徒、



モウリツの人

陰險なる謀反の成功者と見做し、又成人は彼を以て新教主義の爲に遠大の策を立てし大政治家と爲す。吾人は彼の力倆の非凡なるを認むると同時に、彼が政治上の利達を主として、宗教を方便とせし人物なりしことを信せんと欲す。勿論モウリツと同一の動機に基きて新教に改宗せし諸侯多々なりし事は、予之を知れり。モウリツはかゝる諸侯中にて、尤も無遠慮に、又尤も鐵面皮に、その宗教を利用し、道義を無視せし者なりといふべきのみ。獄中に在りしヨハンフリードリッヒ侯、モウリツ再度の謀反を聞きて曰く、「我は夫の變節無信仰なる從兄弟の盡力によりて、自由の身とならんよりは、寧ろ囹圄の裡に此生を終はらんことを希ふ」と。但し侯が帝に背かんとする口實は、帝が彼の義父フネリツア伯を、約に背きて永く幽閉せりといふに在り。

フリードリッヒ侯モウリツを蛇蝎視す

カロロ帝に反對する同盟

是より先き一部の獨逸諸侯は、相團結してカロロ帝に反抗を試みんと計畫しつゝありき。その牛耳を執りしは、キユストリンのハンス伯なり。佛王も進んで彼等と提携せんことを願へり。國內に於ては新

流星光底邊長蛇

教徒を迫害し、外國に對しては、獨逸の新教諸侯を援けてハブスブルグ家の勢力を打破せん事は、佛王年來の政策なり。一五五〇年ハンスの指導によりて組織されし同盟は防禦を目的とせしが、その後ハンス去りてモウリツ同盟の首領となるに及びて、攻撃的態度に變じ、ヘンリ二世王も公然之に加盟したり。然れどもモウリツの舉動頗る狡猾なりしを以て、カロロは全くその異圖あるに氣付かざりき。一五五二年五月十八日の夜中モウリツ不意に兵を提げて、その頃インスアルグに保養中なりしカロロ帝を襲ふ。帝素より防戦の邊なく、少數の從者を隨へ、雨雪を冒しつゝ、アレクサンダー峠を越へて、東の方カリンチアのヴネルラツハに遁走す。ミユールベルヒの捷利以來、帝が思ふまゝに築き上げんと苦心しつゝありし空中の樓閣、今や忽焉として消失せり。

ハブスブルグの平和會議

同年七月、新舊兩派の諸侯は、ドナウ河畔のハブスブルグに集合して、獨逸の宗教問題に永久的解決を與へんとす。此會議に於て尤も勢力あ



カロロ帝衆議を排斥す

りしは、言ふまでもなくモウリツ選帝侯なり。議員多數の意向は、羅馬法王の召集せんとする宗教大會議を待たず。獨逸の國會に於て宗教問題を決定せんといふにあり。フェルチナンドも畧ぼ其意見に従はんとせしが、ウヰルラツハに在るカロロは、斷然之を拒絶せり。此故にパツザウの條約は、唯休戦と、帝に逆て干戈を執りし者の特赦と、一五四七年の役に捕虜となりしザキソニア侯とヘツセン伯を直ちに放釋すべき事を決せしのみ。自餘の重要問題に關しては、次ぎの國會に於て單にその方法を議し、更に法王の承諾を得て永久の決議を爲すべき事となりぬ。然るに國內に擾亂打續きて、一五五五年までは、國會を開くこと能はざりき。モウリツ選帝侯は一五五三年七月、戰に捷ちて打死し時に年三十二歳、ヨハンフリードリツヒ侯は、翌年三月、五個年間の幽閉と身に降りかゝりし禍の爲に健康を害ひて、世を逝りぬ。當時の名士ローチヤーアシアムのいへりし如く、侯は朋友に欽慕せられ、政敵に尊重せられ、萬人に愛せられし人なりき。敵も味方も侯の死を悼

モウリツフリードリツヒ相隨いて死す

惜せし者多し。

### 第二十三章 アウグスブルグの宗教和議

カロロ帝の失認  
帝讓位の意あり  
アウグスブルグ宗教和議

カロロ帝は得意の絶頂より失望の谿底に落ちぬ。帝は再び獨逸の國會に臨みて、意氣軒昂たる新教諸侯と折衝するを懶しと思へり。蓋し彼等に讓歩するの止むを得ざることを豫知すればなり。此故に帝は一五五四年の夏、萬事を皇弟フェルチナンドに一任し給ひしが、有體にいへば帝は此頃より既に獨逸の政治に執掌せず。皇帝たり將た西班牙王たる位をも辭せんとする志固かりしなり。二十五年前、重要な國會開かれて、ルーテル派團結の礎を置きしアウグスブルグは、今や重ねて、歴史上に有名なる和約の締結せらるべ



新教諸侯の打合せ

第二スパイエル國會の時全く其地位を顛倒す

新教徒の要求

き會場に供せられんとす。其開會式は一五五五年の二月五日に舉行せられしが、七人の選帝侯は、唯其代理者を出し、のみにて、未だ一人も親ら來らず。當日列席の重なる議員としては、四名の侯伯と二人の高僧ありしのみ。新教諸侯は、此國會に對する行動を一致せしめん爲、三月上旬よりナウムブルクに集合して、協議しつゝ、ありしなり。此地に集りし諸侯は、國會に出席せし者よりも遙かに多かりき、ナウムブルクに開催せし新教徒の會議は、隆盛を極め、その決議も亦頗る大膽なり。彼等はアウグスブルクの信仰告白に同意するもの、若くば將來之に同意せんとする者を、獨逸の憲法に於て加特力教徒と同等の地位に立たしむる事。過去に於て既に俗權の支配に移りし寺領、若くば將來同一の變更を爲さんとする寺領、及び之に附屬する財産を、法律上正當と認むる事。羅馬教の行はるゝ領内に住居する新教徒は、信仰上充分の自由を享受すと雖も、新教の領内に居住する加特力教徒には、かゝる自由を許さざる事を決議したり。是れ新教徒が、二十餘年來、未だ嘗

兩派の間に將に血を見んこと

調停成る

ルーテルがグオルムス國會に道破せし其心の自由なる處に在る

て公言する能はざりしほどの大膽不敵の要求なり。その最後の一項は、第二スパイエル國會の時(一五二九年)舊教徒が多數を待みて恣まゝに決議せしを、新教徒が一致協力して不服を唱へしものと全く同様なり。若し往年の決議を不公平といふべくんば、此時の要求も亦不公平と謂はざるべからず。

舊教徒の激昂は非常にして、一時は兩派の間に戦争の起らん様子なりしが、フェルチナンドと、モウリツの弟にして兄に鬪ぎてサキソニア選侯となりしアウグスツスの斡旋に由りて、漸く調停せられたり。其結果としてルーテル派の宗教は、憲法上公認せられ。該派に屬する諸侯の領内に於ては、從來の監督政治を廢し。諸侯自ら教會政治を司る事とし。パツサウ(一五五二年)の條約以前に、俗權者の手に移りし寺領は、その儘になし置くべき事と定めたり。領主は、新舊何れかの宗教を撰擇するを得べきも、人民には此の如き自由を許さず。彼等はたゞ領主の信仰に従ふを得るのみ。若し之に不服なる時は、その者は



他領に移住すべきなり。此規定の不條理千萬なるは言を待たず。宗教は全く爲政の具たるに過ぎずなりぬ。錯雜なる政治上の利害によりて、或領地は屢々その支配者を轉換せしを以て、臣民は一代に數回、其信仰を變更せざるを得ざりし場合あり。獨逸の新教が當初の精神に背きて、その活氣靈力を失ひ、殊に一般人民が宗教の眞髓に遠ざかりて、之を一種の形式と見做し、之を變更すること、猶衣服を取替ふると同様の感を抱くに至りしも、豈夫れ止むを得んや。

以上はアウグスブルク和約の大要なるが、尙此外に二個の難問題を未決の儘に存したり。一は此後教職を負ひたる諸侯が、若し改宗したらん場合には、其官位並に寺領を棄つべきものなりといふ羅馬教の主張にして、他は羅馬教諸侯の領内に在住する新教徒に、信教の自由を與へよといふルーテル派の要求是なり。第一の條項は、和約の文中に掲げられしも、新教諸侯は之を遵守せざる事を公言し。第二の條項は、和約中に見へざるも、フェルチナンドがその實行を口約したるな

未決の難問題  
後年に於ける  
争の種子とな

悲惨なる三十  
年戦争此二個  
條の中に胚胎

り。此曖昧なる二個條こそ、今後六十餘年間に於て、兩教派諸侯の間に種々なる葛藤を生じたる大原因にして、悲惨なる三十年戦争は實にその中に胚胎せられしなり。此の如く多數の諸侯、相互に疾視反目して、祖國百年の長計を等閑に附せしより、端なくも諸外國の干渉を招き、獨逸は列強の間に重きを爲さざるのみか。列強が競ふて其野心を逞ふせんとする所の格闘場に供へられたり。

ルーテルが、中世神學の形骸を棄て、基督教の源泉に溯りて掬し來りたる宗教の生命は、既に衰へ初めたり。彼がライプツヒの討論會に於て、將たヴォルムス議場に於て道破したる信仰の自由、今何處に存する。但此事に就きては、ルーテルも亦其責を辭すべからず。世人は概ねアウグスブルクの宗教和約を以て、信仰上の自由の誕生日と爲すと雖も、吾人は同意する能はざるなり。人民に宗教を擇ぶの權なきは、上述の如くなるが、領主等も亦、充分の自由を有する者と云ふべからず。彼等は羅馬の教義を採らんか。ルーテル派の教義に従はん

獨逸の宗教改  
革中失敗に關

信教上の不自  
由



兩派共に保守主義に傾く

か。二者の中その一を撰擇するの權利を有せしのみ。若し夫れカルヴン派の教義の如き、ツィンダリーの説の如きは、獨逸に於ては憲法上未だ承認せられず。況んやそれ以上の詭激なる意見をや。トレントの宗教大會議以來、加特力教は愈々保守主義に傾き、從來包含的なりしに反して、排他的となり。普遍的なりしに反して、縮小的となりぬ。ルーテル派の立場も、一五二二年以來、漸次保守主義となり、ドグマ信條の墨壁を築きて其中に退嬰せんとす。兩者發展の行徑、何ぞ相似たるの甚しきや。其一を擇びて他を棄つ。その相去ること遠からざるなり。さもあらばあれ昔日の異端者が、今や堂々たるプロテスタントとして、帝國內にその存在を公認せられし事は、一大變化と謂はざるべからず。

加特力教會の使命に中世に在り

加特力(普遍的)教會は、最早世界の人類に取りて唯一無二の救の道にあらずなりぬ。加特力教の使命の本領は、實は中世に於て果たされしなり。近世の一大思潮たる國民主義は、宗教界の新勢力たるプロテス

プロテスタント主義と近世思想

タント主義と契合して、各國民の中に獨立教會の陸續崛起するを見る。たとひ其結果は、當初の精神に副はずとするも、尙その一大進歩たる事を認めざるべからず。少くとも更に高き位地に登らんとする一階段たる事を承認すべきなり。

宗教改革の成功は地方分権主義の勝利

一面より見れば、獨逸に於ける宗教改革の成功は、帝政主義の失敗と地方分権主義の勝利を意味す。諸侯はその領内に於て政治上の主權者たると同時に、小法王の地位に立てり。政教兩つながら共和主義を實行するを得しは、少數の自由市あるのみ。左れば現今の獨逸プロテスタント教會が、官立教會の風を存するもの、その由來遠しと云ふべし。



有名なる教會歴史家ヨハン・ハインリッヒ・クルツ獨逸の宗教改革を論じて曰く

歴史上の事變多しと雖も、そを一貫せる神の攝理を示現することの明瞭なるは、獨逸の宗教改革を以て第一と爲さるべからず。其原因、其場處、其時、其人物、其境遇、及びその政治的且宗教的の關係に於て、有らゆる事物が、いとも不思議に結合して、此大事業の爲に、堅固なる基礎、安全なる位置、穩健なる趨勢、眞の純潔、有力なる保護、普遍的承認、成功ある進歩、及び永遠の結果を得せしめし事は、古今の歴史をあさるとも、未だ其比を見ざるなり。

### 第三編 丁抹 瑞典 諾威 に於ける 宗教改革

#### 第一章 總論

ルーテルの宗教改革をそのまゝ輸入し、之を自國の政治及び教會制度の上に適用して意外の効果を收めしは、丁抹 瑞典 諾威の三國なり。此三國の住民はゲルマニ人種の支族なるが故に、その思想習慣上、多少獨逸人と其傾向を同ふする點あるは勿論なり。獨逸の諸市と

獨逸との關係



政治的改革を  
主とし宗教を  
客とし

血を見ずして  
成功せし宗教  
改革

は、商業上の取引頻繁にして。且青年學生の獨逸諸大學に遊學する者亦甚だ多かりしなり。拉丁語が當時の歐洲諸國に、學者仲間の通用語として博く行はれし事は、新思想新智識を傳播せしむる上に、絶大の便利を供へたり。況んや印刷の發明は更に書籍の供給を容易ならしめしに於てをや。丁抹及び瑞典に於て改革事業の牛耳を執りし輩は、概ねウヰツテンベルヒ大學に在りてルーテル、メランケトン等の薰陶を受け、若くば彼等の著書に由りて感發せし人々なりき。抑も北歐諸國の宗教改革は、一般人民の願望に由らずして、政治上の事情に餘儀なくせられしが故に、その主眼とせし所は、最初より寺領の沒收及び國立教會の設立に存し。且その改革の性質は頗る保守的なりしと雖も、その改革の歴史に血を覗ること殆ど絶無なりしは、恐くは他にその類例なかるべし。且夫れ百年後の結果に徴する時は、その國民に貽れる感化の普遍なること、遙かに該運動の本源地たる獨逸の諸州に超えたりと謂ふも、溢美にあらざるべし。

アンスガルの  
布教

一三九七年カ  
ルマル同盟成  
る

選舉王政

|| スカンデナヴィアは元オチン神崇拜の邦なりしが、九世紀の半頃よりアンスガルといふ傑僧基督教を傳へ、漸次羅馬加特力教會の管轄に屬せり。九世紀より十一世紀にかけて、東はキエフ、ノヴゴロド、コンスタンチノープルより、西はアイスランド、グリーンランド及び北米の東海岸に至り。南は伊太利の南端より、北はバルチツク海に至るまでの海陸を跋涉して、到る處掠奪を恣にし、殖民を企てたるノルマン人の故郷は、正さに此地方なりしなり。基督教化されたるスカンデナヴィアは、十世紀頃より丁抹、瑞典、諾威等の王國を形造くるに至れり。然れども以上の諸國は、獨逸に於けると等しく、貴族の權力強く。王は一代毎に貴族に由りて選舉せらる。貴族は王の選舉ある毎に自己の權力を主張し、王の權限を縮め、且農民を苦む。其後僧侶も亦貴族の仲間に加りて王を制肘したり。十六世紀の初め、瑞典が獨立を企てし時、僧侶は事大主義を執りて丁抹に味方したり。一三九七年。丁抹女王マルガレットの代に、カルマルの同盟成立して、三國共



瑞典獨立を謀る

に一君主の支配を仰ぐ事となりしが、其盟約の條文は、幾多重要な問題を不問に附せしを以て。久しからずして瑞典に叛亂續發し、一四四八年には、カールクヌードソン王に擧げられたり。夫より十年を経て丁王クリスチアン一世瑞典軍と戦ふて之を破り、再びその統治權を回復したれども。充分其權力を確立し得たるは、其孫クリスチアン二世なり。然るに此頃は恰も瑞典が其永久的獨立を企圖しつゝありし時代なりき。

### 第二章 丁抹の宗教改革

クリスチアン二世

丁抹の宗教改革は一五一三年に於けるクリスチアン二世の即位に始まり。王は才氣倫を抜き、又當時の王侯中尤も善く教育を受けた

丁王クリスチアン二世瑞典を蹂躙す

る君主の一人なり。天性激烈にして、動もすれば殘忍酷薄を敢てす。一五一五年、王は其後獨逸皇帝として歐洲に覇を振はんとする、カロロの妹イザベラを迎へて皇后と爲しぬ。ルーテルの保護者なるザキリニアの選帝侯フリードリツヒは王の叔父に當れり。丁抹王にして此の如き勢力ある門閥と姻親を結びしは、此王を以て先登と爲す。クリスチアン二世の即位するや、瑞典に於ては獨立の氣運既に熟したり。扱一五一二年、總督スヴァントスチュールの死するや、其後任者の選定に就きて、事大黨と獨立黨との間に激烈なる軋轢を生じ、數年に涉りて決せざりしが、クリスチアン其機に乗じて瑞典を征服せんと欲し、一五一八年には失敗せしも、其翌年更に大兵を率ゐて來襲し。獨立黨の首領ステンスチュールの軍と戦ふて之を破り。彼をして負傷の爲に死に至らしめたり。ステンスチュールの未亡人、勇敢にして義烈、良人の殘兵に指揮して、首府ストツクホルムを守ること數月に及びしが、終に謀臣等の勸を容れて城門を開放せり。一五二〇年十一月、ク



丁抹に於ける  
クリスチアン  
二世の政治

ストックホルム  
の血浴

リスチアン首府に入りて瑞典王の戴冠式を舉行す。是より先き王は大赦令を發布し、叛亂に参加せし者を罪せざるべきを誓ひしに拘はらず。戴冠式より數日の後、王は國內の有力なる貴族高僧等を城内に欺き招きて、卒かに之を逮捕せしめ、偏頗なる裁判を以て死刑を宣告し、一人毎に市場に曳出して、市民環視の中に彼等を斬殺せり。第一日に於てその數九十を越へたり。後瑞典の王となれるグスタヴァスエリクソン（一名ヴァサの父もその犠牲となりし一人なりき。史に之を「ストックホルムの血浴」と稱す。此背信不徳、殘忍の行爲は、瑞典人の愛國心を刺撃して、終に獨立の壯舉を圖らしめたり。

「ストックホルムの血浴」の張本人なるクリスチアン二世は、その本國に於ては惡君にあらず。その治績昭々として見るべきものあり。貴族高僧等を抑へて王權の伸張を計らん事は、その主要の目的たり。加之、王は學問を奨励し、度量衡を均一にし、道路を改築し、商業を盛にし、難船保護の法を設け、海賊を平げ、農奴虐待の弊を減じ、窮民扶助の組織を

ライオンハル  
ド。カールス  
タット等丁抹  
に招聘せられ  
し功を發せ  
す

人民シュレス  
ワフツグ・ホ  
ルス・タイン侯  
を王に戴かん  
とす

立てしなどの事を総合せば。前述の大罪惡は寧ろ一時の感情に驅られし結果ならんかと思はる。然れども王者の過は日月の蝕の如し。瑞典人民は決して王の殘酷なる行爲を忘れざるなり。扱王は、その頃ルーテルに由りて唱道せられたる宗教改革を、丁抹にも輸入せんと欲し、叔父フリードリツヒに書を贈りて、ルーテル派の神學者を派遣せん事を請求せしかば、マルチンラインハルドなる者その求に應じて來れり。彼は通譯者を介して説教せしが、その結果良好ならずして歸國し。その後カールスタット來りしも、亦不首尾に了りぬ。是に於てか王は自ら率先して實際の改革を行はんと欲したり。修道院の取締を嚴にし、無學なる僧侶を廢して學識ある者を採用し、高僧等の生活を質素にしたとひ宗教に關する事件と雖も、法王に上告する事を禁止せん爲に新法律を設けたり。然るに未だその事の實行せられざるに當りて、反對の勢力漸く加りぬ。外交上の事情切迫してリユーベツク市遂に王に向て戦を宣せし時に方り、一五二二年スエルランドの



クリスチアン二世の末路

貴族先づ叛旗を翻へし、次ぎにユツトランド人民も亦叛きて、王の廢位を宣告し、王の伯父にしてシュレスヴイグホルスタイン侯なるフリードリッヒを王に推戴せんことを誓へり。フリードリッヒはクリスチアン二世と豫ねてより仲悪かりし人なり。王は此報を聞きて大に落膽し、未だ一戦を交へずして、一五二三年四月妻子を携へて大陸に遁れ、カロロ帝始め他の羅馬教派の親戚の援助を得んとして、再び舊教に改宗し、轉柯落泊九個年を経て竟に其王位回復の目的を達する能はざるのみか、反て敵手に捕へられたり。(王は幽囚十七年の後一五五九年遂に獄中にて死去せらる。)

王位は棘刺の毒

フリードリッヒが占めし玉座は、安樂椅子にあらず、荆棘の掃なりき。國內分裂して混亂を極め、法王、カロロ五世、及びルーテル派の諸侯は、依然クリスチアンを以て正統の王と承認したり。勢ひ斯の如くなるを以て、フリードリッヒは只管彼を選擧せし貴族、僧侶、及び人民の厚意に頼らざるを得ず。讓歩に重ぬるに讓歩を以てして彼等の甘心を買へ

フリードリッヒ八方美人を演ず

パウロ・エリ

ハンス・スタウゼンの小傳

り。貴族に對しては、將來監督の任に當る者は、丁抹の貴族に限るべき事を約し。高僧には、異端撲滅羅馬教保護を誓ひ、諸國にさへ一時その獨立自治を許さるを得ざりき。王は衷心宗教改革を採用する事の止むべからざるを信せしと雖も、四圍の事情に餘儀なくせられて、一時假面を着けざるを得ざりしなり。

宗教改革は丁抹に於て政治上の必要條件なりしと雖も、又それを促したる宗教上の原因なしとせず。曩きにマルチンラインハルドの渡來に際し、通譯の任に當りしパウリエーゼン(Paul Eliassen)は、其意見甚だ保守的なりしと雖も、兎に角宗教改革の先導者の一人と謂はざるべからず。彼はルーテルの小冊子を丁抹語に翻譯せしとあり。過激極端の輩と進退を共にせざりしも、時流に媚び、權門に叩頭する底の俗物にはあらず。『丁抹のルーテル』と綽名されたるハンス・スタウゼンは、エリエーゼンの門下生なり。タウゼンはルーテルと同様、農夫の子なりしが、少ふして修道院に入り、嶄然才鋒を露はし、爲、外國に留學を



丁抹の聖書  
盛んに輸入せ  
らる

命せられ、歸國後コーペンハーゲンの神學校の教授となりぬ。更に第二回留學の命に接し、ケールン、ルーヴェン等を経て終にウ井ツテンベルヒ大學に赴き、ルーテルの新教義に熱中せしより、院主は彼を喚返へして獄に投せり。暫くにして釋されしも、彼は最早舊思想の先輩と調和の途なきを知り、修道院を脱奔せり。ウ井ツテンベルヒ大學の同窓にしてやがて彼の義兄弟となれる、イエールゲン・サドリン(Jørgen Sadolin)も共に彼を助けて福音主義の宣傳に従事した。タウゼン・サドリン等と歩調を同ふしつゝ、改革主義の説教を爲す者處々に起り、一五二四年には、譯者知れざる丁抹語の新約聖書、外國より夥しく輸入せられて、福音主義の傳播に大なる聲援を與へたり。王は此有様を觀て心密かに欣びしと雖も、表面上冷靜を装ひて時機の熟するを俟ちしに、外交上の好況は、王に一段の勇氣を添へぬ。既にシュレスウイグ侯となれる王の長子クリスティアンは、堅固なるルーテル派の教徒となり。フランケンブルグ侯アルフレヒトも亦新教に歸依してクリス

時機到來王公  
くに新教を扶

チアンの女に縁談を申込みぬ。王以爲らく、隣國の形勢斯の如くなれば、一朝變あらん時、強固なるプロテスタント同盟を締結せんこと掌を翻すが如く容易ならむと。フリードリッヒは是より漸く其假面を脱して、公然新教の傳播を助くべき方針を執れり。タウゼン始め其他の説教者、王の保護を受け顯要の位置に進みて氣焰益々熾なり。一五二七年オテンスの國會開けしとき、僧侶は王が即位の時の誓約に背けるを責めしが、王之に答へて我は依然基督教會を保護すと雖も、其誤謬を墨守するの必要を見ずと斷言し、尙進んで「信仰は自由なり。人各々その良心に順はざるべからず。國王は財産と身體とを支配すれども、その靈魂を支配する能はず。人若し神意に従ひ基督の旨にかなふ所の事を説教するに當り、そを迫害せんとする者あらば、我は其迫害者を罰し、其説教者を保護すべし」といへり。嗚呼何ぞその言の公平、その理の炳焉たるや。宜なり改革の史上に血痕の極めて尠き事。貴族及び高僧が連合して王の意見に抗せんとするを視て、王は巧み

國王自由主義  
を宣言す



に將來沒收せんとする寺領を、貴族に分配せんことを約束して彼等を己が味方と爲し、僧侶を孤立の地位に立たしめたり。改革運動是より大に進捗す。一五三〇年、**アウグスブルグ**に國會開かれて、新舊兩教の提携將に行はれんとするや。丁抹の舊教徒も亦陰かに自國に於て同一の舉あらんことを希望しつゝありしが、之に反し新教徒の態度は寧ろ進撃的なりき。**タウゼン**は四十三個條の信仰告白書を起草して之を國會に提出し、沼辯を揮てその各條の旨意を辯明したり。舊教方は反對論を試み、新教徒更に之を反駁して双方大に激昂し、將に討議會を開かんとせしが、その會場に於て拉丁語を用ふべきか將た丁抹語を用ふべきかに就きて、意見の衝突を來し、結局流會となりぬ。改革主義益々國民の贊成を得、破竹の勢を以て傳播し、中には彌次馬も加りて寺院内の偶像畫像等を破毀するに至れり。

國內の形勢上述の如く紛糾せる秋に當り、**フリードリツヒ**病を以て逝けり。王に二子あり。長は**クリスチアン**にして前にいへり如く

改革主義國民の贊成を得たり

一五三三年フリードリツヒ王崩御せらる

クリスチアン三世即位

王風にルーテルを慕ふ

教會の規定

熱心なる新教徒なり。異母弟**ハンス**尙幼し。その何れを擇ぶべきかに就きて爭論起れり。更に一部の有力者は圍圍中にある**クリスチアン**を奉じて王と爲さんと欲し、**リューベツク**市と結びて兵を擧げ、一時其勢昌んなりしが、最終の勝利は年若き**クリスチアン**に歸し、一五三六年**コーペンハーゲン**に凱旋したり。之を**クリスチアン三世**と號す。**クリスチアン**の即位は即ち監督等の失權を意味す。彼等は其の參政權を失ひ、その榮華を失ひ、その領地邸宅を失へり。王は嘗て少き頃**オルムス**國會に隨行して**ルーテル**に會ひ、爾來彼を慕ふて新教を奉ぜし人なり。故に王の即位するや。直ちに**ルーテル**の助言を求め、**メンケン**トンを聘せんと欲せしが、その事行はれずして**アーゲンハーゲン**を聘する事となりぬ。彼丁抹に來りて王及び女王の戴冠式を舉行し、又七人の新教監督に按手禮を授けたり。**タウゼン**は一時王の信用を缺きしが、後監督に擧げられたり。一五三七年の秋、丁抹教會の新規定なるもの神學者等に由りて編纂せられ、**ルーテル**の協賛を経しが、



アウクスブルグ信仰告白を採用す

一五三九年其規定はオデンスの國會に於て可決せられ、爾來幾度となく訂補して終に丁抹教會の基法となりぬ。此法律に従へば、一般の僧侶は信徒之を選擧し、高僧は僧侶の代表者に由りて選擧せらるゝ規定なるも、その選擧せられし者は王の許可を受けざるべからず。而して監督の任命は事實上勅命によりて親任せらるゝに均し。教義に關してはタウゼンの四十三個條を捨て、アウクスブルグの信仰告白を採用し、儀式禮拜法は成可く舊式を保存して新奇に移ることを避けたり。寺領より收むる所の新税は、主として之を學問教育の爲に消費し、一時衰頽せし大學は擴張せられ、聖書の改譯は獨逸語に據らず、拉丁希臘を基礎として着手する事となりぬ。若し丁抹の宗教改革の缺典を探ぐれば、一にして足らずと雖も、大體より觀れば、寛容主義の能く行はれ、過激突飛なる舉動の極めて寡かりしを認めずんばあらず。プロテスタント主義と國民主義は獨立せる丁抹教會を生みて國家統一の基礎益々固く、商業、學藝、共に發達の氣運に向へり。若しクリスチアン

丁抹に於ける宗教改革の好結果

三世の世を近りし一五五九年に於ける國狀を將て、之をマルガレット女王のカルマル同盟時代の夫れに比ぶれば、その差天淵も雷ならざるなり。

### 第三章 諾威及びアイスランドの宗教改革

諾威は丁抹に従屬せしと雖も、尙幾多の特權を有したり。フリードリヒ治世の後半期に於て、新教主義盛んに此邦に傳播せしが、其勢力を得るに及びて、寺院會堂に對して暴行を加ふる者輩出し。舊教徒大に之を憤慨せり。トロンドイエムの大監督オラーフ・エンゲルアレクトセン殊に之を愛へ、一五三一年幽囚中のクリスチアン二世を奉じ

Olaf Engelbrektsen of Trondhjem



獨立の好機を逸して全く丁抹の屬國とな

強迫的改革

Jon Aræen

て王に推戴し、丁抹に向て叛旗を揚げしが、フリードリツヒの爲に難なく打破られたり。フリードリツヒ死して丁抹が内亂の渦中に陥りし時は、諸威に取りて獨立の好機會なりしも、オラーフ以下の有力者空しく其機會を逸せし爲、クリスチアン三世は兵力を以て容易く諸威を占領しければ、人民は古來株守せし特權をさへ奪はれ、純然たる丁抹國の屬國となり、王の命令に由りて新教に歸依せり。然れどもそが社會に及ぼし、結果は、少くとも其改革の當初半世紀間に於て寧ろ多くの弊害を醸し、血を流し、場合も亦多かりき。アイスランドに於ける宗教改革は、諸威の夫れよりも更に一層の慘劇を現出せり。新約聖書がその國語に翻譯せられしは一五四〇年にして、數多の愛讀者を得たり。改革運動は凡て丁抹に則りて着々行はれしも、概ね命令的にして人民の輿論はそを歓迎せざりしものから、一五四八年監督ヨニアレーゼン等主謀となりて叛亂を起し、一五五四年に至りて漸く鎮定せられ、爾來改革は愈々強行せられたり。

#### 第四章 瑞典の宗教改革

瑞典に於ける宗教改革の諸原因

瑞典國の宗教改革は丁抹の夫れと均しく、政治上の必要に基けり。寺院及び修道院は頗る殷富を極め、王と貴族の領地を合併するも、尙寺領の三分の一に及ばざりしといふ。而して其莫大なる寺領が、免税の特權を有するを思は、爲政家が茲に着眼してそを國家の財源たらしめんと欲せしこと豈道理なしとせむや。監督等は宏壯なる邸宅を構へ、城塞を有し、兵を蓄へ、出入に數十乃至數百の從者を携ふるを例とせり。瑞典の宗教改革は主として監督の勢力を打破し、彼等及び教會の財産を奪はんが爲に採用せられしなり。その時代の國狀に照らして考ふれば、此處置は尤も適當のものと言はざるべからず。論



瑞典雄飛の遺  
因に改革にあ  
り

より證據、十七世に於ける瑞典の富強と雄飛とは、全く宗教改革の賜と見るべきに非ずや。

獨立首唱者グ  
スタフアス、  
グアサ

王に擧げらる

『ストツクホルムの血浴』は瑞典に於ける丁抹の統治權の根柢を搖かしぬ。國民は熱血沸騰して、獨立を全ふせんことを各自の胸中に誓へり。その獨立軍の指揮者なりしものを、グスタフ・エリクソンと爲す。予は本章中に世間一般に博く知られたるグスタフ・スヴァサの名を用ひむと欲す。彼は一四九六年に生れ、長じてウプサラに學び、ステン・スチユールと共に丁抹軍と戦ひ、丁抹の朝廷に人質たりしことあり。名ある門閥の出にして、父祖代々樞密院の議員たり。一五二一年以後叛旗を揚げて丁抹に抗し。具さに艱難を嘗めて奮戦し、一五二三年竟に首府ストツクホルムを占領して、國會の決議に由り國王に選舉せられたり。然れども王の地位は決して安樂にあらず。百難尙彼を圍繞せり。過ぐる百餘年間、殆ど何等の確固たる中央政府存せざりし爲、豪族地方に割據して權力を揮ひ。市邑は絶間なき戦亂の爲に疲弊し。

財政上の困難

高僧等王に従  
はん

負債償却の唯  
一法

全國の過半を領する貴族僧侶輩は納税の義務を負担せず。商業殆ど外國人に壟斷せられ。王はハンザ同盟の首府なるリュubeckより金を借り、返済期限到りてもそれを償却する能はずして、債鬼に追窮せらるゝ如き有様なりき。上述の如き財政困難は、王をして富裕なる教會に助力を求むるの止むを得ざるを感せしめたり。監督等全然王の政策に反抗せんとするにあらず。炯眼にして有力なるリンケーピングの監督ヨハン・フラスクの如きは、率先して王を助けんとする態度を示せり。自餘の監督等も多くは王の意見に賛成し、然らざるものは漸次賛成者に其地位を譲らざるを得ざるに至れり。瑞典人にして多年外國に在り、羅馬法應に事へて顯要の職に昇り、アドリアン六世の勅使として故國に來りしヨアンネス・マグニも亦王に協賛の忠誠を盡せり。彼その後ウプサラの大監督に選ばれしが、晩年に至り王と少しく意見の相違を生ずるや。王は彼を大使として魯西亞及び波蘭に赴任せしめたり。王は既に有力なる監督等をして租々自己の意見に賛同



せしめしを以て、リユーベック市より負債償却を迫らるゝや。乃ち寺院に命じて強制的に國債に應せしめたり。然れども財政上の困難尙非常なりし上に、内亂屢々起りて王を苦めたり。

ハトリ兄弟改革主義を唱道す

此時に當り獨逸に於てルーテルが唱道したる宗教改革の主義漸く瑞典に行はれしが、ペトリ兄弟は其卓出せる首唱者なりき。彼等は鍛冶工の子なり。兄をオラウス弟をロレンチウスと云ふ。少ふして獨逸に赴き、初めライプツヒ大學に學び、ルーテルの名聲噴々たるを聞きてウ井ツテンベルヒ大學に轉じ、終に熱心なるルーテル派の信徒となりぬ。一五一九年歸國の後、兄はストレングニスに於て教育に従事し。傍ら獨逸仕込の新教主義を鼓吹せしが、其市の執事長ローレンチウスアンドレエ深く其説に感動し、爾來ペトリ兄弟と共に改革主義の木鐸となりぬ。彼は博學俊敏の人にして、且事務の才に長せしかば、王の信任厚く重要な職に進めり。オラウスペトリはストツクホルム市の書記に。ロレンチウスペトリはウブサラ神學校の教授に

執事長アンドレエ新説に賛成す

プラスク監督の抗議

任命せられたり。ルーテル主義が盛に唱へらるゝに方り、プラスク監督は先づ反對の態度を執り、王に抗議を申込みしが、新教義の渡來を以て自家の政策を實行するに倔強の武器と心私かに喜べるグスタヴァスは、素よりその抗議を容るゝを欲せず。曖昧模糊の返答を與へて、實は新教主義者を庇護せり。一五二四年には新教派の彌次馬等ストツクホルムの寺院に狼藉を働き偶像を破毀せし爲、一時輿論の攻撃を受けて小頓挫を來し、が、同年のクリスマス祭には、兩教派の討議會宮城内に催され。オラウスペトリとペーテルガルレ (Peter Gallo) 聖書に關して論戰を試み。その翌年の春オラウスは公然妻帯して羅馬教の法規を守らざる事を明かにし。新教の氣焰再び熾んになりぬ。同年王はマグニ大監督に命じて聖書の翻譯を計畫せしめしが。プラスク監督の反對ありし爲、それを竣功すること能はざりき。左れど一五二六年には、ローレンチウスアンドレエ等の手に成れる新約聖書の翻譯出版せられて。ルーテル主義の傳播を資けたり。一五四一年に至

彌次馬の狼藉

聖書の翻譯



寺領沒收を實行す

りて公にせられたる舊約聖書の翻譯と新約の改譯は、前者に比して一段の進歩を示せり。此は専らロレンチウスベトリの盡力に由りて成りしなり。上來述べし如く王は一方に於て民間に新教の勢力を増さしめつゝありしが、他方に於ては孜孜として監督及び寺院の領地を剝奪せん事に苦心しつゝありき。高僧中の富者と目指されたるアラスク マグニ等先づその鎗玉に擧げられんとす。形勢の我に非なるを觀て、マグニは一五二六年國を去り、アラスクも亦數年の後その尾を追ひて去り、終生瑞典に歸らざりき。

ヴェステラスの國會

一五二七年國會をヴェステラスに開きしが、是れ王の意見と監督等の意見の決勝點なりき。ルーテル主義を採らんか。將た之を撲滅せんか。寺領を沒收して國庫の窮乏を補充すべきや否や。是れ議論の要點なり。監督等の嚴しく反對するや。王は斷然讓位の決心を示して議會を威嚇せしかば、議會は忽ち二派に分れて議論鼎の如く沸きしが、結局王の意見に従はんとする者多數を占めぬ。蓋し王が貴族に

王貴族と提携して監督等を屈服す

重要なる決議

有利なる條件を以て彼等を誘致し、監督等を孤立せしめられたればなり。豫ねて斯くあるべしと期したるグスタヴァスは、議會の己れに屈せしを見て、機逸すべからずと爲し、左の事項を決議せしめたり。(一)監督、寺院及び修道院に附屬する財産その維持上極めて必要の部分を除くは、爾來國王のものたるべく、隨て上擧の財産より徵收せらるゝ税金は、右施設物の維持に必要な部分を除き、之を國家の用に供ふる事。(二)一四五四年以後、教會に寄附せられし無稅地は、之をその寄附者若くばその子孫に返附する事。(三)說教師は、純粹なる神の言葉以外に何事をも説教すべからざる事を決したり。而して高僧の任免は、王の協贊を受くべき事。又一般僧侶と雖も、王が不適任と認むる時は、その者を退職せしむべき事をも決議したり。加之僧侶は、一般臣民と同様、國法に服従すべきものにして、如何なる場合に於ても、羅馬法王に上告する事を禁じたれば、瑞典は正しくルーテルの教義に基きて、獨立自治の國立教會を組織したるなり。瑞典が毫も血を流さずして此改革を行ひし事

王宗教改革を利用して貴族高僧を屈し専ら國王政の基を固くす



は、吾人の賞讃を價す。左れど一歩進みてその真相を見れば、宗教改革は手段にして目的は専制主義にありしなり。僧侶が嘗て有せし強大なる参政權を失ひしこと勿論なれども、貴族も亦等しく昔日の勢力を失へり。歴代の諸王をしてその御し難きを啣たしめたる國會は、今や一變して王の諮詢に應じ獻策に努むる忠僕と化しぬ。

教會内部の改革

王は教區を改正し、舊教主義を墨守せんとする監督を廢し、新教主義の者をして之に代らしめたり。此の外讚美歌の編纂、聖晩式の改正を始めとして、禮拜法の改革に着手せしが、是等の點に關しては、出來得る限り舊きを保守して新奇に奔ることを警めたり。一五二八年初めて瑞典國內の新教徒の大集會を開催し、王は新任諸監督列席の上、戴冠式を舉行せり。此日の説教者は雄辯なるオラウスベトリなりき。一五三一年、ローレンチウスベトリは、勅命に由りてウプサラ市の大監督に任せられたり。一五四〇年、貴族會議に於て、グスタヴァスの二子ヨハン及びエリツクの相續權を承認し、一五四四年には、更に王の男系

戴冠式を舉行す

瑞典世襲王政となる

の子孫を以て正統の王位相續者と認むる事を決議したれば、從來の選舉王政は變じて世襲王政となりぬ。王權の確立と共に國力大に發展し。久しくバルチック海の商權を專有せしハンザ同盟の横暴を打破し。英佛、丁魯と通商條約を結び。貿易を盛にし。製造業も亦勃然として振ひ。北方の鐵山發掘せられて財源益々裕かなり。一五六〇年王の瞑目の頃には、瑞典の富榮前古無比の状態を呈し、以て十七世紀に於ける大活動の地盤を備へたり。

國力發展

王が寛容なりし所以

王は國家の獨立と王權の伸張を目的として、熱心に之を追求せしが故に、其手段たりし宗教に對して寧ろ寛容なるを得たりしなり。王は新主義の教會を立てんとしつゝ、ある事をさへ自覺せざりき。最初冷淡なりし一般人民は、漸次新教の何たるを理解して、之を歡迎するに至れり。此點に於ては、ベトリ兄弟の功勞偉大なりとす。兄は既に大監督の地位を占めて、其感化を上流社會に與へしが、弟オラウスは民間に在りて、或は巡回説教を爲し、又は多くの小冊子を著はし、讚美歌

改革の効果を益々顯はる



を作り、ルーテルの説を紹介しなごして、一般人民の教化に努めたり。宗教改革は、数十年を経て、漸く深く人心に根ざしつゝ、社會全體に好感化を予ふるに至れり。

一五六〇年、グスタヴァス王死してその子エリック十四世即位せしが、王は心力の健全を缺き、加ふるにカルヴン主義に傾き、内治外交の方針宜しきを誤りて人望を墜せしより、暫くにしてその弟ヨハン三世代り立つ。此王はポーランドより入興せられし、皇后カタリナの感化に由りて、加特力教に復せんとする傾ありしかば、ゼスイツト教徒此機に乗じて瑞典に入來り、頻りに新教の勢力を覆さんと謀れり。王は竊かに改宗し、又將に羅馬法王と妥協せんごせしが、その交渉の未だ熟せざるに當り、ポーランドに對する外交政策の畫餅に屬せしより、王の舊教熱忽ち冷却し、剩へカタリナ皇后死して新教主義の第二の皇后を迎へし爲、新教の勢力再び舊に復し、ゼスイツト教徒は國外に放逐せられき。一五九二年ヨハン三世死し、その子シギスムンド

エリック十四世  
ヨハン三世  
代り立つ

シギスムンド  
王即位

プロテスタント  
教會の基礎  
固し

チャールス九世  
の教義を  
立て立つ

位に即く。シギスムンドは、六年前既に波蘭王に選ばれし人にして、且純然たる羅馬教徒なり。王の伯父にしてグスタヴァスの末子なるチャールス、國會の決議に由りて攝政となり、王の到着に先だちて、新教主義が瑞典の國教たる事を宣言し、王の來着するを待ち、彼をしてその維持に盡力すべき事を誓はしむ。一五九三年には、ウプサラに宗教會議を開き、聖書を凡ての教義の基礎とすべき事を定め、アウグスブルグの信仰告白を採用せり。是に於てか、瑞典の改革はいよゝゝ牢固となりて、復動搖の憂なきに至れり。然るに王は、先きの宣誓は人民の強迫に出でたりと爲して、それを遵奉せず。陰かに舊教徒を庇護せしより、國會は斷然王の喪權を宣言し、チャールスを立て、王と爲し、チャールス九世と號す。實に一六〇四年なり。チャールスは個人としてはカルヴンの教義を喜みしに拘はらず、國王としてはルーテルの教義を固持して、只管國運の發展に努めたり。王の子に有名なるグスタヴァスアドルフスあり。三十年戦役にチリー、ワルレンスタイ



ンの兩勇將を破りて、赫々たる威名を天下に輝かし、獨逸に於けるプロテスタント教徒の運命を累卵の危きより救ひ、以て瑞典を歐洲一等國の班に加へんとす。

## 第四編 瑞西蘭の宗教改革 (ツ井ングリー時代)

### 第一章 瑞西の國體

ルーテルの改革運動が、將に天下を撼動せんとするに當りて、アルプス山腹より、更に第二の改革の火焰燃え上れり。チューリツヒ市を牙營とするツ井ングリーの運動是なり。予はツ井ングリーの事を述ぶるに先だちて、當時瑞西の國狀を略舒せんと欲す。



瑞西聯邦の起源

瑞西の建國は、一二九一年に於けるシユウヰツ ウリー ウンテル  
 ワルデン三市の永久同盟に始まりしが、夫より以後、一五一三年即ち  
 改革時代の曙に至るまでに、ルーツェルン チューリツヒ ベルン  
 バセル以下六州、此同盟に加はりて茲に十三州の聯邦を成せり。各  
 州自治政體を有し、唯對外政策と内治上の重大事件に付きて、共同一致  
 の運動を爲すのみ。其國旗は、赤地に白十字を書き、"Each for all, and all  
 for each"の語を記せしものなり。(因にいふ日本赤十字の記章は瑞西  
 の旗の彩色を顛倒せしものなり「石黒男演説」)。而して其國會は、人口の  
 多少に關せず、各州より選出したる同數の代議士より成る。尙州には  
 州會あり。男子にして戸主たる者議員たり。此聯邦は、元獨逸佛朗西、  
 アルグンド公國の中間に介立せし自由市の連合に始まりしものにし  
 て、其近傍に之と同種類の同盟市二三ありしが、終に瑞西同盟に加  
 はる事となりぬ。故に十五世紀の末アルグンド公國亡びて、其領地が  
 獨佛兩國に分割されし後とても、瑞西は此兩國と人文史上頗る密切

其擴張

獨逸及び佛朗西との秘密の關係を有す

一六四八年其獨立を公認せらる

天嶮と人民の氣象相待て其獨立を全ふす

の關係を持續したり。即ち西に向へる部分は佛朗西と東に面せる部  
 分は獨逸と關係深く、各々其言語風習を同ふせり。ツィンダリーの改  
 革運動が、大に南獨逸に影響し、カルヴヰンの夫れが、佛朗西に多大の勢  
 力を有せし所以、職として此に淵源す。

瑞西聯邦が、歐洲の列強より公然其獨立を承認せられしは、一六四  
 八年のウエストファリアの和議の時なりしと雖も、その獨立の起源  
 は、上文にいへりし如く十三世紀の末にあり。各市の獨立に至りては、  
 更に夫よりも古し。抑も最古の瑞西人は、ゲルマニ人の支族にして、獨  
 立の氣象に富める尙武の人民なり。獨逸の邊境に位して、直接王權の  
 壓迫を蒙らざりし事と、アルプス山麓にありて土地嶮峻なりし事とは、  
 彼等の獨立を扶けたり。而も人民の剛健と勇敢とに由るに非ざれば、  
 到底その目的を完ふするを得ざりしならん。

此故爾たる小共和國を、壓服せんと圖りしもの、中、ハプスブルグ家  
 を以てその巨魁と爲す。實に埃太利は幾度か大軍を以て攻め來りし



危急存亡の戦

が結局敗北に了れり。その戦の重なるものを、モルガルテン(一三一五年)。ゼムパツハ(一三八六年)。ネーフエルス(一三八八年)等の役とす。以上は何れも瑞西に取りて危急存亡の戦なりしなり。一四四四年には、佛王ル井十一世の攻撃を受けて之に克ち、一四七六―七七年間には、アルグンド公チャールス勇敢の侵入を防ぎてその軍を破り、公を戦死せしめたり。埃太利といひ、佛朗西といひ、アルグンドといひ、何れも當時の強國なり。而して此小き瑞西を壓倒せんとして、反て其寡兵の爲に破られしは、抑も何に原因するか。一は、敵兵が其王の征服的野心の爲に餘儀なくせられて、戦場に臨めるに反して、他は祖國の爲、妻子の爲、自由の爲に奮闘死守したりし事、其重なる原因たらずんばあらず。而して夫の剛勇不羈なる瑞西人の氣魂と、一致團結の精神とは、恰も此等の歴史中に養成せられしなり。ヴヰルヘルムテルの傳説、及びアルノルドヴヰンケラーの口碑の如き、素より史的事實に非ずとするも、亦以て瑞西人獨立の氣象を徴するに足るなり。

愛國の精神勇氣を百倍す

現今の瑞西と日本

然らば則ち、瑞西に遊びて唯其風光の明媚なるを賞する者は、未だ能く瑞西の真相を了解し得たるものと謂ふべからず。今や瑞西聯邦は二十二州に増加し、國域一萬六千方哩。人口三百萬。之を我日本に比ぶるに、國域は十分の一に足らず。人口は十三分の一弱に當る。而も歐洲列強の間に介在して、能くその特殊の制度文物を保存しつゝ、列強保護の下に永久の獨立を保証せらるゝ所以のものは、其建國史の勇壯義烈なるに由らずんばあらず。更に此小自由國は宗教改革の大運動にも参加して、一方に於ては、その土着の改革家ツィンケラーを産出せしと同時に、他方には佛國が將に迫害の火中に焚殺せんとして、寧馨兒カルヴヰンを歓迎して、思ふまゝに其才鋒を伸べ、その使命を全ふしめしは、人文史上に特筆すべき事件なり。瑞西人にして米國に歸化せし故フヰリップシャツ博士が、その教會歴史第七卷、即ち瑞西の宗教改革の部、劈頭に掲げし左の評論は、國小く、體軀も亦矮小なる、我々日本人に取りて、一段の感興を催ふせしむるを覺ふ。

ツィンケラーを出し又カルヴヰンをしてその使命を完ふせしむ



神は往々大目的を遂げんが爲に、小きものを選ぶ。小きパレスチン國は、世界に基督教を貢せり。小き希臘より哲學及び美術起りぬ。瑞西國はレフオームド教會の搖籃なり。雪を冠むれるアルプス山の所在地は、大河の源なると同時に、レフオームド派の信仰の源なり。而して瑞西改革の主義は、ライン河、ローン河の水と均しく、西方に流れゆきて、佛朗西、和蘭、英蘭、蘇格蘭に入り、終にツヰングラー、カルヴン等が、纒かにその名のみを聞き知りし新大陸にまで涉りぬ。智識上道義上の企業に比ぶれば、干戈に由りて獲たる勝利の跡は見る影もなし。此世界を永久に支配するものは思想なり。嗚呼思想は不朽のものなる哉。

シヤツフ博士  
祖國を稱讃す

### 第二章 ツヰングラーの修養時代

瑞西に於ける宗教改革の首唱者なるウルリツヒツヰングラーは、西歴一四八四年の正月元旦アルプス山腹なるトツゲンフルヒ教區のウヰルドハウス村に生る、ルーテルの誕生に後るゝこと僅かに二ヶ月。而してカルヴンの夫れより早きこと約二十年なり。我邦にては應仁の亂平ぎてより十年の後。即ち將軍義政公が、東山の麓に新築せし銀閣寺の別荘に在りて、太平樂の夢を貪りつゝ、ありし文明十一年に相當す。ツヰングラーの父は可なりの資産家にして、村長を勤めしことあり。ウルリツヒは十一歳の時バセルの學校に送られ、四年の後ベルンに轉せしが、その地にて彼が師として學びしヴェルフリン(Heinrich Wölflin)は當時瑞西國にて第一の人文學者なりき。此師の下に在ること數年にして、埃太利のヴヰエナ大學に轉じ。二ケ年間留學の後歸省し、一五〇年、即ち十八歳の時、再びバセルに出で、其市の大學に入る。

ツヰングラー  
豊太尉と誕生  
日をもふす

義政公の代に  
當る

人文學者ヴェ  
ルフリン



トマス・ウヰツテンバツ

ツヰングラーの此人の説に感動せらる

ツヰングラーの親友レオ・ユテ

二年を経てパチエラーの學位を受領し、更に二ヶ年の後マスターを得たり。彼は一五〇四年以後、同市に在りて聖マルチン學校の教師となり、傍ら自己の勉強を怠らざりしが、一五〇五年バセル市にトマス・ウヰツテンバツハといふ博學と雄辯とを以て名高き學者來れり。此人は、ルーテルが夫の九十五個條を掲示せし以前より、赦罪券の惡弊を喋々せし人なり。ツヰングラーは彼の説を聴き、翻然として大に悟る所ありき。然れども他日ツヰングラーが反對者よりルーテルの説を祖述せりといふ非難を受けし時、そを辯駁せんとして自己の改革説の獨立を主張せんと力むるの餘り、ルーテルを抑へてウヰツテンバツハを揚げんとせしは、偏見たるを免がれず。彼の親友にして、同時にマスターの學位を受けしレオ・ユテと云ふ人あり。他日ツヰングラーを助けて改革運動に貢献せし俊才なり。史家往々此二人の關係を以て、ルーテルとメラクtonの夫れに比す。蓋し當れりと謂ふべし。要するにツヰングラーの學問は、初め文學及び哲學を主とせしが、此

聖書及び教父等を研究す

エラスムスの感化

チューリッヒを根據地とし、改革に従事す

頃よりして神學を専攻したり。一五〇六年、グラルス市の牧師となりしが、一五一三年頃より聖書を讀み、且教父等の著書を繙かん目的にて希臘語を學び初めたり。彼は好んでゼローム、アウガスチン、オリゲン、クリソストム、アムブロース等の著書を涉獵したり。その中尤も能く彼が愛讀せしは、アウガスチンなりき。彼はチューリッヒへ移りし後、更にヘフライ語の研究を始めしが、此語の造詣は、拉丁希臘の夫れに比して數等劣りしと雖も、其熱心は眞に稱すべきなり。文學上に於て彼を指導せしは、その頃バセルに移住し來りたる人文學の泰斗エラスムスなり。エラスムスのバセル居住は、一五一四—一五一六年間と一五二一—一五二九年間の兩度なり。彼はその以前よりエラスムスを賞揚し、その學才文藻を慕ひしが、エ氏がバセルに來りし後は、其實際一層親密となり、その感化を蒙りしこと益々深きを加へたり。一五一六年ツヰングラーはグラルスよりアインジーテルンに轉任し、一五一九年更にチューリッヒに移り、終に此地を根據地として、一五三



一年戦死の時に至るまで十二年間、改革運動の爲に盡瘁したり。此市は瑞西の北部に當れるチューリッヒ州の首府にして、當時人口七千ありしと云ふ。

### 第三章 ツィンダグリーとルーテル

扱ツィンダグリーとルーテルとは、その改革主義を唱道せしこと孰れが早かりしや。前者の後者に負ふ所如何といふ問題は、随分入釜しき争點なれども、吾人は兩者の唱道が、粗ぼ同時にして且獨立のものなりし事を斷言すると共に、その事業の感化の上より見れば、前者が後者に負ふ所多大なりし事を信せんと欲するなり。想ふにツィンダグリーが、その説教の中に、福音主義を説き初めしは、一五一六年頃なりしが

兩氏期せずして同一の説を唱道す

兩氏家庭の相違

如し。彼は一五一七年友人カピトールに向て法王殿倒はすべしなどといへりしも、彼が一五二〇年まで平氣に法王よりの年金を受け居りし事實あるが爲に、彼の主張に十分の重味を置く能はざるを遺憾とす。獨逸の宗教改革が瑞西の夫れに異なる事は、其國體國狀の相違に基くこと勿論なれども、又幾分か其首唱者の性格に由るもの少しとせず。而してその性格の相違は、その生ひ立ちし家庭及び社會の相違に由る所多しとす。ルーテルの少年時代に關しては、予既に之を詳述せり。ルーテルの家庭を荒涼たる秋に比すべくんば、ツィンダグリーの家庭は台蕩の春に譬ふべし。後者は何不自由なき家に生れ、揚氣に人生を樂む所の習慣を養ひ得たり。唯夫れ愛國の熱情に至ては、瑞西人の特長にして、彼は幼少の頃より充分に其精神を鼓吹せられたり。左れど彼の宗教的經驗は、ルーテルの如く深刻ならず。彼は罪てふものに關して、深き感覺を有せざりしが如し。道義の念も亦他の同輩に卓出したりと云は言ひ難し。要するに彼は智の人にして、徳の人にあらず。



ルーテルの頭は中世的に近世的なり

信仰上の経験なるに及ばず

ル氏は純然たる宗教改革を主張し、その眼を社會に及ぼして、人々の心を改革せんとした

頭の人にして心情の人にあらず。ルーテルの頭腦は寧ろ中世的にして、ツヰングリーの夫れは近世的なり。前者の本領は宗教改革にして、人文學はたゞその手段たるに過ぎず。後者は人文學者にして、時勢の必要上、宗教問題に指を染めしが如し。ルーテルは狭くして深く、ツヰングリーは廣くして淺し。ルーテルは、信仰上の煩悶の爲に、エルフルトの修道院に入りて純然たる修道僧の生涯を送り、苦心健闘の末、パインブルの裡に一道の光明を認め、義人は信仰に由りて救はるべしとて、中心的眞理を把握するに至りしなり。かくの如き甚深痛切なる宗教上の實驗は、ツヰングリーの生涯に於て見出すべからず。彼は當時歐洲の思想界を支配したる人文學の門戸をくゞり、その大家なるエラスムスの感化を受けて、原始的基督教の研究に移り、終に羅馬教會内部の惡弊を攻撃するに至りしなり。ルーテルの改革の全然宗教的なるに反して、ツヰングリーの夫れは社會的なり。後者は愛國愛世の經世家にして古の豫言者に倣ひ、宗教の立場より國家を指導し、社會を改善せ

ルーテルは宗教の本領を守

ル氏の改革は保守的進歩的夫れは進歩的激烈的なり

んと欲したり。晩年彼が強制的に反對の諸州に、新教主義を遵奉せしめんと圖りし結果、武力を用ふるの止むを得ざるを説き、自ら作戰計畫にさへ與りて敗軍の陣頭に斃れしは、蓋し之れが爲なり。ルーテルは固く宗教家の領分外に逸出せざらんことを力め、政治に涉る事件は、一切之を司權者の手に委ね、唯教義信條の編成、教會制度の規定若くは教育法の改正等を以て、その目的を達せんことを期せり。然れども獨逸にては、改宗の事件が、動もすれば諸侯伯の政治的野心の犠牲に供せられし形跡あるを免れざりき。ツヰングリーが、聖書の命せざる事を悉く斥けんとせしに反し、ルーテルは聖書の禁止せざる事は一切その儘に爲し置かんと欲したり。故に前者の改革案は、一見靜穩なるが如くして、實は過激なり。ルーテルの信仰は神秘的にして、羅馬教の教義に逆戻せし個處少からず。ツヰングリーの思想は純理的にして、一旦前進すれば、回顧することなかりき。但し兩者が、平民の中より出でて平民の指導者となりし事と、敬神愛國の念に富みし事と、信仰の



基礎をバイブルに置きて、僧政の悪弊を打破せんと企圖せし事に於ては則ち一なり。若し夫れ次編に詳述せんとするカルヴヰンを以て、此二人に對照せば、餘事は扱置き、その神學系統を組織し、教會制度を規定する上に於て、優に兩者を凌駕するものあるを見る。カルヴヰンなかりせば、ツィンケラーの事業の影響極めて微弱なりしならん。

帝政主義の盛んなりし獨逸に於ては、宗教改革も等しく同一の典型を採りて發展し、獨立自治を國本とせる瑞西に於ては、民主々義の教會起りぬ。獨逸にてはルーテルの名に因めるルーテラン派起りしと雖も、その教會政治が全く國家の管轄に屬せし爲、ルーテル最初の主張と背馳するに至れり。瑞西國に於ては、ツィンケラーの強制的統一の計畫失敗に終りし結果、反て政教分立の基礎を固くし、自由の國家に、自治教會の設立を見るに至れり。知るべし、基督教の純眞理はキリストに溯りて始めて了解し得らるべしと雖も、若し夫れ教會の組織に至ては、その國民の歴史及び状態に適應すべきものなることを。

教會制度と國體

### 第四章 傭兵及び外國の恩給

瑞西歩兵の勇猛

ツィンケラーの改革運動を叙述するに先だちて、尙記すべき事あり。瑞西國に於ける傭兵の習慣と、外國の王侯及び羅馬法王より恩給を受ける習慣是なり。中世の末葉、瑞西が其國難に際して、屢々寡を以て衆に當り、歩兵を以て騎兵を破るの實例を示せしより、スウヰス歩兵の威名歐洲に噴々たりしが、幸か不幸か。その頃よりスウヰス歩兵の勢力を借らんとする風習起りぬ。佛朗西を筆頭として伊太利の諸侯、就中羅馬法王は、最大の華主なり。彼等はスウヰス歩兵を雇ひて、攻守の用に供へたり。瑞西人も亦之を惡くからず思ひ、その要求に應じて、出稼ぎ戦争を爲し、運好くば多額の報酬に懐を肥やして、歸國するを

傭兵と外國恩給の惡習



傭兵は瑞西人の道徳を墮落せしむ

常としたり。而してその傭兵募集の任に當る瑞西諸州の有力家は、平時と雖も外國政府より巨額の手當を受けて、有事の時彼等の要求に應せん事を約束せり。勿論我邦の歴史に於てこそ、絶えて傭兵の制なかりしなれ。西洋に於ては古くはポエニ戦争の頃より、近くは佛朗西革命の頃に至るまで、廣く行はれし所の習慣なり。瑞西は、此生命商賣の爲に、年々莫大の利益を占めしが、夫と同時に國民の品位を墮落せしめたり。吾人が祖國の爲に一身を犠牲として戦ふ場合にこそ、悲惨なる戦争の中にも、尙多くの美はしき徳のあらはるゝなれ。唯利益の打算より貴重の生命を賭し、時としては同胞が敵と味方に分れ、何の怨みもなきに、干戈を交えて相屠るに至りては、不道徳も亦極まれりと謂ふべし。況んや外國に於ける陣營生活に、少壯者を不品行に誘ふ所の道甚だ多きに於てをや。ツヰンゲリーは、兩度傭兵隊の牧師として伊太利に従軍せしが、左なきだに此習慣の國辱なるを知りし彼は、目のあたり其慘況を視て憤慨禁する能はず。慨然として其廢止を唱ふる

ツヰの憤慨

に至れり。是れ彼が改革案の一大要目にして、又法王が迷惑を感せし點なりとす。

### 第五章 チューリッヒ中心の宗教改革

一五一九年、ツヰンゲリーは牧師としてチューリッヒに來れり。この市は、コンスタンツの監督の管轄に屬する教區にして。又遠く法王と政教上の關係を有せしと雖も、市民は快活にして智識の程度割合に高く、傳説的信仰の人心に浸潤すること深からず。隨て新説を採用する困難も少かりしなり。ルーテルの説既に有識者の間に歡迎せられ、その著書を讀みし者も少からざりしを以て、ツヰンゲリーの福音主義の説教は、爲に間接の援助を蒙りぬ。彼は赴任後直ちに自己



ツヰングラーは、  
ルーテルと均  
しく教罪等  
販賣に反対す

の所信を明かにし、聖書に基けるキリストの教訓の真理なるを説き、人為的教義の誤謬を指摘せり。彼の羅馬教攻撃は、アインジールン在職の時に始まりしが、チューリッヒに移りてその所信一段強固となりぬ。一五一九年の早春、サムソンといへる僧、赦罪券販賣の爲に此市に來りしかば、ツヰングラーは、大に之に反対せり。コンスタンツの監督も、ツヰングラーと同一の態度を採り、チューリッヒ市會も亦、ツヰングラーに賛成してサムソンの市内に滞在することを禁じたり。其後サムソンは法王よりも、チューリッヒ市の意見に逆ふべからずとの内命を受けたり。ルーテルがテツチエルに反対せし時に比して、法王の處置の寛大なりしは、蓋し瑞西聯邦と争ふ事は、法王に取りて結局不得策なりしを以てなり。

傭兵及び恩給  
の習慣を攻撃す

一五二一年、ツヰングラーは盛んに其持論たる傭兵並に恩給廢止の必要を唱へ、市會をして彼の説に同意せしめたり。但し此問題たる、瑞西に取りて直接の損害を蒙るべき事件なるを以て、彼は一部の人民

ツヰングラー  
しき男

より烈しき反對を受けたり。彼が自ら法王の恩給を辞せしも、此頃の事なりしと傳ふるものあり。彼は又十分の一税の廢止を唱へ、斷食の制度を不必要と宣言し、僧侶の獨身生活を攻撃せり。此最後の點につきては、吾人は加特力派の史家アルツォーグ等と共に、ツヰングラーの稍々圖々しかりし事を想はざるを得ず。何となれば彼が數名の僧侶と共に連署して、僧侶の妻帯に關する願書をコンスタンツの監督に提出せしは、一五二二年の七月なりしに拘はらず。彼は其以前に於て或婦人と情交を結び居たりし證據あればなり。一五二五年の四月、彼は公然アンネ・ラインハルトといふ美はしき寡婦との結婚を披露したれども、實は夫より二年許前より此婦人と秘密結婚を爲し居たりしなり。加之彼がアインジールンに在りし頃、同種類の失策ありし事も、彼の自白する所なり。然れども讀者よ驚くこと勿れ。又輕卒に判斷すること勿れ。吾人は寧ろかゝる風説否事實ありしに拘はらず。チューリッヒに於けるツヰングラーの人望信用の甚しく落ち

秘密結婚

道徳的制裁の  
薄弱なりし証



ざりしに徴して、その時代に於ける該市民の道德、並に僧侶輩の品行のいかに亂れ居たりしかを推測せざるべからず。當時の僧侶は獨身といふ美名の下に、腐敗極まれる生活を營み居たりしなり。

チューリッヒの討論會

ツ井の六十七個條

此年より改革運動が着々その歩を進むると同時に、反對の勢も漸く強硬となり、翌年の正月二十三日には、討論會をチューリッヒ市に開催する事となりぬ。加特力教の代表者フアーベルは、其學問辯舌に於て、素よりツ井ングリーの敵手にあらざりしを以て、討論の結果は全く後者の勝利に歸しぬ。彼がルーテルの九十五個條に對比すべき、夫の六十七個條なるものを公にせしは、此時なり。夫より數月の後、彼は之を布衍して一冊の書物と爲しぬ。ツ井ングリーの改革意見、歴然としてその書中にあらはる。その大要は聖書を基礎とし、キリストを中心とし、羅馬教會の干渉と法王の權力とを排斥して、獨立自治の教會を建設せんとするに在り。此討論が、新教方の勝利となりしより、人民の輿論翕然として改革に賛成し、僧侶等は妻帯し、修道僧は勝

改革者々實施せらる

第二回の討論會

ツ井ングリーの獨舞臺

マスの禮に関する意見

手に還俗する事を許され、讀經は拉丁語に代へて國語を用ふる事となり、又公立學校の制度をも改革したり。

然るにその後改革の形勢漸く過激となり、寺院内の畫像彫刻等を破壊する者出でしを以て、司政者はその處置に苦み、同年十月第二の討論會を召集する事に決せり。此議會へは瑞西各州の代表者及び監督等を招待したれども、監督等は一人も來らず。一二州の外は代表者を出さず。但し個人の資格を以て出席せし者は其數八百名以上ありき。第二回討論會は殆どツ井ングリーの獨舞臺なりき。その第一日に於ては、教會内の偶像に就きて意見を述べ、其使用を禁せん事を希望せしが、大議會は彼の意見に従ひぬ。左れど之を取除くに當り、亂暴なる舉動を戒めたり。第二日の題目は、マスの禮に關せしが、ツ井ングリーは、此は元キリストの死を紀念する所の單純なる儀式なりしを、羅馬教會が、之に面倒なる理窟を附け、繁雜なる禮式を加へて、一の犠牲祭と化し了りしものなれば、宜しくそを昔日の有様に改むべしと主張



同盟諸州改革に反対す

チューリッヒ市の改革断行

ツェンゲリ氏の理想を實現せんとす

したり。ツェンゲリは市會の依頼に應じて「基督教義概論」を草し、之を州内の僧侶に配布したり。チューリッヒ市廳、之を諸州の市廳に贈りて意見を求めしに、十三州中多くは之に反対し、チューリッヒに向て舊制度を株守せんことを勸告し來れり。チューリッヒ其勸告に頓着せずして、新教を固持する事に決す。改革の地盤漸く固くして、他州との軋轢茲に始まる。マスは羅馬加特力教の最大儀式なり。ツェンゲリは、之を廢して單純なる晚餐式及び説教に更へんとする意見なりしに、此一事に就ては市の當局者も、久しく躊躇して決する能はざりしが、一五二五年四月終に之を断行したり。チューリッヒ市の宗教改革は、此時に於て全く完成したるなり。夫より以後、チューリッヒは瑞西改革運動の中心となり、ツェンゲリはチューリッヒ市の指導者となりぬ。彼は實に豫言者が、社會を指導するてふ積年の理想を實現し得たるなり。チューリッヒ市には大議會議員二百十二人、小議會議員十三人と稱する二個の立法部あり。其上に六人より成れる樞

密府ありて、行政命令の權を有す。今や是等の政治機關は、ツェンゲリ一の命に由りて左右せられんとす。彼の得意知るべきなり。

### 第六章 新教主義の傳播と再洗禮派の妨害

チューリッヒの宗教改革は案外容易く遂行せられたり。僧侶等は只之を傍看坐視せしのみ。法王と雖も殆ど之を妨ぐる能はざるなり。然るに茲に意外の強敵あらはれたり。再洗禮派アムブライスト是なり。抑も此宗派は、ルーテル、ツェンゲリ等の新説に鼓舞せられて奮起せし輩なるが、中途より彼等の改革を手緩るしとして、一層過激突飛なる手段に由りて真正なる理想的教會を設立せんと欲せしなり。彼等は使徒時

突飛なる再洗禮派の主張



處刑せられ又は放逐せらる

他の諸州終に動く

パセル市の一舉一動瑞西全國に影響す

代の例に倣ひて共產主義を唱へ、政教二者の絶對的分離を必要とし、幼兒洗禮の聖書に違背せるを聲言し、且非戰論の率先者となりぬ。其所論理に適へるものありと雖も、一々之を實際に行はんとすれば、宗教改革の前途實に懸念すべきものあり。故にツィンガリーも最初は調停的態度を以て、彼等を融和せんと試みたれども、その効なかりしを以て、終に刑法の力を藉りてその巨魁を嚴罰し、獨逸より入來りしミユンチエル、カールスタット等を放逐したり。

獨逸に於ける改革主義の進捗と、チューリツヒの斷乎たる態度とは、瑞西諸州の中に多くの賛同者を起しぬ。蓋し輿論勃興して、爲政者も之に順はざるを得ざるに立至りしなり。ベルン、バセル、セントガ、ルレン、アツペンチエル、シャツフハウゼン等の諸州は終にツィンガリーの主義を容れて、教會の改革を行へり。就中ベルンの改宗は、他日ジュネーヴの改宗の爲に絶大の援助を與へ、又パセルの一舉一動は、瑞西全體の向背に多大の影響を與へたり。パセル市は大學の所

エコラムパサウス小傳

在地にして、又商業上重要な都會たり。ツィンガリーも嘗て茲に遊び、その師ウヰツテンバッハも暫く教鞭を執り、碩學エラスムスも、此地に住むこと前後十年の久しきに及べり。彼が當時の學界に大貢獻を爲したる『希臘語新約聖書評釋』を著はし、は、當市に滞在中の事なりしなり。當市の改革に與りて功勞ありしは、マルアルヒの會議の時、ツィンガリーと同行したるエコラムパサウスなり。彼はツィンガリーの同僚中、屈指の人物なりしも、常に己れのツィンガリーに若かざる事を告白したり。彼は一四八二年に生れ、十四歳の時ハイテルベルヒ大學に於てマスターの學位を領し、ボログナ大學に轉じて法律を修め、夫れより再びハイテルベルヒ大學に歸りて神學を研究したり。彼はメラנקトオン、ロイヒリン等と交を訂し、マルアルヒに於てルーテルとも會談したり。希臘語の造詣尤も深く、改革家中メラנקトオンを除きては彼に及ぶものなかりしといふ。



### 第七章 ツヰングラーの政治運動

ルツチエレン  
以下四州の反  
對

双方の意見衝  
突す

チューリッヒ市の先導に由りて、改革主義の漸く蔓延せんとするに當り、ルツチエレン ウリー ウンテルワルデン シュヰツ ツーグの五州は連合して、反對の地位に立てり。以上の諸州は、山野の部分多く専ら牧畜農作を業とせしものから、人智の進歩遅く、世界の大勢に通せざりき。又傭兵を外國に出すは、是等の諸州に取りて重なる財源なるを以て、彼等はツヰングラーの意見を喜ばず。且村落の人民は、都會の人民の如く、羅馬教會の誅求に苦めらるゝ事尠し。上述の如き利害の相違と、晩年に於けるツヰングラーの高手的政策と、亂暴なる畫像破壊とは、ルツチエレン以下の諸州をして、強固なる同盟を結びて斷然新教主義に反對せしめたり。加特力派の諸州は、個人が恣に新

ツヰングラー  
の大膽なる政  
策

ストラスブル  
グと同盟す

教義に移る事は聯邦の統一を危ぶくするを以て、宜しく之を禁止すべしと唱へ。新教派は、之に反して、瑞西國は、其歴史及び政體の上に於て、共通の利害を有するが故に、信教の事は之を個人の自由に委ぬるも、國家の統一を破るべき患なしと主張せり。然れども双方の意見相衝突して、調停の望なきを看るや。ツヰングラーは外交策に頼りて、味方の諸州を結合し、更に南方獨逸諸州と提携して、瑞西全部を新教の下に統一し、出來得べくんば、チューリッヒをして、その中心たらしめんとする計畫を立てたり。

一五二四年以後のツヰングラーは、單に宗教家として見るべからず。寧ろ經世家將た政治家として觀察するを適當とす。彼が公私の團體及び個人と往復せし書翰は、明かに之を證す。但し此事は獨りツヰングラー一人に止まらず、當時の共和市に牧師たりしものはすべて外交上政治上の機密に參與したるなり。扱ツヰングラーは初め佛朗西の助力を請はんと欲せしが、一五二五年二月、フランシス一世がカー



ツィンダグリーの友人なるカピトール、フリーケル、ヘチオ等の活動せし處なり。彼は尙進んで、當時獨逸新教派の一重鎮たりし、ヘツセン伯の助力を得んと欲せしなり。元來南獨逸の諸市にはルーテル派よりも寧ろツィンダグリー派の新教に傾きしもの多し。其事實は、一五二九年のスパイエル國會に於て、その抗議書に調印せし十四市の内九市までツィンダグリー派なりし事に徴して知るべきなり。此の如き事情ありしを以て、ツィンダグリーは、聖晚餐その他の教義問題に就きてウヰツテンベルヒの神學者等と交渉すべき必要ありしなり。故に予が獨逸宗教改革史の部に詳述したる如く、マルアルヒの會議が不調に了りし事は、瑞西の新教派に取りて絶大の打撃なりしなり。却説此の如く、新教派の諸市が、防禦同

ヘツセン伯亦大に此に意あり

マルアルヒ會議の不調は瑞西の新教派に多大の打撃なり

ル五世とパビアに戦ひて大敗北を取り、身自ら捕虜の一人となりしより、彼は此を斷念して南方獨逸の自由市と同盟を結ばんと欲し、先づ其中の有力者なるストラスアルグと提携の約を結べり。該市はライン上流にある盛大なる都府にして、かねてよりツィンダグリーの友人なるカピトール、フリーケル、ヘチオ等の活動せし處なり。彼は尙進んで、當時獨逸新教派の一重鎮たりし、ヘツセン伯の助力を得んと欲せしなり。元來南獨逸の諸市にはルーテル派よりも寧ろツィンダグリー派の新教に傾きしもの多し。其事實は、一五二九年のスパイエル國會に於て、その抗議書に調印せし十四市の内九市までツィンダグリー派なりし事に徴して知るべきなり。此の如き事情ありしを以て、ツィンダグリーは、聖晚餐その他の教義問題に就きてウヰツテンベルヒの神學者等と交渉すべき必要ありしなり。故に予が獨逸宗教改革史の部に詳述したる如く、マルアルヒの會議が不調に了りし事は、瑞西の新教派に取りて絶大の打撃なりしなり。却説此の如く、新教派の諸市が、防禦同

ライナチッヒに於てルーテルと討論せしエツクナリ

反目の結果終に干戈に訴へんとす

將に戦はんとして和約成る

盟の爲に盡力しつゝありし間に、舊教派の諸州も亦その反對の謀策を回らすに多忙なりき。舊教派は一五二六年、バーテンチユーリツヒの西、アールガウ州に在りに開催されたる第三討議の時、加特力派の雄辯家エツクナリ、ツィンダグリーの代理として臨場したる、温良なるエコラムパチウスと討論して勝利を得たりし以來、大に其勢力を回復し、一五二九年に至りて、山手の五州同盟して、新教方の威壓手段に備ふべき準備を爲し、埃太利は暗々裡に之を輔くべき態度を示せり。双方すでに反目して、争論止まず、愈々不穩の状態に陥りぬ。

ツィンダグリーの指圖の下に、主戦論を唱へたるチユーリツヒ市は、一五二九年の六月、終に戦を宣し、ツィンダグリー主として作戦計畫を立てたり。舊教方の五州は、開戦布告の意外に迅速なりしと、埃太利に頼り過ぎし爲に、戦争の用意頗る不整頓なりき。而も後ればせに出師の準備に取かゝりしが、此時意外にも調停の約成りぬ。自由國の例として、和戦に關する最後の決定を軍隊に諮問する習ひありしが、將卒



ツ氏依然主戦論を唱ふ

素より戦意なかりしを以て、和約立るに成立したり。其要旨は、双方信仰上の問題の爲に戦を爲さざる事。中立の諸州に於ては、宗教上の異説者を寛容する事。マス禮の存廢は各州各市多数決によりて定むる事といふにあり。此和約の成立は、寧ろツピンゲリーを失望せしめたり。彼は再び開戦の必要を唱へ始めたり。政治家として見るときは、此時に於ける彼の主戦論は寧ろ先見の明ありしなり。

瑞、獨新教徒合同の目的

マルアルヒの會議は、恰も此和約の成立せし數ヶ月後の出來事なれば、ツピンゲリーが、ルーテル等と教義上の合同を圖らんとせし目的は、政治上の必要に基きしことを看破すべきなり。ツピンゲリーは、マルアルヒ會議を終へて歸國せし後、尙孜々として外交上の謀計に焦心しつゝありしと同時に、一方に於ては、又宗教上の問題につきて盡力したり。彼がイザヤ エレミヤ等の註釋書を著はし、は、此頃の事なり。然るに其頃ストラスアルヒ以下の獨逸自由市に於て、アーケル カピト一等の指導の下に、聖晚餐式の教理に關して、ルーテルの説

折衷説容れられず

とツピンゲリーの説とを調和せし折衷説起りしが、チユーリツヒ及びバセルはそを採用せざりき。是に於てか彼等は漸次瑞西の新教派と離れてルーテル派と親近するに至れり。ツピンゲリーが、此際政治上に於ける不利益を顧みずして、斷然その持説を守りしは、宗教家の本領を忘れざるものと謂ふべし。

瑞西の改革は進捗迅速なり

獨逸の宗教改革は、尺進寸退。絶えず政治上の事情の爲に檢束せられんとするに反し、瑞西の改革は寧ろ政權の後援を藉りて其進捗を容易ならしめし觀あり。カロロ五世帝の皇弟フェルチナンドは、帝に書を寄せて、瑞西蘭こそプロテスタント教の張本人なれ。故に後者を鎮壓せんと欲せば、先づ前者を屈服せざるべからずとの意を洩らし、ことあり。



### 第八章 チューリッヒの敗北—ツィン ングリーの戦死

ツィングリは、其最終の二年間に於て、市の行政部との交渉圓滑を  
 缺ぎ、その爲少しく勢力を減せしと雖も、尙重要事件は彼の畫策に頼  
 りしなり。彼は南獨諸市の助力を失ふてより、再び佛朗西の力を藉ら  
 んとする計畧なりしに、此謀未だ熟せざる中に、開戦の始末となりぬ。  
 今回は前と異りて、山手諸州の開戦の決心堅く、能く一致團結し、八千  
 の兵を以て攻め來りぬ。チューリッヒ此報を聞きて、急に二千七百の  
 兵を出して之を牽制せしめ、後續隊の到着を待ち、然る後敵と雌雄を決  
 せん謀畧なりしに、本隊の未だ戰場に達せざるに先だちて戦起り、見  
 事チューリッヒ方の敗北となりぬ。此時ベルンの立場曖昧にして速  
 かにチューリッヒを扶けざりし事は敗北の重なる原因なり。此カツ  
 ペルの敗戦は、一五三一年十月十一日の出來事なり。此日ツィングリ

開戦

カツペルの敗  
戦

ツィンガリー  
の戦死

は先發隊と共に騎馬して出陣したり。彼の馬に跨るや。その乗馬  
 逡巡すること數回。或者はそれを凶兆とトひき。後年ナポレオンが魯  
 西亞征討の途次、ニーメン河を涉らんとせしとき、之と同一の事ありし  
 は奇なり。彼は亂戦の最中、敵軍より飛び來りし礫の爲に負傷し、そ  
 の後更に重傷を蒙りて斃れぬ。「咄此災厄我に於て何かあらん。彼等  
 は我肉體を殺すとも、我心靈を亡ぼす能はざるべし」とは、彼が最後  
 に叫びし言なりし。嗚呼瑞西の愛國者、改革の偉丈夫は、四十八歳を一  
 期として逝けり。義子を始め、彼の親戚朋友の此役に戦死せし者多か  
 りき。カルビンのジュネーヴに來りし年に先だつこと僅かに六年な  
 り。彼につぎて瑞西の改革に功勞ありしエコラムパチウスも、彼の後  
 を追ふて黄泉の客となりぬ。

カツペルの敗北は、舊教の諸州の勢力を加へぬ。瑞西十三州をして  
 悉く福音主義に従はしめんとするツィングリ一の計畫、全然失敗に歸  
 せり。此敗戦に參與したる新教の諸市は、莫大の賠償金を支拂ひしの

敗北の結果

エコラムパチ  
ウス亦逝去す



みならず、**チューリッヒ**市の如きは、其從屬地方より参政權を要求せられ、今後此市に於て和戦を専決する能はざるに至れり。**ツェンケリー**の義父彼の精神を體し、**カルヴン**、**ベツ**等と提携して新教主義の爲に盡力したれども、此市が一時揮ひたる勢力は、到底回復するを得ざりき。**グラルス**は再び加特力教に歸依し、**ベルン**は**ルーテル**派に傾き、從來中立せし諸州は概ね舊教を墨守するに決し、宗教上の統一は到底望なきに至りぬ。

レマン湖畔の  
ツェンケリー市  
に代つて起つた  
人

敗戦後、**チューリッヒ**は、最早瑞西改革運動の中心點にあらずなりぬ。當時未だ聯邦に加はらざりし、**レマン**湖畔の**ジュネーヴ**は**ベルン**と**ライフル**の後援によりて、**サボア**の支配を脱して、共和主義の自治團體を形造り、竟に瑞西聯邦に加盟して、改革運動の一噴火口となり、**レホーム**ド教派の中堅となりて西歐諸國の信仰を指導せんとす。而してその中心的人物は、佛朗西の亡命にして一俊才なる**ジョンカルヴン**其人なり。

## 第五編

## 瑞西蘭の宗教改革

(カルヴン時代)

### 第一章

### カルヴン派とルーテル派の

### 比較

**ルーテル**の宗教改革は彼自らの經驗及び確信の結果たり。彼は豫じめ思慮を重ねし末、此運動を開始せしにあらず。一五一七年、夫の九十五個條を掲示して赦罪券販賣の惡弊を喝破したりし事が、意外に大



ルーテル派の新教は、ゲルマン民族に適合せずして、他に適合せしむるに難し。

なる反響を生じ、羅馬方の挑發に餘儀なくせられて終に改革運動の檣舞臺に登るに至りしなり。彼は法王中心の基督教を打破して、バイブル中心と爲し、個人信教の獨立權を揚言し、僧侶萬能の制度を顛覆したるなり。彼は純乎として純なる獨逸人なりしが故に、その建設したる教會も亦、獨逸の國體及びゲルマン人種の氣風にのみ適合して、他の人種國體に適合せず。加之、ルーテルの保守的性格は、彼をして後年に至りて屢々前後矛盾の方針に突進せしめたり。例せば彼の主義に感動されて蜂起せる農民を、振り棄て、諸侯の殘忍なる虐殺を是認したるが如き是れなり。是に於てか諸侯は、改宗の問題を政治の利害より打算して、肆に自己の去就を決し、領内の人民を強いて其例に倣はしめしを以て、ルーテルの金科玉條とせし個人信仰の自由は、半紙上の空論に歸せり。且又バイブル中心主義の旗色を鮮明にせんとする目的を以て、教義信條を作りしが爲に、教義信條に關する爭論紛々として起り、新教内部に無數の確執反目を生じて底止する所を知らず。その

ドグマ主義の弊害

ゼスイット協會の勢力甚だ猛烈なり

カルヴン出で、ゼスイットの勢力を挫折す

極信教の自由を唱へたる者が、他の同主義者を迫害し、甚しきは之を焚殺して教義信條の統一を維持せんとするに至れり。

恰も此時に方りてイグナチウス・ロヨラ等首唱の下に、ゼスイット協會てふ有力決死の團體、羅馬教會の遊撃隊として顯はれ、同時に加特力教會内部の改革者々其緒につき、歩武整々、新教の内訌に乗じて攻勢を取りしものから、歐洲列國、就中獨逸の新教派は大打撃を蒙りしなり。此際設しジョン・カルヴン出で、新教の勢力を挽回せざりしならば、歐羅巴の教勢は、必ずや加特力教の勝利に歸し、近世歐羅巴の歴史は一種異りたる行徑を辿りしならん。カルヴンはその人格冷靜嚴密にして目立たしからざるに係はらず、其事業の感化の及ぶ所ルーテル、ツィングリーの二氏に比して寧ろ廣濶且深刻なり。瑞西、佛朗西、蘇格蘭、英蘭に於ける宗教改革がカルヴンに負ふ所大なるは云ふに及ばず、嘗てルーテル派の感化を受けし和蘭及び南方獨逸の如きも概ねカルヴン派に改宗したり。



國體と宗教の關係

宗教はその教旨に於て、開祖の精神に復するを可とすと雖も、組織に於ては、その國體國狀に適合するを慣例とするが如し。獨逸のルーテラン教會が、その司權者に律せられて王政的となり、瑞西に起りし改革教會が、その人民の自由主義に應じて共和組織を具ふるに至りしは、蓋し自然の數なるのみ。カルヴンがツインダリーの死後に出で、改革を進捗するに當り、その運動は、漸次國民的の性質を脱して、世界的の性質を帶ぶるに至れり。カルヴンの主義が、ルーテルの夫れに勝りて、自餘の邦々に應用せられ易き所以蓋し此に存するなり。然らば改革教會として世界的即ち超國民的の性質を具ふるに至りし理由は、何ぞや。ジュネーヴは當時獨立の共和市にして、カルヴンは迫害の爲にその故國を遁れたる佛人なり。彼はルーテルの如く修道僧の經歷を有せず。またツインダリーの如く政治家たらんとする野心なし。その鋭敏なる道義的知覺と深奥なる宗教上の確信とを兼備せる點に於ては、前者に近く、その頭腦の明晰敏活なる點と人文學の造詣に於て

カルヴンとルーテル

ユゲノ一徒の立場

彼等の纏束

は後者に優れり。而して彼は兩者の有せざる秀逸點を有す。論理的の能力と法律の智識と事務的才幹是れなり。ルーテル派が信條を偏重するに反し、改革派は基督教徒たる徳性の涵養を主眼と爲せり。佛國のユゲノ一徒の性格は火と刃を以て鍛練せられたり。當時の佛王フランシス一世は外交の掛引より獨逸に於ける新教徒を扶け、甚しきは異教徒たる土耳其國と提携したれども、國內の新教徒に對しては概ね強硬なる迫害を加へたり。佛國の新教徒にして、自己の信仰を墨守せんが爲に、其生命を失ひし者擧げて算ふべからず。此の如く、國家が個人の信教の自由を奪はんとせし間に在りて、佛國の清教徒たるユゲノ一派崛起せり。理性と良心の指導に従はんとすれば、勢ひ國家に敵視せられ、國家に忠ならんとすれば、理性と良心の指導を無視せざるべからず。住み慣れて懐しく又愛すべき故國を捨て、走らんか。是れ人情の忍び難き所なり。然らば故國に留まりて信教の自由を維持せんか。彼等は二者其一を擇ばざるべからず。カルヴン等



施政の方針を  
の宜しきを失

の如き亡命者、將た新大陸に殖民を企てし者の如きは、即ち前者を擇べるなり。有力にして重大の利害關係を佛國の郷土に有する貴族等は、素より容易く此例に倣ふこと難し。是に於てか厥然一致團結して、その信教上の主義を貫かんと欲し、その目的を達せん爲に、止むなく武力を用ふるに至れり。ユゲノ一徒は、國家の中に、別に獨立の國家を建てんとしたる者なりとの非難は、去る事ながら、國家が其施政の方針を誤れるより、彼等をして忠信なる市民として立つべきの餘地なからしめしこと、亦大にその責なしと謂ふべからず。唯國家司權者の玩具となり、その時代の嗜好に阿りて道德風教の上に何等の影響なき死せる宗教ならばいざ知らず。智情意の三面に訴へて人間全部を支配せんとする活力ある宗教に於ては、時に爲政家の意見に背き、天下の輿論に逆て其所信を一貫せんとする事あるも、亦止むを得ざるなり。兎に角四百年前佛朗西に於ける新教派の立場が、獨逸新教派の夫れと異りて世界的傾向を負ふるに至りしは、カルヴンの指導に據る所大な

りと謂はざるべからず。

### 第二章 カルヴンの修養時代

カルヴン  
の  
小傳

改革派の鼻祖ジョン・カルヴンは、西暦千五百〇九年七月十日、佛朗西の北部なるピカルデ州のノヨンに生る。我永正六年に當る。即ち本願寺中興の傑僧蓮如上人の示寂の後十一年後なり。又英國のヘンリー八世が即位の年、ルーテルがウヰツテンベルヒ大學に聘せられし翌年に相當す。カルヴンの祖先等はオアース河の船頭にして、その祖父は晩年桶職を兼ねたりとの事なれば、その社會に於ける位置の卑かりしこと推して知るべきなり。父なるゼラール・カルヴンの代に至りて、此家の歴史に一異彩を生じぬ。ゼラールは父祖の稼業を



其朋友

廢し、漸次自己の運命を開拓して、某監督の書記となり、**ジャンヌルブラ**ンクといふ美にして敬虔なる一婦人と婚し、四男二女を擧ぐ。カルヴギンはその二男なり。**ゼラール**は相當の資産を有するに至りしを以て、**ジョン**は高等の教育を受け得らるゝ身となり、十四歳の時より巴里大學に遊び、拉丁語を學び、兼ねて文學哲學を修めたり。彼が犀利なる眼力と穎敏なる智力とは當時すでに交友間の景仰を博せしといふ。愛嬌多辯は素より彼の天性にあらず。故に廣く多くの朋友を得ざりしと雖も、少數の知己親友を得たり。是れ當に青年時代に於て然るのみならず。終生正に此の如くなりしなり。巴里大學滯在中に交を訂せし人々の中、**コープ**の一族を以てその最と爲す。王の侍醫にして**エラスムス**、**ロイヒリン**等と交際せし**ギヨームコープ**を始めとして其三子**ジャン**、**ミケル**、**ニコラス**等と親交あり。嘗て**カルヴギン**の師たりし**コルデ井エー**も夙に此青年の非凡なるを認めて之を尊敬したり。是等の人々の中にはその後**カルヴギン**を慕ふて**ジュネーヴ**

法律を學ぶ

カ氏の處女作

に移住し、そを埋骨の地と爲し、ものあり。以て**カルヴギン**の人情に厚く朋友に信なりしを推測すべきなり。

當時青年立身の道は宗教家たらずんば法律家と成るに在り。**カルヴギン**の父とその所屬寺院の評議員との間に葛藤を生ぜし爲め、**ゼラール**は従來の考を一變し、**ジョン**をして法律を研究せしむる事に決し、彼を**オルレアン**市の法律學校に轉せしめたり。是れ實に一五二八年にして彼が十九歳の時なり。而してその年時より察するに、**カルヴギン**の巴里退去と前後して**ゼスイツト**派の創立者**イグナチウス・ロヨラ**は、跛脚踏躑躅笈を負ふて巴里に入り來りしなり。**カルヴギン**は**オルレアン**にて法律研究中獨逸人**ヴォルマル**に就きて希臘語を學べり。此人は又改革家の一人にして、その後**カルヴギン**の親友且後繼者となりし**テオドール・ベサ**の師なり。**ベサ**時に十歳。**カルヴギン**は**オルレアン**に在ること一年の後**アールジュ**に轉せり。父**ゼラール**は一五三一年教會より破門せられて死去せり。その翌年**カルヴギン**その處女



作なるセネカの著「寛仁論」の註釋を公にす。後世の人が此書中に、カルヴンの既にプロテスタント教義に傾ける事を認むべき證據ありと云ふは當らずと雖も、兎に角彼が二十三歳の若年に於て、自在に希臘羅馬の文豪の語を引用して議論を縦横せし事は、その學問の該博と文藻の豊富とを證し得て餘りありとす。

### 第三章 改信して宗教改革に従事す

カルヴンがセネカの註釋を著はしたる一五三二年の四月より、その翌年の十一月一日即ち有名なるコープの就任演説のありし間に於て、彼の精神上に非常の變化を生じたり。是れ彼が自ら謂はゆる「突然なる改信」なりとす。別言せば、從來人文學者の一人としてエラスムス

改信

改信の原因と  
其時

に私淑し、希臘羅馬の古文豪を欽慕したるカルヴンが、一變してルテル等の意見に刺撃せられ、聖アウガスティン 使徒パウロ等を宗とし、終に四福音書中の基督の教旨を唱道せんとする改革家たるカルヴンとなりしなり。彼は其改信の年時を詳記せざるのみならず、又其改信を起すに至りし原動力の那邊より來りしかを明言せざるが故に、後世の傳記家中此點に就て種々なる異見あれども、予は此瑣末の論争を以て讀者を煩はさんことを避けて、唯我師ウオーカー教授の説に従ひつゝ、カルヴンの所謂「突然なる改信」が一五三二年の暮より一五三三年の初までの中に起りし事を斷言せんと欲す(ウオーカー教授カルヴン傳第四章参照)。

ニコラスコープは前にいへりし如くカルヴンの親友にして初め醫學を修め、後哲學を究めし人なるが、一五三三年巴里大學の學監に選ばれたり。同年十一月一日就任披露として彼が爲し、一場の演説こそ、大に物議の種子となりしものなれ。此演説はその緒論に於て、當

コープの就任  
演説



時の新流行なるキリスト教的哲學てふ名稱の下に、福音主義を道破し、本論に於て律法と福音の關係を詳述したり。その論旨句調共にエラスムスとルーテルに倣へる點多し。氣概あり、精神あり、熱火あり、又迫害を豫期する覺悟あるものゝ如し。年壯氣銳の士にあらざれば當時の巴里大學に於て此の如き大宣言を試むる能はざりしならん。是れ果してコープ一人の考に出でしか。實はカルヴンその原稿を作り、コープは之れに修正を加へて演説したるなりと説く者あり。又コープはカルヴンの助言に由りてその演説草稿を作れりとの説あり。双方何れも論據なきにあらざれども、全然カルヴンの作りし原稿を、コープがその儘演べたりとの説は事實に遠ざかれり。左りとて又兩人の親交と當時彼等が巴里に在住せし事に徴して、カルヴンが此コープの大演説の企圖に毫も與り知らざりしとは云ふを得ざるなり。然らば事の真相は上擧の後説にあらんと予は信するなり。

加特力教徒に對する宣戰布告

要するにコープの就任演説は佛國に於けるプロテスタント主義の

マルガレット新教徒を庇護す

宣言書なりき。換言せば加特力教徒に對する宣戰布告なりしなり。是より先き既にルフェーアル及び其門弟等は、人文學の門扉をくゞりて、漸次福音主義の堂奥に接近せんとし、フランシス一世王の新教反對なるに拘はらず、皇妹マルガレットの庇護の下に、隱然其贊同者を増加しつゝありしなり。然れども彼等の地位は大海中の一孤島の如し。未だ以て公然舊教の勢力に拮抗するに足らず。此際に於けるコープの大膽なる宣言は忽ち舊教派の反對を惹起し、王は十二月十日の日附を以て、ルーテラン派の抑壓を努めよとの勅命を下せり。改革派中獄に投せられしもの多し。コープ逃げてバセルに赴く。カルヴンもその身の危険を慮りて、巴里の南方約八十里なるアンゲレームに走り、友人デューチレーの邸に匿くる。是れ新教派首領株の避難處にして皇妹マルガレットの宮廷の所在地なり。デューチレーは高僧にして又有數の人文學者たり。カルヴンと組ば宗教上の意見を同ふす。富裕にして多くの圖書を藏せり。カルヴンがその最大著述た

迫害の勅令

亡命額ヤカルヴンも其一



カルヴン  
フェーブルを  
訪ふ

る基督教綱要を考案せしは、**アングレーム**滞在中の事なりしと云ふ。又彼は當時**マルガレット**の保護の下に老後の餘命を送りつゝありし**ジャツクルフェール**を訪ふて、此老碩學の意見を叩くべき好機會を得たり。

南船北馬  
バセルに著す

**カルヴン**は今や斷乎として新教主義者の一人となりぬ。一五三四年五月彼が永年受け居りし教會の扶助金を辭せし事は明かに之を證するに足れり。扶助金辭退の爲め故郷なる**ノヨン**に歸りし時、**カルヴン**はその信仰上の事につき嫌疑を蒙りて兩度牢獄に投せられたり。然るに如何なる事情ありてか彼は數日にして釋されたり。當時佛國に於ける新教徒の迫害は一緊一弛時と處によりて劃一ならず。**カルヴン**は是より南船北馬、雲水の生活を營み、**巴里**にかくれ、**オルレアン**に潜みしが、同年の末異端者の搜索愈々嚴重となるに及びて、友人**デューチレー**と共に、佛朗西を去り、**ストラスブルグ**を経て、**バセル**に着きぬ。想ふに先きに**バセル**に在りし友人**コープ**の勧誘は**カルヴン**

バセル市の概況

をして此地に來らしむるに與て尤も力ありしならん。

Christiane  
Religionis  
Instituto

カルヴンの  
大使命

**バセル**は瑞西諸市の中尤も繁榮にして大學の所在地たり。又**ツプ**、**ングリー**の時代に於ても改革運動に大關係ありし處なり。**ツプ**の親友にして當市の牧師たりし**エコラム**、**パチウス**は數年前に死し、今は**オスワルド・ニコニウス**當市の首座牧師たり。**カルヴン**は**ニコニウス**を始め、その他の改革家に歓迎せられしが、其後彼の生涯に大關係を及ぼさんとする佛人**ウヰリアム・フアーレル**も亦その中に在りき。**バセル**逗留中に於ける**カルヴン**の最大事業は言ふ迄もなく『基督教綱要』の脱稿及び公刊なりとす。多くの改革家の手に成りし著述中キリスト教の教理を正確、明瞭、且有力に概括し、且説明したるもの、此の書の右に出づるはなし。幽玄なる神秘論者はありき。過激なる破壊論者はありき。勇進奮闘、水火を辭せざる殉教者も亦既に輩出したり。然れども彼等がその財産生命を賭し、身を以て殉せんと決心したるは何の爲ぞ。彼等が據て以て之と共に起倒せんとする主義主張は如何な



るものぞ。それを確的に、鮮明に、將た大膽に、説述し得ん者は未だ出でざりしなり。佛朗西に於ける新教徒は誤解され且讒誣されたり。而もその誤謬を氷解し、その讒誣を辨疏すべき人物は、未だ顯はれざりしなり。如上の大使命は終に年齡尙廿七歳なるジョン・カルヴンの双肩に落ちぬ。佛朗西の新教徒は彼に於て最も有力なる辯護者を發見し、西歐諸國は彼に於て、改革教會の立法家を得たるなり。

#### 第四章 著述—ジュネーヴ市滞在

『基督教綱要』の出版

『基督教綱要』は一五三六年にその初版を發行してより、一五五九年即ちカルヴンの逝去に先だつこと五年、彼が最終の訂正を経たる時までに數十版を重ね、又その間に無数の訂正増補を加へたり。始めは六

堂々たる大辯護士の態度

章六百餘頁の小本なりしが、終には四編八十章より成る大本となりぬ。巻首にフランシス一世陛下に奉呈する一公開狀を載せたり。措辭慎重にして典雅、霸氣縱横、電霆を呼び雲霓を起すの概あり。彼は大辯護士が法廷に屹立して無辜者の爲に冤を雪がんとする態度を以て、佛國新教徒の蒙れる讒誣誤解を辯じ來り辯じ去り、論旨井然として寸毫も紊れず。時々論理の秋水を閃かして王の咫尺に迫り、王をして殆ど首肯せざるを得ざらしむ。又初版には希臘羅馬の文豪を引用せしこと稀なりしと雖も、版を改むるに隨ひて彼はその敬慕するセ子カシセロ、アリストートル、プラト一等の語を引用すること漸く多くなりぬ。看るべし彼が蘊蓄せる法律の智識と人文學の素養の歴然として此書中に顯はるゝことを。

著書の内容

初版の基督教綱要は第一章律法、第二章信仰、第三章祈禱、第四章聖晩餐式及び洗禮等に於て、積極的にプロテスタントの教義を示し、第五章に於て羅馬教會が據て以て金城鐵壁と爲し來りたる七聖典の中、聖餐



カルヴンの  
長所

洗禮の二者を除き、その他は凡て人爲的産物にして聖書に基かざる事を辨じ、第六章に於てキリスト教徒の自由を有らゆる側面より論じたり。その中注意すべきは、彼が良心の自由を唱へて、若し人の聲が神の命と相背馳する場合には、人よりも神に順ふ事を正當としたる點なり。想ふにユゲノ一徒が王命に抗せし理由も、蓋し此にあらむか。カルヴンの頭腦は飽くまでも論理的なり。一の原理を把握する時は、之をその結局まで推し究めざれば息まず。但しその所説に至りては、必ずしも獨創の意見にあらず。古くは中世の碩學スコツスに依る所あり。更に溯りてアウガスチンに學ぶ所多し。又同時代の人物中にはルーテル、アークル等に負ふ所鮮少なからざるなり。否、恐くはルーテルの先導なくば、カルヴンはその使命を全うするを得ざりしならむ。少くともその性質に於て多大の變更を見しならむ。要するにカルヴンは創作的天才に非ずして組織的の辣腕なりき。カルヴンはその著書を出版せし後、伊太利のフェララに旅行した

Hence

歸者

顯然ジュネー  
ヴ市に來る

フアーレルの  
勸告

り。此旅行の用向の何事なりしかは明瞭ならざれども、其州を治めし侯爵夫人ルネーが、前の佛朗西王ルイ十二世の女新教徒に同情厚くして、彼等を庇護せられしといふ事實に徴して、多分其助力を藉りて佛國に於ける迫害を軽減せんと欲せしならんと想像せらる。伊國よりかへりし後間もなく、彼は家事上の用向ありて歸省し、巴里にも暫時逗留せしが、用務の果つるを待ちて、弟アントワーヌと妹のマリーを伴ひて、此都を出發したり。彼の目的地はストラスアルグなりしが、當時獨佛兩國王の間に戦争開始せられし爲、定まれる旅程を進むこと危険なりければ、止むなく迂回して途をリオンに取り、七月の半頃ジュネーヴ市に一泊する事となりぬ。彼等はその翌朝かしま立してライン河畔に向はん筈なりしに、不圖もその地に在りし友人等の知る所となり、殊に熱心なるフアーレルがカルヴンを其旅舎に訪ふて、具さにゼネバ市の状況を語り、彼の斷然其地に留まりて宗教改革の爲に盡瘁せんことを勧め、カルヴンの再三固辭するを見て、聲を



あら、げ、『此は貴下に下し給へる神の詔なり。貴下は神命に違背せらるゝか』といふに至り、その一言深く彼の心肝に徹し、カルヴンをして厥然その難局に當らしむる事とはなりぬ。

### 第五章 ジュネーヴ市の沿革

カルヴンが是より前後二十五年の間、蒲柳の質を忘れ、その心血を凝ぎて、勇戦奮闘せし舞臺たるジュネーヴ英、ゼネヴァは、抑も如何なる處ぞや。時人をしてプロテスタント教の羅馬と謔はしたる該市は、其幅員僅かに百九十方哩、永住市民の人口約一萬三千に過ぎざるレマン湖の西南隅にある一小都會のみ。『言語の上よりいへば佛朗西語重にも用ゐられ、宗教の點より見れば伊太利と縁故厚く、政治思想は

此市の事情及び歴史

瑞西獨特にして、商工業にかけては、獨逸流なり。其幅員の狭少なるに引き代へて、該市は頗る複雑なる歴史を有せり。ジュネーヴの地名が歴史上に知られ初めしは、ユリウス・カエサルユリウス・カエサルの時代であり。コンスタンチヌス帝の代には一監督區の中心なりしが、ローマ帝國瓦解の後、ブルグンド州の一市府となりぬ。夫より數百年の間に幾多の變遷を経て十五世紀に至り、終に其頃アルプス山の西部に崛起して、征服的野心勃々たりしサボア侯國の管轄に歸せり。左はいへジュネーヴを專制君主に支配せらるゝ一都府と誤解すべからず。

サボア侯實權を握りしと雖も、表面上當市を治むる者は、僧俗兩階級に由りて選舉されたる監督なり。更にその下に評議會あり。彼を輔佐して司法行政の樞機を運用す。サボア侯は副王ともいふべき位地を占めて、監督の命令判決を實施す。但し侯は自らジュネーヴに住せず。單にその二人の代理者を駐在せしむるのみ。理論上よりいへば監督こそ眞の主權者なれども、事實は然らずして、萬機を總裁する實

該市の憲法



権は、全くサボア侯の手中にありしなり。然れども是れ唯其一側面の  
み。他の側面より観れば、シュネーヴは尙民主政體の名残を留めたり。  
該市には毎年兩度、市の大會あり。各家の戸主會合して四名の理事と  
一名の會計を選擧し、市の政務を監視せしむ。その下に二十五名より  
成れる小議會と、六十名より成る大議會とありしが、一五三〇年以後  
は、更に二百人議會なるもの組織せられて、前の二議會と共に並び行  
はれたり。但し中間の六十人議會は實際上無用の長物となり、漸次  
消滅に歸しぬ。

シュネーヴは民主主義の自治市なるに拘はらず、  
事情止むを得ずしてサボアの權力に壓せられつゝありしなり。サボ  
ア侯は、何故武力を以て此畿爾たる一市を蹂躪して、全く其自治權を奪  
ひ去らざりしか。是れ蓋し瑞西の後援を恐れられたればなり。果せる哉、  
十六世紀の始め、サボア侯が威壓を加へんとするに及びて、シュネーヴ  
はベルン及びフライアルヒ等の助力を得て、其政治的獨立を完ふした

上來述べし如く、シュネーヴは民主主義の自治市なるに拘はらず、  
事情止むを得ずしてサボアの權力に壓せられつゝありしなり。サボ  
ア侯は、何故武力を以て此畿爾たる一市を蹂躪して、全く其自治權を奪  
ひ去らざりしか。是れ蓋し瑞西の後援を恐れられたればなり。果せる哉、  
十六世紀の始め、サボア侯が威壓を加へんとするに及びて、シュネーヴ  
はベルン及びフライアルヒ等の助力を得て、其政治的獨立を完ふした

該市改宗の内  
情

り。シュネーヴ市民の獨立せんとするや。時の監督及び僧侶輩は、皆  
サボア侯に與みし、シュネーヴを扶けたるベルン市は、既に新教に改  
宗したりしを以て、該市民は半ば政治上の事情に迫られて、一五三  
六年五月、福音主義の基督教を採用すべき事を誓へり。此政變はカル  
ヴン<sup>ウ</sup>の來着に先だつこと僅かに二個月前の出來事なりき。

### 第六章 シュネーヴに於ける改革の

#### 端緒

『フアーレルはシュネーヴを宗教改革に案内し、カルヴン<sup>ウ</sup>をシュネ  
ーヴに紹介したり』と云ふは適評なり。抑もフアーレルはカルヴン<sup>ウ</sup>  
より長すること二十歳。南方佛朗西の人なり。天性激烈、動もすれば

フアーレルの  
小傳



常徑を逸すと雖も、眞卒剛膽、難に遭ふて屈せず。夙にルブエーアルの感化を受けて羅馬教を脱し、福音的信仰に歸依す。そのハセルに在るや。エラスムスと喧嘩してその市を逐はれしことあり。その後ベルンの改宗に盡力して功勞あり。一五二八年以後巡廻説教師として佛語の行はる、瑞西諸市を訪へり。その雷音英姿、その辣腕機智、頗る創業家たるに適せり。子ーシヤテル市の改宗も主として彼の盡力に基く。而もジュネーヴ改宗の一事に至ては、年の長幼を忘れてカルヴンに依頼す。彼亦自己を知るの明ありと謂ふべし。但し一五三六年の夏、カルヴンをジュネーヴに抑留せしは、全くフアーレルの計ひにて、該市より依頼せしにあらざりしなり。

改宗は皮肉の  
み未だ其實を  
擧げず

カルヴン此市に在ること期年ならずして、漸くその才鋒を露はし、又他の諸市に於ける牧師等と交を結びて、其篤學博識を認めらる。彼初め牧師の職に就かず。單に教師兼説教者として、フアーレル及びその年少の同僚なるヴ非レー等を助けしのみ。然れども彼は、ジュネ

カルヴンの  
憤慨

ーヴに於て改革の事業未だ緒に就かざるを疾く看破したり。該市の改革は政治上の行掛より俄かに之を斷行せしものにして、教會の内部は尙依然として昔日の状態と異ならざりしなり。市民の風儀將た僧侶の品行も甚だ宜しからず。街上に鄭聲を聴き、淫靡の風俗を見ることすら珍らしからず。新説を唱ふる者にして非キリスト教的の動作を爲すあり。中には法皇を罵り、寺院の肖像彫刻を破棄するを以て、改革の能事了れりと誤解する者あり。道徳を貴び、秩序を愛し、正義の神を畏る、所のカルヴン、此状況を視て豈憤慨に堪へんや。然れども彼年尙三十に充たず、人生の經驗に乏し。過去の半生は概ね之を學窓に費しぬ。要するに彼は理論の人にして實踐の人にあらず。彼の弱點と強點と兩つながら茲に存す。

然りカルヴンは理想の人にしてルーテルは活動の人なり。前者の趣味は後者の夫れの如く廣からざりしが如し。朝夕アルプスの高嶺を仰ぎ、レマン湖畔の美景に嘯くこと二十五年の久しきに及びしに

カルヴンの  
性格と彼の理  
想的の國



拘はらず、其事嘗て彼の筆頭に上らざりき。交際に於ても亦然り。彼は少數の親友を有せしと雖も、多數の市民は唯彼の畏敬すべきを知りて、愛慕すべきを知らざりき。ルーテルの平民的なるに比して彼は貴族的なり。其天性の狹隘と自ら處すること嚴密なりしより、他人に對しても亦往々刻薄に傾く。但しその重なる理由は、私情私怨に存せずして、其不屈の確信に存せしが如し。上來述べし如く、カルヴンは新教神學の組織者として、寧ろ學者生活を送るべかりし人物なるに、フアーレルは彼を要して活動の舞臺に立たしめたり。彼の目的は個人及び社會を擧げて神意を遵奉せしむるに在り。ジユネーヴをして神の旨に適へる理想的の小國家たらしむるに在り。切言すれば神の國を此一小市に實現せしめんとするに在り。人情に疎く經驗に乏しき二十七歳の青年をして、俄かに此大任に當らしむ。衝突素より異とするに足らず。カルヴンはフアーレルヴン等と共に信條を規定し、信仰問答書を編し、更に信仰告白を作り、新教徒の立脚

規律嚴明

反動起る

再洗禮派逐はる

點を明かにし、又彼等の操行を律し、以て該市民の生涯をして、全くキリストの教旨に従はしめんと計りしなり。カルヴン等の規定する所頗る嚴明、曖昧なる信徒及び薄志弱行の輩をしてその立場を失はしめたり。是に於てか反對乃ち起る。ルブエーアルの流を汲める微温的プロテスタント教徒、ビエールカロリなる者、カルヴンが三位一體と神の人格を否定せしといふ口實を以て彼を異端者と誣いんと謀りしが、カルヴンの方ある辯明と、カロリの不品行の曝露とは、兩者をして全く其他位を顛倒せしめたり。

一五三七年、和蘭地方より再洗禮派の徒來りて論戰を挑みしが、カルヴンの處置其宜しきに適ひし事と、市廳が強固なる排斥手段を執りし事とに由りて、彼等は市外に逐はれたり。外來の敵は逐ふ事を得たれども、間もなく内部の反對起れり。その原因はカルヴン等が犯則者に對する處分の嚴重なるに在り。彼等は宗教を政治の干渉より脱せしむるには同意せしも、教會の規則に背き、信條に従はざる輩



取締嚴重の實

を罰するには、矢張俗權者の力を藉らんとしたり。カルタを弄びし爲に桎梏の刑を受けし者あり。新婦の髪かみの結むすむ方が婀娜なりしとてその母及び結髪婦かみづなを拘留せしことあり。罪の稍重き者は教會より破門せらるゝと同時に市外に放逐せらる。從來賭博場、酒屋、青樓あざななどが公然開業されたるジユネーヴが、今や遽かに觀劇、舞踏等の娛樂をさへ禁止せらるゝに於ては——殊に其犯則者を一々嚴罰するに至ては——反動の生ぜざらんを欲するも得べからざるなり。況んやフアーレルとカルヴンとが正を踐んで畏れざる勇氣は賞すべしと雖も、熱心その度を越えて極端にその主義を行ひ、毫も容赦せざるに於てをや。市民は謂へらく、多年苦闘して漸く政治上の自由を完うせし曉に於て、再び宗教上の羈絆かいはんに束縛せらるゝは堪ふる能はずと。是に於てか有力なる市民にして新しき信仰告白を承認せざる者續々顯はる。牧師等は市の當局者に迫り、教規及び法律に據りて會釋なく彼等を處罰せしめんとす。當局者は全く板挟みになりぬ。ベルン市は此を見かねて

市民宗教上の束縛を懼る

カルヴン等放逐せらる

カルヴン等の強硬手段に反對の態度を示せり。一五三八年二月の市會議員改選期に及びて反對議員多數を制しぬ。政府はカルヴン等の意見に背きて、ベルン市の教會制度を採用し、終にカルヴン、フアーレル等を放逐する事に決せり。彼等はその通知に接して毫も驚かず。而かも心に深く自らの措置の正しきを信せしを以て、チューリッヒ市の仲裁を請ひしが、其効なかりき。

### 第七章 ストラスブルグ滞在

フアーレルはネーシヤテルに赴き、カルヴンは友人フアーケル等の勸めに従ひストラスブルグに往きて、その地に避難せる佛國新教徒に説教する事となりぬ。彼は一週間平均四回の説教の外に尙神學の教



舊惡を忘れて  
ジネネーグの  
依頼に應ず

文學上の述作

カ氏ルーテル  
とツ井ングリ  
ーを比較す

授を負擔したり。此市に在りし三年間は、カルヴ井ンの文學的産物尤も豊富なりし時期なり。サドレト僧正に答へし書翰はその一なり。此僧正、長文の書をジユネーヴの小議會に宛て、懇々加特力教に復歸せんことを勸告し來りしかば、小議會は協議の末、其答文をカルヴ井ンに依頼し來りしなり。カルヴ井ン毫も舊惡を懷はず。匆々稿を起して六日間に草了したる。措辭凱切、論理秩然大にプロテスタント教のために氣焔を吐く。羅馬書註釋、聖晚餐論等も亦當時の作なり。殊に基督教綱要は大に増補せられて三倍の紙數となり、拉丁版と同時に佛語の翻譯も出版せらる。カルヴ井ンが獨逸の改革家等と交際して、彼等と幾分融合するの途を發見せしも亦當時の出來事に屬す。彼は一たびメラנקトンと會見し、爾來死に至るまで通信を絶たざりき。ルーテルとは嘗て相見るの機會なかりしと雖も、メラנקトンを介して双方其好意を交換したり。カルヴ井ンは終生、ルーテルをツ井ングリーよりも遙かに偉大なる人物として尊敬したり。

結婚

清貧如洗

一五三九年、彼はイテレット・ビュールといふ寡婦と婚せしが、その偕老の生涯は九個年のみ。而も試練の多き生涯なりし。結婚してより三年の後、兩人の間に生れし一子は生後數日にして死し、産後の肥立悪しかりけむ、妻は遂に病弱の人となりぬ。ストラスブルグに入りし始め數ヶ月間、彼は何等の俸給をも受けざりしが、その後講演料として一箇年五十ギルダ(百餘圓)を受くる事となりぬ。諸友氣の毒に思ひて金員を惠贈せしに、彼は斷然之を辞せり。貧窶の餘り、彼はその藏書を賣拂ひ、又若干の書生を下宿せしめたり。カルヴ井ンは終生清貧の生涯を送りしが、ストラスブルグに在りし時期を以て最も甚しと爲す。然れどもカルヴ井ンのストラスブルグ滞在は、彼をして種々なる方面に於て觀察と經驗とを積ましめたり。該市はツ井ングリーの時代より夙に南方獨逸に於ける改革運動の中心となり、ツ氏の友人なるカピトー、ヘチオ等の盡力せし所なり。其後更に有力なるヨハンネス・スツルム、マルチン・プーケル等來りて教育を盛にし、且新教の基礎



ブーケル

を固ふせり。ブーケルはルーテル、メランクトンに亞ぐ所の獨逸改革家の領袖にして、カルヴンも大にその感化を蒙りしなり。

カルヴン放逐後のジュネーヴ市  
ジュネーヴ市はカルヴン、フアーレル等を放逐せし後、ベルンの指圖に由りて、數名の新牧師を招聘せしが、彼等は素より平凡の人物にして、カルヴンなどに比すべくもあらず。そは前にいへりし如くサドレト僧正への返答を態々カルヴンに依頼せし一事に徴するも明かなり。カルヴン等の退職と共に、宗教上の事は、一切爲政者の指揮を受くる事となりぬ。左れば牧師と爲政者との間には衝突なかりしも、市は猶平穩に歸せず。カルヴン、フアーレルの追放に反對せし市民相結びて黨を成し、新牧師等の司る所の晩餐禮に列せず、機を見て市の各議會に多數を制し、カルヴン等呼び返さんとする企圖を抱けり。フアーレル暗に彼等を煽動す。

政黨の争

ベルンは曩きにジュネーヴの獨立を助けし功を誇り、動もすれば昔日のザボアを氣取りて、其内政に干渉せんとしたり。一五三九年の秋

カルヴンを呼戻さんとい

より翌年の春にかけて、對ベルン政策につき兩黨の間に劇しき争論を生じ、激昂の餘り、竟に街上に於て格闘を演じ、二人の死者を出しぬ。その一人は在朝黨の首領なりき。此混亂中に二牧師は挨拶なくしてジュネーヴを立法れり。内亂は延いてベルンとの開戦とならんか。一時は氣遣はれしが、事なくして止み、其後フアーレル、カルヴンを輔佐せし黨派勝利を占めて市の政權を握り、一五四〇年九月、カルヴンをジュネーヴに呼戻す事を可決せり。カルヴン遂巡久しく確答を予へざりしが、市議會よりの再三の使者、友人の勧誘、就中フアーレルの痛烈なる勸告狀に由りて、一五四一年の二月下旬、斷然ジュネーヴに復へる事に決せり。彼が再び同市に入りしは同年の九月十三日なりしといふ。市は住宅の外に年五百フロリンの俸給を興へ、尙若干の小麥、葡萄酒、衣服等を贈るを例とせり。



## 第八章 カルヴンの奮闘時代

一五四一年より一五五三年に至るまでのカルヴンの歴史は實に  
大争論と大衝突の歴史なり。何が爲に彼は衝突争論せしか。彼がジ  
ユネーヴ市に對する希望は、理想的神政を布き、理想的教會を建て、全市  
民をして悉く模範的基督教徒たらしめんとするに在り。彼は神の言  
の正當なる解釋者として、神の律法の編纂者兼維持者として、又司法行  
政の顧問として此市に來りしなり。彼は表面上政權に參與するの資  
格を有せざりしのみか、晩年に至るまでは市民たる權利をさへ有せざ  
りしと雖も、漸次其地位の重要を加へて事實上ジユネーヴ市の法王  
となり立法者となるに至れり。彼は復任後直ちに牧師の職掌、教會の  
方法、教會の政治及び式禮、會員の紀律罰則等につき、詳密なる規定を作  
りて市廳の協賛を経、又ジユネーヴ市の諸法律及び憲法の改正に大に

カルヴン小  
法王たらんこ  
す



教壇に立ちしカルヴン



カ氏の長短

盡力したり。彼が蘊蓄したる法律學上の智識は此際非常の便益を供へたり。

予が今より舒せんとする、大反對大困難と奮闘する所のカルヴンに於て、讀者はその鐵の如き意力を認むると同時に、石の如き冷酷を認めらるゝならん。彼が神意天命と信する所を遂行するに當て、水火を辭せざるの勇氣は賞讃するに餘りありと雖も、而も亦彼に寛仁大度、罪を惡みて人を恕する襟度なく、熱怒激憤、屢々判斷の公平を缺きしことあるを惜まざるを得ず。想ふにカルヴンはルーテルの膽汁質、ツ井ングリーの多血質なりしに反して、非常の神經家なりしが如し。彼は些細の過、寸毫の異見と雖も、それを假借するの雅量なく、一たび其敵と争ふや、之を窮追して其死處を見届けざれば安んぜざるの風あり。カルヴンがジュネーヴ教會に行はんとせし法規は、極めて嚴密のものなりき。牧師を惡口する事、教會に缺席する事、浮華なる俗謠を唱する事、豪奢を行ふ事、及び夫婦親子間の喧嘩の如き瑣事を筆頭として、

依然嚴重を旨  
とす英國清教  
徒の風がカル  
ヴンに見る  
所多きを  
へし



處刑せられし  
者の統計

いかに些細なる私行と雖も、悉く教會の制裁を洩るゝを得ず。是に於てか反則者續々起り、その處刑頻繁を極め、精神上の罪は(5)刑法上の罪(Crime)と同一視せらるゝに至れり。其犯罪の多數は、今日の吾人より見れば、毫も罪惡と認むべからざるのみならず、寧ろ滑稽の感を生せしむるものなきにしもあらず。例せば宴席の舞蹈の如き、七十歳の婦人が廿五歳の男子と婚せし事の如き、理髮師が加特力教の僧の頭を剃りし事、法王を善人と言へりし事、説教中に笑ひし事の如き、瑣末の事のために法庭に訴へられて刑を受けしなり。親を打擲せし一小兒は、斬せられ、將に母を撃たんとして未だ果さざりし一子は、鞭撻を加へられし上市外に放逐せられ、**ボギオ**十五世紀の始に時めきし伊太利の一文學者の滑稽文學書を讀みし一紳士が、廿四時の拘留に處せられし上、該市立退を命ぜられしが如き事例に徴するも、當時の法文のいかに繁縟過酷なりしかを想像するに足れり。如上の細事にして既に斯の如し。況んや異端邪説の徒に於てをや。一五四二年—一五四五年間に

全市を廓清せ  
んとす

死刑に處せられし者五十八人、放逐せられし者七十六人あり。その頃市内に惡疫の流行せしことありしが、當時の人民はそを妖婦等が魔術を使ひし結果なりと信せしより、牧師等も亦其迷信に與みして、魔術使と目せられし婦人三十四名を捕へて之を焚殺せり。中には冤罪に死せしものもあらむ。惘然の至りならずや。

羅馬法は個人を國家に服従せしめしが、**カルヴン**は個人を教會に服従せしめんとしたり。彼は爲政者が宗教上の事件に干渉するを許さざりしに拘はらず、爲政者は教會を扶けて其命令を遂行すべき義務ありと爲せり。政治法律の力を以て思想及び信教の自由を束縛するの不道理の如きは、十六世紀に棲息せし彼に取りて、寧ろ了解すべからざる咄々怪事なりしならむ。此故に彼は政治と刑法の力を藉りて、**ジュネーヴ**市の道徳的廓清を企てたりしなり。最初より首として彼を輔佐せしは教會の評議會なり。此會は六人の牧師と十二人の長老より成り、**カルヴン**は其議長たり。或程度までの犯罪者は此



會合に於て處罰するの權あれども、稍々重大の事件は之を市議會に廻はさるべからざる規定なり。而してその市議會は前に述べし如く、小議會と二百人議會との二つに分れて、双互の關係も複雑なりければ、反對者の乘すべき方面は寧ろ濶かりき。カルヴンの態度の嚴刻に過ぎて市民の不平増加するに方り、反對運動は續々起りぬ。

最初の反對者  
カステリオ

第一の手強き反對者はカルヴンの友人セバチオンカステリオなり。彼はサボアの人、少時リオにて人文學を修め、新教の賛同者となり、カルヴンのストラスブルグに住みし時、嘗てその家に寄宿せしことあり。後聘せられてジュネーヴに於ける學校の教師となりしが、彼が聖書に對せし所見稍批評的にして、カルヴンの意見と合はず。例せばソロモンの雅歌は道德宗教の書と言はんよりも、寧ろ戀歌と見るを適當とすと唱へしが如きは、痛くカルヴンの考と齟齬せり。聖書の文學的價値が自由に品隲せられ、又天啓に進化發展の痕ある事を明かに承認せられたる當今の立場より考ふれば、カステリオの説毫も

カステリオの  
見識時流に絶  
す

怪むに足らずと雖も、言々句句神のインスピレーションに成りたりといふ説の行はれたる昔日の立場より見れば、其説の危険素より言語に絶せしならむ。故にカステリオが牧師の職に轉せんことを願ふや。市會の之を許せしに拘はらず、カルヴンは之を峻拒し、遂に彼を放逐せり。兩者は爲に畢生の仇敵となりぬ。カステリオ夙に信仰上の事に關して、強迫手段を用ふるの不道理を唱へ、セルベトスの事件につきても(此事後文に詳かなり)極力之に反對せり。此點に於ては、彼は確かに時流に超えたる卓見の士なりしを見るべし。

自由主義者の  
反抗

カルヴンの嚴重その度を越えたるに反抗して起りし自由主義者なり。一は心靈主義と自稱する者にして、他は政治上の自由主義前者なり。此説は十六世紀の初め、佛國北隅のリユ市(Lille)に於てコツペンなるものが首唱したるなり。キリスト教の福音に萬有神教の説を加味して、善と惡、徳と罪との差別を無視せんとする弊に陥りしもの



とす。一時フランス王の妹マルガレツトの翼賛を博せしより、佛朗西に於て勢力を占め、又陰かにジュネーヴ市を侵かす。該市に於ける領袖は元舊教の僧たりしアントワーヌポツケーなりき。その所説カルヴンの主義方針と正反對にして、教會の基礎を顛覆せん虞ありしを以て、カルヴンは全力を盡して之れを驅除したり。蓋し此徒は一般史家の誤り傳へしが如き一大徒黨とはなり居らざりしなり。

一五四六年更に重大にして複雑せる衝突起れり。そは市の小議會の一會員にして夙にカルヴンを忌み嫌へるピエールアモー(Pierre Ameaux)が或席上にてカルヴンを罵詈雑言し事にその端を發せり。カルヴン之を聽きて以爲らく、我は神の言を解釋する特權を有す。故に我を謗る者はキリストの名譽を損するものなり。かゝる輩は斷じて容赦すべからずと。或意味に於てはカルヴンは自ら法王の地位に立てり。彼は事實に於て自己の無謬權を信じ、又自己の成敗を神の成敗と同一視せしなり。彼の強き所以茲に在り。而して彼が他人に

ピエールアモーの裁判沙汰

對して嚴刻に失せし理由亦等しく茲に在り。宗教の利弊兩つながら見るべし。アモーの裁判沙汰は長びきぬ。小議會の意見は兩分して纏らず。アモー跪坐して「神と政府とカルヴン」に赦免を乞ひぬ。カルヴン尙聽さず。跣足脱帽、シャツ一枚を纏ひ、手に松明を携へ、市内を引廻されて赦罪を求むるに至り、カルヴンの意漸く解くるを得たり。

市の舊家にして有力者なるアミ井ペルラン(Ami Perrin)フランソワヴァーアル等が或祝宴の場合に舞踏せし爲、カルヴンと衝突を來しぬ。數年に涉りて市全體の大問題となり、ベルン市の干涉を招致し、二百人議會の臨時召集となり、不幸なるヴァーアルの友人グルエーは其連累として拷問を受けし上斬せらる。一時はペルラン黨勝利を占めてカルヴンの地位危殆に瀕せしことありしが、結局堅忍不拔なるカルヴン派の勝利に歸し、ペルラン黨の者は或は逃亡し、或は刑せられて事落着したり。此際カルヴンの爲に幸ともなり又不幸ともなりし

アミ井ペルランの擲着



亡命佛人一千三百七十六人在住を許さる

ホルセク氏の運命豫定説を攻撃す

は佛國のユゲノー徒の多くジュネーヴ市に逃げ來りし一事なり。カルヴンは可成く彼等を保護して自己の勢力を張らんと欲し、其中の有力者を選抜して牧師たらしめしが、ペルラン等は市民の愛郷心に訴へて、彼等を外國人として排斥せしめ、故らに法律を設けて容易に居住を許さず、殊に市民權を得る事を困難ならしめたり。然れども一五四九年までに在住を許されし佛人一千三百七十六人に及べり。是等亡命客の中にはカルヴンの繼續者なるテオドルベザ、リオンの豪商ギヨーム・トリの如き名士もありしなり。教理に關してカルヴンと争ひし者既にカステリオありしが、其後又ジエローム・ボルセクとミカエルセルベトスの二人を出せり。前者は、カルヴンの教義の金城鐵壁と目せられたる運命豫定説に對して、攻撃の矢を放てり。彼いふ「此説は神を以て一大虐君となすものなり。神が吾人を受納し或は拒斥し給ふは、吾人の信仰の有無に據るものにして、神の豫定に基くにあらず。カルヴンにして此説を墨守せ

ホルセク放逐せらる

セルベトス事件

ば、彼は聖書を正當に理解する者に非ず」と。ボルセクは公然此批評を公私の集會に於て明言せしものから、良し以前は親交ありしにせよ、カルヴン争でか彼を假藉すべき。ボルセクを見るに惡魔の使者を以てし、彼を獄に投じ、状を具して市廳の裁決を仰ぐ。吏員躊躇して決する能はざりしを以て、バセル、ベルン、チューリツヒ等の牧師會の意見を問ひしに、彼等は寧ろ寛仁の處置に出でん事を勸告し來れり。カルヴン之に従はずして一五五一年十二月終に此の大膽なる批評家を追放す。

セルベトスとカルヴンの争は一層激烈にして、其結果甚だ悲惨なり。世人概ねセルベトスに同情しカルヴンの爲に惜む。但し濃厚なるメラנקトン及び瑞西改革家の多數はカルヴンの處置を正當とせり。若し夫れジュネーヴに於けるカルヴンの位置よりいへば、彼は此事件の爲に其勢力を加ふるを得たりしなり。一五五三年の夏頃ほど、カルヴンの地位の危かりしはなかりしに、セルベトス事件



セ氏の小傳

の落着と共に彼の地盤固まりぬ。抑もセルベトスは西班牙の北部アラゴン州の人、カルヴンと同年齡なり。思辨力に富み、批評に長じ、才幹倫を抜き、且膽力あり。確かに一個の人材たり。その履歴明瞭ならざれども、學殖該博なりしことは疑を容るべくもあらず。醫學に熱心にして往々新論を唱へたり。夫れより約百年後にハーベ井の發見せし血液循環説の如きも、セルベトス既に之を唱道せりと見るべき證據あり。彼はヴ井レニユーヴといふ假名を用ゐて瑞西、獨逸、佛國等の諸市を轉々流寓せしが、一五五四年に至りヴ井エナ市に落着き、醫を開業し、僧侶及び學者等と交る。彼又カルヴン エコラムバチウス、カピトウ等の改革家と會談せし事あり。其博學と時流に超脱せる見識とは、終に彼をして宗教に關する大膽なる新説を公にせしめたり。一五五三年の出版にかゝる『基督教の挽回』と題する書籍即ち是なり、その書今に存するもの世界に二あり。一は巴里に他はヴ井エナに保存せらる。要するにセルベトスの説は十六世紀の後半に出でたるソシ

セ氏の「基督教の挽回」

卓抜の見

古來時勢に先んずる者は其告を蒙る

又スの説に似たり。彼は三位一體論、キリスト神性説、及び幼兒受洗の事を排斥したり。其結果として彼はキリストの前生を否定し、奇跡的懷妊の説をも承認せざりき。カルヴンの運命豫定説を取らざるは勿論、舊約より新約に通じて天啓に進歩變遷の痕あるを認めたり。古來時勢に先んじ衆議に反する者は、概ね其咎を受けざるはなし。ガリレオ、フルノー、ベーコン、トマスモーア、ヤンプス、フムボルト、コペルニクスの如き、皆然らざるはなし。況んやセルベトスの如く。廿世紀の今日に於てすら、尙或一部に異端視せらるゝ程の新説を、四百年前に公言するに於てをや。

カルヴンはセルベトスと屢々通信を交へ、且其著『基督教綱要』を送りしに、セルベトスは之に自己の批評意見を記入してカルヴンに返送せり。カルヴン之に由りてセルベトスの意見の大體を窺ひしが、其後彼の著述『基督教の挽回』を見るに及びて、依然ヴ井レニユーヴの名を用ゐたれども、其實セルベトスの著作なる事を看破し、證據



セルベトス危  
きを留して捕  
はる

書類を纏めてウヰヰエナの當局者に訴ふ。セルベトス容易に罪に服せず。久しく囹圄に在りしが、終に脱獄して諸處を徘徊し、伊太利のナポリに赴かんとして暫くジュネーヴに逗留中、不幸にも露顯して縛に就く。カルヴンは彼を蛇蝎視して最初より死刑に處せん考なりし。而も彼は手續上、教會の評議會及び市會の承認を経ざるべからず。平生カルヴンに懾焉たる自由主義者は、此機を利用し、セルベトスを助けて、其勢力を回復せんと計りしものから、宗教問題は同時に黨争問題となりぬ。議論と紛争を重ねし末、カルヴンの意見遂に徹底して、セルベトスは一五五三年十月廿七日、焚殺せられたり。『永遠なる神の子イエスよ。吾を憐みたまへ』とは彼が火焰の中より發したる苦悶の叫びなりき。去る明治廿六年、彼の三百五十年に當り、ジュネーヴ市民彼の殉死の地に、壯麗なる紀念碑を立てぬ。セルベトスの死に同情する所の天下の宗教家は宜しく目前の小セルベトスに對して寛容なるべきなり。

悲惨なるセル  
ベトスの最後

ペルラン黨其  
痕を絶つ

セルベトス事件がカルヴンの勝利に歸してより、ペルラン以下の自由主義者は大に其勢力を失ひしが、一五五五年、その末輩無法の暴行を爲して市の秩序を破りしより、其黨の首領等多くは刑臺の露と消え、少數者は外國に遁れしを以て、久しくカルヴンを敵視したるペルラン黨全く其痕を絶ちぬ。その後間もなく亡命のユゲノー徒約二百五十人が市民権を授けられし事も、亦大にカルヴンの勢力を加へし證據と見るべし。一五五八年に至り、永くジュネーヴの上に覇權を握れるベルン市と、始めて對等の同盟を結ぶことを得たり。

大學の創設

晩年に於けるカルヴンの功業として特書すべきはジュネーヴ大學の創立なり。是より以前既に學校の設備ありしと雖も、其程度低くして不完全たるを免れざりき。唯神學部のみは、カルヴンが全力を注ぎしを以て、稍出色の評あり。一五五八年、市の協賛を経て適當の地をトし、翌年の春より建築に着手せり。老後カルヴンの右腕となりしテオドール・ベザ校長となり、教師には佛人多數を占めしが、財政

テオドール・  
ベザ校長とな  
る



上の困難ありし爲め容易にカルヴンの思ふ如く渉取らざりき。彼が世を逝りし一五六四年普通科に二百名、高等科に三百名の生徒あり。加之高等科を修めし者の多数は重もに外國人にして佛、英、蘇、獨、伊、瑞及びネザールランド等の諸國より集り來りしを想へば、此新設大學の評判いかに高かりしかを察知し得べし。而して是等の青年が皆カルヴンンの薫陶を受けて、其故國に歸るに及びては、其感化の普及する所極めて廣大なりしことを記憶せざるべからず。然るに此學校創立の年よりカルヴンは病羸の人となりぬ。加之一五五九年、佛王ヘンリ二世と西王フザリツプ二世との戦が、後者の勝利に歸してカトウカムフレシの和約成り、加特力教の二強國今や相約して新教の撲滅を圖らんとす。ジュネーヴは最爾たる一小市にして、佛國の新教徒を養成する所の温室たり。嘗て之を領せしサボアは、今や年壯氣鋭のエムマヌルフザリベルト侯を戴きて、領土の擴張に汲々たり。嗚呼危い哉、ジュネーヴの位地。カトウカムフレシの和成ると聞くや、『吏員も、牧師

カトウカムフレシの和約後に於けるジュネーヴの危殆

一憂一喜

も、貴族も、職人も、皆狂奔して市の防備に着手せり。病羸に在りしカルヴンの憂慮想ふべきなり。此秋に當り電光一閃、漠々たる暗雲を破り來る。何ぞや。ヘンリ二世王變死の報是なり。王はその臣下の一武士を強いて馬上の試合に立合はしめ、自ら眼球に傷き、その爲め終に物故せられしなり。一憂一喜、佛國人の爲に哀悼せられし王の逝去は、圖らずもジュネーヴを累卵の危きに救へり。

一五五五年自由主義者の敗れし後は、カルヴンの地位一段鞏固となりぬ。市民咸彼を呼ぶに先生を以てし、他の國人は往々彼を法王若くばハリファに擬へたり。彼は性來強壯の人にあらず。彼がカステリオセルベトス等に對せし過酷の處置は、幾分か其不健康の状態に歸因すといふものあり。ツザンダリーの快活洒脱と、ルーテルの潤達と愛嬌とは彼に於て見るべからず。而も彼は確信の人、義烈の士なり。神命の存する所に直往猛進して、氷刃を置さんとするの概あり。其反抗の隆なるに方てや。街上の野犬を呼ぶにカルヴンの名を以て

カルヴンに敵視する者絶きす



卑怯なる剛膽

繁劇なる生涯

カルヴンの  
受領すへき金  
現動章

せしものあり。夜中幾度となく門前に發砲せしものあり。彼嘗て單身赤手、狂亂せる暴徒等の劔影に分け入りて之を鎮撫せしことあり。敵は殆んど其威嚇手段を盡して彼動せず。剛膽鐵腸の士にあらずんば堪ゆべからざるなり。而も此の如き非凡の大勇氣は彼の天性に非ずして、彼が大能の神に信賴したるの結果なりし事を記憶せざるべからず。蓋し彼は平生口癖の如く、我は卑怯者なりと啣ちたればなり。彼が奮闘の生涯は、亦實に平和的事業の爲にも繁劇なる生涯なりき。彼は一個年に平均三百八十餘回の説教と百八十回許の講演を爲し、歐洲各國に散在せる高卑の教友と文通を爲し、その質問に答へ、諮詢に應じ、又來訪せし諸方の人士と會見したり。その書翰の後世に保存せられしものゝみを算するも、四千二百七十一通の多きに達せり。聖書註釋者としての功勞も亦偉大なり。『聖書翻譯者としての月桂冠はルーテルに歸すべしと雖も、註釋者としての金鵝勳章は宜しく、カルヴンに歸すべきなり』。カルヴンの著書に就ては吾人すでに屢々之

坐して天下を  
動す

を記せしが、尙一の加ふべきものあり。そは一五四〇年に開催せられたる有名なるトレント會議に於て、舊教派の驍將等が規定したる羅馬教の主張に對して、有力なる答辯を試みしこと是なり。プロテスタント教義の組織者たる使命を荷へる彼は、天下の新教徒をして羅馬教に對し各自の立場を明かにするの道を知らしめたり。

### 第九章 カルヴンの事業の感化

カルヴンを中心とせるジュネーヴ市は、亦實に西歐に於ける新教主義の中心なりき。新教徒にして迫害を蒙れる輩は、皆此小共和市に避難し來れり。又ジュネーヴに養成されたる牧師にして、その郷國の宗教改革に盡瘁せしもの甚だ多し。就中佛朗西の如きは一五五五年



歐洲諸國に及ぼしたるカルヴンの感化

一五六六年間に百二十人の牧師をジュネーヴ市より聘したりき。蘇國改革の烈士ジョン・ツクスは三たび該市に來りてカルヴンの指導を受けたり。英國の清教徒は全くカルヴンの感化に由りて起れりと謂ふも過言にあらざるべし。左ればカルヴン教義の普及せしは佛、英、蘇、瑞、ネザールランド、南獨逸の一部を首席として、波蘭、ホンガリ一等も多少其影響を蒙りしなり。更に新大陸に於ける宗教の中堅を形造れる新英州の如きは、全然カルヴン教義の範圍に歸せしものと見て差支なからむ。自餘の諸國につきては他編に詳説すべき機會あれど、瑞西改革の事は本章を以て終結すべきが故に、カルヴン死後の事を略記せむ。佛語の行はるゝ部分は容易くジュネーヴの方針に従ひしも、獨逸語の行はるゝ諸市、即ちツヰングリーの指導の下に新教を奉せし諸市は、久しくカルヴン派と反目の態度を保ちき。ベルンはその嚴刻なる教規に反對し、バセル市は運命豫定説を嫌ひ、チューリツヒは、晩餐式に關するカルヴンの説の餘りにルーテルの教

中獨西も改革に合同す

カルヴンの教義に於ける近代の自由民権主義を胚胎せり

義に似たるが故に不満足を抱けり。然れどもチューリツヒの牧師ア  
ルリングルが頗る平和穩當の人なりし爲に、一五四九年に至りてカル  
ヴン派との調和成立し、自餘の諸市も漸次其例に倣へり。  
最後に特筆すべきは、カルヴンの教義及び其教會制度が歐米の政  
治に及ぼし、結果なり。ルーテル、ツヰングリーの主義及び英國の  
國立教會は、何れも國家本位にして、人民は信教上國家に絶對的服従を  
守るべき事を教へたるに反し、獨りカルヴンは、國家の主權者の命  
令が神の命令若くは宗教上の眞理と齟齬せし場合には、服従の義務な  
き事を教へたり。佛國のユゲノー徒の歴史は正しく此主義の實現せ  
られしものにして、即ち王權至上主義と衝突したるなり。カルヴン  
は何れの政體をも完全と見做さず、利弊相伴ふものと爲せり。但し一  
個人としては、ジュネーヴの如き寡人政體を便利なりと信せしが如し。  
要するに彼は宗教を本位として、政治を其補助機關と見做したるなり。  
論理上自然の結果として、若し良心の指導に従て自由に神を拜し眞理



を遵守し得ざる場合には、其過失は、國家の主權者又は人爲の法律に存するが故に、之を改正せざるべからずといふ思想を胚胎し來れり。是れ取も直さず十八世紀末に至りて勃興せる自由民權主義の導火線ならずや。カルヴンの教義の傳播すると同時に、ジュネーヴ市に發達したる教會の制度も之と共に採用せられしは自然の數なり。

其制規に依れば、牧師長老等は會衆より推薦せられしものなれば、自ら會衆に對して責任を負はざるべからず。教會の吏員が會衆に向て責任ありとせば、國王始め他の行政官も亦之と均しく人民に對して責任を負ふべきものなりといふ思想自ら發揮せられたり。要するに、カルヴン主義の教會は、立憲代議政體の思想を育成したる學校となりぬ。一六〇四年、王權神授説の熱心家なる英國王ジェームス一世が、『蘇國教會の長老組織は、全く王政主義に背く。その調和の難きこと神と悪魔と調和し難きが如し。此の如き制度廣く世に行はるれば、權兵衛も太郎兵衛も(原文ジャツクやトムやウ井ルやテ井ツク等が)銘々

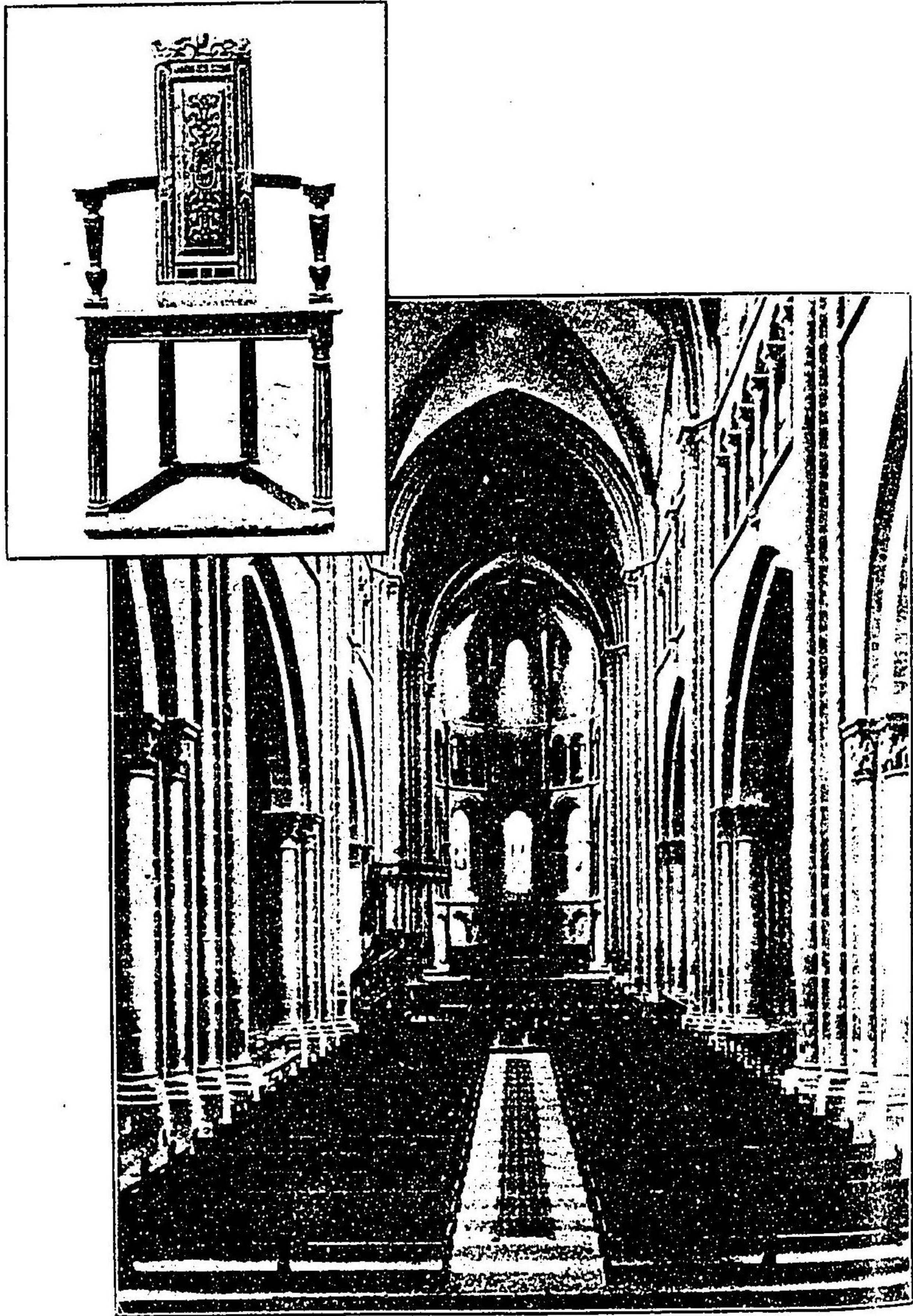
ジェームス一世の歎息

勝手に集會して予及び予の意見予の處置を誹謗するに至らむ」といへりし事に徴するも、吾人は當年に於ける政教事情の一斑を窺ひ知るを得べけむ。

カルヴンの奮闘的生涯は、一五六四年五月二十七日を以て、その終焉に達せり。我永祿七年に當る。即ち信長の全盛時代なり。メランクトンの死に後るゝこと四年。ロヨラの夫れに後るゝ事八年なり。カルヴンその知友に遺言して、葬式を質素にせしめ、且墓碑を立てざらん事を望めり。後の一事に就ては門弟友人等も彼の命に従はざりしと雖も、而も吾人は今日に於てカルヴン埋骨の地を精確に知ること能はず。現存の碑は後代の建立にかゝり、單にJ.C.の二字を刻せるのみ。偉人が後世に及ぼす所の感化は、一基の碑に勝ること萬々ならずや。



カルヴアンは神を畏れて人を恐るゝことを知らざる偉人なり。主一無敵に正義の神に奉事し、その意志を現世に實成せんと欲せし烈士なり。その寡慾清淡は修道僧も尙企て及ぶ能はず。彼晩年胃に患あるや。一日一食を以て足れりとせり。病臥久しきに及びしとき、市民はその經費の多からんことを察し、黄白若干を贈呈せしに、彼は固辭して之を受けざりしのみか、勞せずして俸給を受くるを不快なりとして、之をさへ辭退せんと言ひ出でぬ。病重くして歩行の自由を失ふや。彼は椅子のまゝ運ばれて會堂に至りしことあり。斯の如き生涯こそ眞個に献身犠牲のものといふべきべけれ。(著者)



側内の堂會ルーエボ・ンセしせ教説ガソルカ  
子椅しせ川使が彼び及



宗教改革と人種及び國民

## 第六編 佛朗西の宗教改革

### 第一章 該國の狀態

基督教は一人種に限局せらるゝ宗教にあらずして世界的宗教なる事吾人の贅を待たず。然れどもそが一人種一國民の中に入るや。必ずやその人種その國民の特徴を負ひ來るを例とす。宗教改革の事亦此理に洩れず。ルーテルの唱へし説は、一時天下を風靡せんとする觀ありしが、結局拉丁人種、スラーヴ人種、將たアングロサクソン人種の



改革運動政黨  
と結合す

邦々に行はれずして、ゲルマニ人種の邦々に其根據を固ふしたり。獨逸及びスカンヂナビアに歡迎されたる宗教改革を、ラチン人は如何に待遇せしか。法皇廳の所在地なる伊太利と、殘忍なる宗教裁判の本場なる西班牙に、一時盛んに其贊成者を得たりしも、嫩芽の未だ延びざるに當りて迫害は之を芟除し去れり。拉丁人種の中にて最も多く宗教改革の影響を蒙りしは佛朗西なり。該國に於ける改革運動は先づ人文學者に由りて唱導せられ、中等階級の人民中之を歡迎するものありて、一部の勢力を形造りしが、終に政治上の關係より有力なる貴族皇族等之に加盟して一大政黨と成りぬ。然れども加特力教の信仰が、一般人民の心に浸潤すること深くして到底多數を制する能はざりしを以て、獨逸に於けるが如く國民的の運動たる能はずして止みぬ。左れば佛朗西の教會及び僧侶の位地が、他の邦々に比して道德上高尚の狀態にありしかといふに、決して然らず。高僧輩が俗界の名譽富貴に眷戀たる、修道院の紀律頹敗して僧侶の風儀の壞亂せる、又彼等の無

權徒の狀態

佛朗西法王との關係

學にして愚昧なる事は絶えず世人嗤笑の題目となり、說教壇に於ける攻撃の材料となりしほごなり。要するに佛國僧侶の狀態は、十六世紀のヴォルテールなるエラスムスが、その名著「暗愚の讚揚」中に、その特得の靈筆を弄して罵倒嘲笑の辭を浴びせかけたる一般の緇徒と毫も擇ぶ所なかりしなり。

設し佛朗西が、他の諸國に比して幾分か改革の必要を感ずること少かりし點ありとせば、そは該國の司權者が十四世紀の始め以來屢々羅馬法王に反抗し、或は擅に彼等を籠蓋して、英國のヘンリ八世が遙か後に漸く占め得たりし所の利權を、夙に保有し得たりし一事に歸せずんばあらず。フキリツプ四世が法王ボニフエース八世と權を争ひ、彼を屈辱してその欲する所を遂げし事は、端なくも七代の法王をロイン河邊のアアキニオンに蟄居せしむべき、即ちバビロニアの囚擒一三〇九—一三七六年間端緒を開けり。降てチャールス七世の代に於ける一四三八年のブラグマチック條例の締結は、明かに佛朗西教會の



佛國に宗教改革の必要甚し

自由と特權を保証し、法王の權利を制限する所の憲章なりしなり。此憲章はル井十一世の時之を廢せしと雖も、事實上の關係は依然前日と異なる所なかりき。ル井十二世は表面上再び以上の憲章を恢復せしが、フランシス一世は一五一六年更に之に代ふるに他の Concordat (法王と王との協約)を以てせり。此協約文は、その大要に於て従前の憲章と大差なく、寧ろ佛朗西の教會が法王の支配を受けずして、國王の統治權の下に立つべき事を一層明瞭にせしものなり。此の如き事情なるを以て、十六世紀の始め、歐洲各國の帝王が種々なる利益の打算より、宗教改革を歓迎するに當り、惟り佛王は之を賛成すべき必要を感せざりしなり。

## 第二章 人文學と宗教改革

人文學者の巨擘  
Jacques  
Lefèvre

ルフェーヴル  
ミルーテール

外部より改革を促がし、ものは古文藝の復興なり。佛國に於ては、宗教改革と文藝復興との關係頗る密接なりき。而して後者の地位よりして前者の地位に移り、新學問を鼓吹すると同時に宗教上の革新を促がしたる者多きが中に、ジャツクルフェーヴルは蓋し其首座を占むべき人物ならむ。彼は一四五五年の頃、カルヴヰンと同じく、ピカルデ州の一小村に生れ、巴里大學を卒へて桑門となり、伊太利に遊ぶこと數年、歸國の後巴里大學に教鞭を取り、數學と哲學を擔任し、殊にアリストートルの哲學に私淑す。五十歳の頃より専ら神學を究め、詩篇及びパウロの書翰を拉丁語に翻譯し、之に註釋を附して世に公にせり。信仰に由りて義とせらるゝといふ救の教理と、聖餐の教理に關しては、彼は殆どルーテルと同一の考を抱きしなり。而も此事たる、ルーテルが其持説を公にせし以前の事に屬するが故に、彼はルーテルより之



を學びしに非ず。一五一二年の頃、ルフェーアルは其門弟にして後ち雷名を天下に馳せたるウ井リアムフアーレルに向て、『神は此世界を革新せむ。而して年若き貴下はそを目撃するを得可けむ』と語りしことあり。然れども彼は天性温和にして其思想も神秘的の傾向を有し、ルーテル、フアーレル等の如く、諤々の辯を揮ひ、激越の文を作りて、自説を張り他を攻撃せざりしを以て、目覺ましき波瀾を生せず。

又彼の著書の播讀者も少數の學者に限られたり。佛朗西に於て宗教上の新説を唱へしはルフェーアルなりしも、實地に其主義を行はんと試みし者は彼の弟子にしてその後モ一の監督に擧げられしアリソンネ其人なりとす。アリソンネは門閥の出なり。一四七〇年に生れ、教界に入らんとする目的を以て高等教育を受け、三十五歳にして監督となり、久しく巴里の富裕なる一寺院を監督せしが、一五一六年モ一の監督に轉じ、ルフェーアルの新説に私淑し、そを其教區に行はんと欲し、新主義の説教者を任用して區内を巡廻せしめ、又ルフェーアルを筆

モ一の監督  
Brignonet

王妹マルガレ  
ット人文學者  
を保護す

頭とし、尙同門の朋友にして其意見を同ふせるフアーレル、ルーセル等を聘してモ一に居住せしめたり。左はいへアクソンネは、主義のため奮闘せんとする義烈の士にあらず。彼は順風に帆を揚げて快走するを喜めども、暴風怒濤を忍び、百難を排しつゝ、猛進するを欲せざるなり。要するに佛朗西改革史の初期に於ては、ルーテルの如き、ツヰングリーの如き、カルヴシンの如き、硬骨にして有力なる人物あらざりしなり。ルフェーアル、アリソンネの如き、慧敏にして而も薄志の人々をして、幾分か其活動の餘地あらしめしは、フランシス王の妹マルガレットの功多きに居る。マルガレットは少ふして才智絶倫、時勢に率先して新學問を修む。伊、西兩國の語を善くし、拉丁、希臘の古語に通じ、更にヘブライ語を究め、原語に由りて聖書を研究したり。その師とせし所の人々皆人文學者なりければ、マルガレットは其感化を蒙りて希臘、羅馬の哲學、及び基督の教旨を尊崇せり。彼女は一五〇九年アロンソン侯に嫁ぎしが、良人死せしを以て、一五二七年ナバールの



母 Jeanne d'Albret

王ヘンリ・ダルブレイに再嫁し、女子ジャンヌ・ダルブレイを生む。是れ即ちヘンリ四世の母にして女丈夫の譽高き婦人なり。扱てマルガレツトは、兄なるフランシス王の信用厚く、又人文學者ルフェーブル・アリソンネを保護して暗に彼等の運動を扶けたり。フランシス王も一時は宗教改革を採用せんとする傾向を示せしが、政界上の必要は王を驅りて屢々その反對の方針に出でしめたり。

ルフェーブルの聖書翻譯

一五二三年の夏、ルフェーブルは四福音書の佛語譯を公にし、引つゞきて新約書全部に及べり。蓋し此翻譯は概ねジャンドレリーの譯に基きて、之に訂正を加へしに過ぎざりしなり。左はいへルフェーブルの佛語新約聖書の刊行は多大の好結果を生せり。一般人民をして聖書の智識を得せしめ、且新教主義の信仰の基礎を聖書に据えしめたり。佛國に於ける異端反對の聲は、ルフェーブルの著述に反響として起りしにあらず。寧ろルーテルの運動が獨逸に於て八釜しくなりし餘波として、佛國に於ける同一思想を抱ける輩が、漸次攻撃の標的となりし

ソルボンヌの起源

が如し。佛朗西に於ける改革運動はルーテルを宗とせず。寧ろ地理上相接近せる南獨逸及び瑞西の影響を蒙れること大なり。その初期に於てはストラスブルグのアーケル、カピトウ、バセルのエコラム・パチウス等と親密の關係を結び、其後期に至りては、ジュネーヴのカルヴシンを最大の指導者に仰ぎしなり。想ふにルーテルの言説が獨逸國民の思想に投合せし如く、カルヴシンの言説が佛朗西人民の性情に適合せしが爲ならん。

當時佛國に於ける保守的思想の根據地として有らゆる革新思想に反對せしものを、巴里大學の神學科即ちソルボンヌと爲す。此神學部は十三世紀の半頃ル井聖王の侍僧たりしロベール・ド・ソルボンの創設にかゝり、爾來發達して終に該大學の首腦となり、佛朗西は愚か、歐洲全土の思想界に重きを有するに至れり。蓋し十五世紀の始めコンスタンツの大會議に、ゲルソンがソルボンヌを代表して此會議の輿論を指揮せし頃は、蓋しその全盛時代なりしなり。降て近世期に入



り、人文學大に起り、續いて宗教上の新説行はれんとするに當り、此神學部には活眼深識の英才なく、徒らに古きを守りて時勢の進歩に逆ひしより、一時は新教に反抗してその暴威を揮ひしと雖も、復た昔日の如く歐洲の思想界を指導する能はざるに至れり。ロヨラ、ザビエール、レーネツ等を始めとして、その他のゼスイツト協會の創立に參加せし有爲の青年等が、巴里大學に在學せしは、恰もソルボンヌが保守思想の淵藪たりし時代なりしなり。

ソルボンヌ保守思想の集窟となる

### 第三章 對新教改革の動搖と軟硬二種の改革家

モーに集合せし改革派の諸星が新主義を説くこと二年有半の後ソ

迫害の端緒

フリソンの爵位

フランシス一世の對外政策

ルボンヌ又は公然ルーテルの著書を排斥し、巴里高等法院はそれを秘密に所有し若くは繕讀する者を、罰金又は禁錮に處すべき事を布告せり。ル井ドベルキンの著書も亦異端を説くものとして非難せられ、其一部分は燒棄を命ぜらる。フリソネは元來教會を内部より改善するを目的として、加特力教會より分離するの意なかりき。世論の反對漸く強く、又ファール等が稍過激なる説を吐くに及びて、彼は愈々退嬰に傾き、自己の教區に命令して、ルーテルの著書を読み又は其教理を信する事を禁止せり。改革主義のファール終にモーを去る。

フランシス一世が終生の對外政策は、ハプスブルグ家を抑へ、ヴァロア家をして歐洲に雄視せしめんとするに在り。カロロ五世との第一戦は一五二一年より一五二六年に涉れり。伊太利はその戰場に供せらる。佛軍屢々利を失ふに及びて、フランシス親ら大軍を指揮してアルプスを越え、ミランを回復せしが、不幸にしてパビアの戦に敗れて捕虜となり、マドリッドに幽せられぬ。佛朗西に於ける新教徒の追



ペザベルキ  
ンの死を歎惜す

害は、此戦争の際即ち一五二五年に再發したり。佛語の聖書は焚かれ、モ一の説教者は放逐され、ルクレルクといふ羊毛職人は此年の三月、ツツにて焚殺されたり。是れ蓋しフランシス一世がカロロ五世帝と有利の和約を結ばんが爲に、法王の意を迎ふるの必要ありしを以てなり。フランシス釋されて國にかへりし後、迫害は一時止みぬ。先きに放逐されたるルフェールは召喚の上、一皇子の師傅に擧げられしが、此は瞬時にしてその方針忽ち舊に復し、往年勅命によりて危き生命を助かりしベルキンは、再び異端の嫌疑を受けて捕はれ、一五二九年四月終に刑臺の露と消えぬ。テオドール・ペザ歎じて曰く、「設しフランシスにしてサキソニアのフリードリッピたるを得たらんには、ベルキンは佛朗西のルーテルとなりしならん」と。蓋し硬骨の一丈夫なりしを知るべきなり。

抑もフランシス一世は異端者に對して何等一定の政策を有せず。常に猫眼的の轉變を爲せり。王がその政策をしかく頻繁に變更せし

對外策と迫害  
の手加減

動機は主として其外交に基けるが如し。法王と提携せんとし、或はカロロ帝と表面上和する時は、概ね國內の新教徒を迫害し、又獨逸の新教諸侯若くば英國と同盟して以てカロロ帝を苦しめんと計る時は、必ず寛大の態度を以て新教徒に臨めり。時としては尙此よりも甚しきものあり。王の感情の一昂一低が直ちに延ひて對新教徒の政策に影響せしことあり。例せば一五三三年に於けるニコラス・コープの就任演説より生じたる騷動は、(此事は三〇一―三頁に詳し)一週間以内に五十名許の入牢者を生せしが、夫より三個月を出でずして王が獨逸の新教諸侯と提携せんとするや。王の態度は掌を翻せし如く一變せり。即ち福音主義の説教を許し、ウ井リアム・ヂュベレーをウ井ツテンベルグに遣りて、獨佛兩國の新教徒の調停につきて、メラクトンの意見を徵せし事の如き是れなり。又一五二九年宗教大會がリン市に開かれし時、該市有名の聖母マリアの肖像の首が亂暴なる新教徒の爲に斬られし時、王は激怒して迫害の再興を命せしが、夫れより四年を経て

王感情に制せ  
られて朝三暮  
四の命令を發す



ソルボンヌの博士の攻撃

全く其方針を一變し、ルーアル離宮に於て公然新教の説教を許せし事あり。蓋しセラールルーセルこそ當時ルーアルに於て其雄辯を揮ひし者の巨擘なりしなれ。ソルボンヌの一博士歎じて曰く「男子は皆ルーアル宮に赴き、予の周圍には唯老婦人の残れるを見るのみ」と。然るに一五三四年十月十八日に起りし貼紙事件は此形勢を頓挫せしめたり。由來大業が未鞫の爲に不測の損失を蒙ること往々これあり。新教徒中の亂暴なる徒輩陰かにマスの禮式を罵詈譏したる檄文を草し、それを印刷して夜中巴里市内到處に貼附せしのみならず、王の寢室の戸に之を貼附せり。舊教徒の多數を占め居る巴里市民の憤怒譬へんに物なく、王の逆鱗亦非常にして、異端撲滅の命令立るに下り、一ヶ月を出でずして四十名許焚殺せられ、七十名許外國に逃走して其財産を沒收せられたり。名士クレルモン・マロー、マチュレン・コルチエー等此亡命の中に在り。然るに其迫害熱も須臾にして冷却しつ。王はチユベレーの献言に従ひてメラנקトンとアーケルを佛朗西に招聘せ

貼紙事件

微温的改革案

んとせしなり。チユベレー及び一五三五年の夏大僧正となりしアントワーヌ・チユブール等は何れも佛國に新教を扶植せんとし、又獨逸に於ける同教徒と提携を圖らんと努めしが、フランシスの政策の豹變餘りに甚しきより、獨逸の諸侯及び神學者等は遂に王の心事を疑ひて其手に乘らざりき。豈唯獨逸人のみと謂はんや。佛人にして熱心眞實に新教主義を懷持せし輩は多くは國外に逐はれ、或は自ら進んで外國に移住し、茲に信教の自由を索めたり。その後王が寛大なる勅令を發して歸國を勸むるや。彼等は走馬燈に似たる王の政策に懲りて容易にその命に従はざりき。

ルフェーアルの如き微温的改革家に由りて創唱せられし改革主義は、多くの同種類の人物を呼び起せり。チユベレー兄弟の如き、エラスムスが佛朗西の異才と評せしピユデーの如き、博學にして滑稽諷刺の文に巧みなるフランソワ・ベレーの如き、將たマルガレットの保護の下に新教を説きつゝ、而も舊教を離れずして後監督となりしセラール



ルフェーアルの逝きし年にカルヴン其大著述を公にする

ルーセルの如きは、何れも微温的改革家にして、或は人文學の嗜好より、或は經世的打算より、温和なる改革を唱へし人々なり。一五三六年即ち微温的改革家の元祖ルフェーアルが老齡に及びて世を逝りし年は、恰も年壯氣豪の硬骨男子カルヴンがその名著「基督教綱要」を公にせし年なり。カルヴンこそ佛國の新教派が産出したる第一の神學者なりしなれ。第一といふに二様の意義あり。即ち最初の神學者にして又最大の神學者なり。ルフェーアル、ルーセル等は福音を説きしと雖も、實際的にして神學的にあらず。カルヴンが其犀利なる倫理的頭腦を以て聖書的基督教を論述するに及びて、新教徒は始めて明確なる信仰の告白を發見せしのみならず、尙進んで舊教の敵陣に切り込むべき武器を得たりしなり。

#### 第四章 カムブレー和約後に於ける新教徒迫害

カムブレーの和約

カロロ帝とフランシス王との第三戰

フランシス一世とカロロ五世との第二戰爭は、一五二七年に始まりて一五二九年のカムブレーの和議に終れり。之を貴女の和約と稱す(Paix des Dames)。何となればカロロの伯母なるアウストリアのマルガレットとフランシスの母なるサポアのル井スが、専ら媾和談判の衝に當りたればなり。佛王は生擒されたる皇子等の放釋の賠償として、二百萬クラウンを支拂ひ、且伊太利、フランダース及びアルトワに對する要求權を放棄せし事、是れ其重なる條項なりとす。此條約の佛朗西に不利なりし事は言ふ迄もなし。第三戰は一五三六年に開始せらる。即ちフランシスが一旦放棄すと宣言せしミランを、其領主が嗣子なくして死せし爲、恢復せんと企てしなり。佛王は苦しまぎれに、異教國たる土耳其の「サルタン」ソリーマン一世と同盟を結び、彼をしてホ